

# おぼたけ遺跡（第5次）発掘調査報告

2006（平成18）年3月

三重県埋蔵文化財センター



出土貝類と土器



須恵器罎(325)



須恵器円面硯(319外面)



須恵器円面硯(319内面)



# 序

志摩半島から伊勢湾口にかけての一带は、三重県下でも屈指といえる風光明媚な地域です。かつて志摩国と呼ばれたこの地域は、古来より海産物の宝庫であり、「海の道」をとおして各地と交流のあった地域です。

今回発掘調査を行いましたおばたけ遺跡は、伊勢湾に浮かぶ答志島にある遺跡です。この遺跡は今回の調査までに合計4回の調査がなされており、縄文時代から鎌倉・室町時代に至る大規模な遺跡であることが分かっています。第4次調査で出土した古墳時代前期の土器は、当地の標識遺物として学会に注目されています。また、おばたけ遺跡の近隣には、国指定重要文化財である須恵器壺（長頸壺）の出土した蟹穴古墳（蟹穴1号墳）や、壮麗な石室が残っている岩屋山古墳などがあります。さらに、奈良時代には当時の都であった平城京から「志摩国答志郡和具郷」と記載のある木簡が出土しており、おばたけ遺跡こそがこの「和具郷」にあたるのではないかと考えられます。このように、おばたけ遺跡は各時代それぞれに独特の特徴を見せており、極めて重要な遺跡であるといえます。今回の発掘調査成果も、これまでの特徴をより一層際立たせるものであると思います。

発掘調査にあたっては、地元である答志島および鳥羽市在住の方々をはじめ、鳥羽市教育委員会、県の関係諸機関から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

2006年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫



## 例 言

- 1 本書は、三重県鳥羽市答志町字大畑・蟹穴地内に所在するおぼたけ遺跡の第5次発掘調査にかかわる報告書である。
- 2 第5次調査は、答志漁港関連道整備事業に伴い、平成16年度に緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。  
＜平成16年度（発掘調査）＞  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅱグループ）  
          技師 伊藤裕偉 臨時技術補助員 浅生卓司  
＜平成17年度（報告書作成）＞  
          三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅱグループ、支援研究グループ）  
          主査 伊藤裕偉 臨時技術補助員 浅生卓司
- 4 調査にかかる諸費用は、三重県農水商工部が全額負担している。
- 5 発掘調査にあたっては、鳥羽市在住の皆様、鳥羽市教育委員会、および農水商工部・南勢志摩県民局農水商工部水産室から多大な協力を受けたことを明記する。
- 6 報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等を頂いた。記して感謝いたしたい（所属は当時）。  
野村史隆（鳥羽市教育委員会）、畑中英二（（財）滋賀県文化財保護協会）、山中敏史（（独）文化財研究所奈良文化財研究所）、山中章（三重大学）、渡辺博人（各務原市教育委員会）
- 7 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、支援研究グループおよび調査研究Ⅱグループが行った。報告文の執筆は伊藤・浅生が、遺物の写真撮影は伊藤が行った。本書の編集は伊藤が行った。

## 凡 例

### <地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、鳥羽市都市計画図(鳥羽市)、地籍図(鳥羽市若志町字大畑・蟹穴地内、伊勢法務局所蔵)である。
- 2 これら地図類は、地籍図は磁北で示されている。鳥羽市都市計画図は国土調査法の日本測地系による座標第VI系(旧国土座標)で表現されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
- 3 発掘調査に関する座標は、測地成果2000に対応した新座標第VI系で表記している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏6°20′、真方位は西偏0°17′34″(平成2年)である。

### <遺構類>

- 4 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
- 5 土層図の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版)を基準に、調査担当者が現地で見視した状況による。
- 6 当報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。
- 7 遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。
- 8 遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。
- 9 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。  
S A・・・柱列 S B・・・掘立柱建物 S D・・・溝 S F・・・カマド S H・・・蟹穴住居  
S K・・・土坑 S Z・・・落ち込みなど pit・・・ピット、柱穴
- 10 遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に踏襲しているが、今回の報告にあたって変更したものもある。その異同は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記については、調査時の遺構名で基本的に実施している。

### <遺物類>

- 11 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。
- 12 遺物実測図は、全体を通して通番としている。
- 13 当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
- 14 遺物観察表は、以下の要領で記載している。  
番号……………挿図掲載番号である。  
実測番号……………実測段階の登録番号である。  
様・質……………「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。  
器種など……………遺物の器種を示す。  
グリッド……………調査時に設定したグリッド名を記した。  
遺構・層名……………遺物の出土した遺構や層名を記した。「土器」、「石」などは、それぞれの取り上げ時の区分である。  
法量 (cm)……………遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径、(脚柱)は脚部上端径、(脚裾)は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。  
調整・技法の特徴……………主な特徴を外内(外;)・内内(内;)で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。  
胎土……………小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。  
色調……………その遺物の代表的な色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。  
残存度……………その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。  
特記事項……………遺物の特徴となる事項を記した。

### <写真図版>

- 15 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
- 16 写真図版にのみ掲載した遺物もある。それについては、登録のため、図示した遺物に続く番号を与えた。
- 17 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

# 本文目次

I	調査の契機・経過と行政的諸手続	伊藤	(1)
1	調査の契機	伊藤	(1)
2	調査の経過と法的措置		(1)
3	発掘調査と記録の方法		(2)
4	整理作業とその方法		(3)
II	志摩と答志島をめぐる歴史的諸環境	伊藤	(4)
1	地質と地形的環境		(4)
2	志摩地域をめぐる歴史的環境		(4)
III	調査の成果～層位と遺構～	伊藤	(12)
1	調査区の地形と基本層位		(12)
2	検出した遺構		(12)
IV	調査の成果～出土遺物～	伊藤・浅生	(23)
1	縄文土器		(23)
2	弥生土器		(23)
3	古墳時代前期の土器		(25)
4	古墳時代後期の土器		(25)
5	飛鳥・奈良時代の土器		(26)
6	石製品・鉄製品		(29)
7	中世の土器		(29)
V	調査のまとめと検討	伊藤・浅生	(55)
1	おぼたけ遺跡の地形環境		(55)
2	縄文時代のおぼたけ遺跡		(55)
3	弥生時代のおぼたけ遺跡		(56)
4	古代前半期のおぼたけ遺跡		(57)
5	調査の総括と展望		(63)



## 挿 図 一 覧

- |      |                      |      |                               |
|------|----------------------|------|-------------------------------|
| 第1図  | 答志島遠景                | 第17図 | 出土遺物実測図(2)弥生土器                |
| 第2図  | おばたけ遺跡と周辺の遺跡         | 第18図 | 出土遺物実測図(3)弥生土器                |
| 第3図  | 答志島本誓寺出土の子持勾玉        | 第19図 | 出土遺物実測図(4)弥生・古墳前期             |
| 第4図  | 答志島和具の現況             | 第20図 | 出土遺物実測図(5)古墳後期・古代             |
| 第5図  | 調査区周辺地形図             | 第21図 | 出土遺物実測図(6)古代                  |
| 第6図  | 明治年間の地籍図と調査区の関係      | 第22図 | 出土遺物実測図(7)古代                  |
| 第7図  | おばたけ遺跡第1～4次調査出土の主な土器 | 第23図 | 出土遺物実測図(8)古代                  |
| 第8図  | 調査区平面図①              | 第24図 | 出土遺物実測図(9)古代                  |
| 第9図  | 調査区平面図②              | 第25図 | 出土遺物実測図(10)古代                 |
| 第10図 | 調査区土層図               | 第26図 | 出土遺物実測図(11)古代                 |
| 第11図 | 調査区内小地区割り図           | 第27図 | 出土遺物実測図(12)古代                 |
| 第12図 | カマドSF8・9平面・立面図       | 第28図 | 出土遺物実測図(13)石製品・鉄製品・中世         |
| 第13図 | 竪穴住居SH25カマド周辺平面・断面図  | 第29図 | 縄文土器復元図                       |
| 第14図 | 掘立柱建物SB33平面・断面図      | 第30図 | 三河地域の影響を受けたと思われる伊勢・志摩地域出土弥生土器 |
| 第15図 | 掘立柱建物SB34・35平面・断面図   | 第31図 | おばたけ遺跡出土の7・8世紀の土器組成           |
| 第16図 | 出土遺物実測図(1)縄文土器       |      |                               |

## 表 一 覧

- |     |                       |      |                         |
|-----|-----------------------|------|-------------------------|
| 第1表 | おばたけ遺跡(第5次)遺構一覽       | 第8表  | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(6)   |
| 第2表 | おばたけ遺跡(第5次)掘立柱建物・柱列一覽 | 第9表  | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(7)   |
| 第3表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(1) | 第10表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(8)   |
| 第4表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(2) | 第11表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(9)   |
| 第5表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(3) | 第12表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物集計表(1～3) |
| 第6表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(4) | 第13表 | おばたけ遺跡における7世紀代の須恵器クロ回転  |
| 第7表 | おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(5) |      |                         |

## 写 真 図 版 一 覧

- |      |                  |      |                     |
|------|------------------|------|---------------------|
| 図版表紙 | 出土した土器と貝類        | 図版9  | 出土遺物(3)弥生土器         |
| 図版1  | 調査区全景(1)         | 図版10 | 出土遺物(4)古墳時代・飛鳥・奈良時代 |
| 図版2  | 調査区全景(2)         | 図版11 | 出土遺物(5)古墳時代・飛鳥・奈良時代 |
| 図版3  | 個別遺構(1)          | 図版12 | 出土遺物(6)飛鳥・奈良時代      |
| 図版4  | 個別遺構(2)          | 図版13 | 出土遺物(7)飛鳥・奈良時代      |
| 図版5  | 個別遺構(3)          | 図版14 | 出土遺物(8)飛鳥・奈良時代      |
| 図版6  | 調査区土層            | 図版15 | 出土遺物(9)石製品          |
| 図版7  | 出土遺物(1)縄文土器      | 図版16 | 出土遺物(10)鉄製品・石製品・貝類  |
| 図版8  | 出土遺物(2)縄文土器・弥生土器 |      |                     |

## I 調査の契機・経過と行政的諸手続

### 1 調査の契機

#### a 開発工事で記録保存された遺跡

ここで報告する調査記録は、平成16年度答志漁港関連道路整備事業に伴って実施したものである。当該道路は伊勢湾に浮かぶ最大の島（面積約5.7ha）である答志島にあり、道路は島北西部の桃取漁港と島東南部の答志漁港・和具漁港とを結ぶことを目的としたものである。

答志島は、行政区として三重県鳥羽市答志町である。答志島は、西部が桃取町、東部が答志町にあたる。島内の現況集落は、桃取町では桃取漁港周辺、答志町では答志・和具漁港周辺の大きく2箇所に分かれる。したがって、当該道路は、島内の主要2集落間を接続するための道路といえる。

当該道路が設定されるまで、答志町と桃取町の間は比較的危険な道路で接続されているのみで、交通事情としては不便といえる状況であった。市営定期船は、桃取～鳥羽と、答志・和具～鳥羽間の2ルートがあるが、桃取と答志・和具の間に定期船は無い。そのため、桃取と答志の間を接続する陸路が必要であった。

ただし、島内での日常生活で、答志と桃取の間を陸路で頻りに往復することはあまり無い。島内に大形店舗は無く、島に住む人々がまとまった買い物をする際には、船で鳥羽市中心部か伊勢市方面まで赴いている。この道路は、まさに漁港間を接続する機能を主目的として設定されたものである。

#### b 答志漁港関連道路整備事業と範囲確認調査

答志漁港関連道路整備事業に関して、三重県埋蔵文化財センターでは路線内の事前範囲確認調査（試掘調査）を数箇所で行っている。本調査により記録保存措置が必要と判断された遺跡は、ここで報告するおぼたけ遺跡のみである。ここでは、当該事業にかかる範囲確認調査の結果を記しておく。

##### ① 蟹穴古墳群

道路は、蟹穴古墳群の背面（北側）を通り抜けるように設定されている。そのため、各所において蟹

穴古墳群の隣地を通過することになった。

このうち、最も接近する蟹穴2号墳では、平成15年6月26日に範囲確認調査を実施した。調査の結果、古墳は路線内には及ばないと判断された。

##### ② おぼたけ遺跡

蟹穴2号墳がある丘陵東裾部から、周知の埋蔵文化財包蔵地であるおぼたけ遺跡が該当する。おぼたけ遺跡の該当範囲は、寺田古墳が乗る丘陵を境に北部と南部に分かれる。

おぼたけ遺跡北部は、平成5年2月12日に範囲確認調査を実施した。その結果、遺構・遺物ともに認められず、本発掘調査は必要ないと判断された。

寺田古墳の乗る丘陵の南東部では、平成15年2月12日に範囲確認調査を実施した。その結果、事業地内全体に遺構・遺物の及んでいることが確認された。ここが、今回の報告で主な対象となる発掘調査地である。

##### c おぼたけ遺跡発掘調査にむけての協議

平成15年度には、実施した範囲確認調査成果をもとに、当事業の主体者である三重県農水商工部・三重県南勢志摩県民局農水商工部水産室と当センターとで協議を行った。その結果、事業地内約1,000㎡については、平成16年度に本発掘調査を実施し、記録保存することで合意した。

年度が変わって平成16年4月には、調査の方法について具体的な打合せを実施した。その結果、以下の方法で実施することとなった。

①発掘調査は、漁港関連道路整備工事の一環として実施する。

②発掘調査にかかる経費は工事費の一部として組み込む。経費の執行は、南勢志摩県民局農水商工部水産室が直接行う。

③発掘調査に必要な機材類は、南勢志摩県民局農水商工部水産室が手配する。

④発掘用具については、改めて手配するの無駄になる恐れがあるため、当センターの用具を持ち込むこととする。

⑤報告書作成費は、作成年度において南勢志摩県民

局から当センターへ別途執行委任する。

以上により、直接道路工事に関わる藤川木組が、南勢志摩県民局農水商工部水産室の指示のもと発掘調査に携わることになった。

## 2 調査の経過と法的措置

### a 発掘調査の経過

おぼたけ遺跡は、これまでに1～4次の発掘調査が実施されている。いずれも鳥羽市教育委員会によるものである。今回の調査は、おぼたけ遺跡としては5回目の調査にあたるので、「おぼたけ遺跡(第5次)」として実施した。

発掘調査を実施したのは、平成16年4月から6月にかけてである。4月27日に、当センターの発掘用具類を搬入し、それと併行して、調査区のグリッド設定を行った。発掘調査は5月12日から開始し、6月30日に全て完了した。最終的な発掘調査面積は、810㎡であった。

なお、現地調査に直接携わった藤川木組は、現地調査にかかる発掘作業員や機材類の調達、および現地の国土座標測量などを実施した。藤川木組を通じて集められた発掘調査作業員は、発掘調査の進捗に応じて増減していただき、多い日で15名ほど、少ない日で5名ほどであった。

なお、平成16年度中の当該調査にかかる業務としては、遺物の洗浄・注記・接合といった出土品の1次処理、遺構図面類・記録写真類の整理などを実施した。これらは、出土遺物等を当センターに持ち帰ってから作業である。

### b 発掘調査の普及・公開

当該発掘調査にかかる普及・公開事業としては、下記のものを実施した。

・現地説明会(参加者約50名、平成16年6月27日。説明会用資料として、「おぼたけ遺跡(第5次)発掘調査現地説明会資料」を配布。)

・第3回考古学研究会東海例会における調査報告(於：三重大学、平成16年8月8日、参加者約50名。報告資料として、「おぼたけ遺跡(第5次)発掘調査の成果と課題」を配布。)

・鳥羽市の広報誌『とぼ』No.1082(平成16年8月1

日号)に、特集記事「古代の答志郡衙か!?～おぼたけ遺跡第5次発掘調査から～」を掲載

### c 文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる文化財保護法関係の諸通知は、以下により行っている(法文・条例は提出当時のもの)。

- ①発掘通知(三重県文化財保護条例第48条第1項、県知事→県教育長)
  - ・平成16年4月15日付け勢農第12-24号
- ②発掘調査の実施報告(文化財保護法第58条の2第1項、県埋蔵文化財センター所長→県教育長)
  - ・平成16年5月7日付け教理第81号
- ③文化財発見・認定通知(遺失物法、県教育長→津警察署長)
  - ・平成16年8月24日付け教生第12-4-16号

## 3 発掘調査と記録の方法

### a 掘削の方法

範囲確認調査では、地表面下約20～30cmまで表土層があり、その下には遺物を多量に含む層が存在することが指摘されていた。発掘調査ではその知見に従い、地表下約30cmまでを重機掘削し、その後は人力による掘削とした。

重機掘削面から約5cm削り込んだところを遺構検出面として精査した。なお、調査地は谷状地にあたり、標高も3m前後と低かったこと、また、調査の時期がちょうど梅雨時であったこともあり、遺構面精査の段階には常に水に悩まされることとなった。そのため、調査区南部に排水溝を設置し、ポンプ1・2台を24時間稼働させて排水させたが、それでも水が引くことは無い状態であった。

遺構図の作成後、調査区北壁沿いに、土層確認のための溝を掘削した。この溝は重機で掘削し、人力で精査した

### b 地区設定

調査区内は、4m四方の柵目で切ることによって小地区(グリッド)を設定している。グリッド線は、道路工事用の座標系に合わせて設定し、北→南に数字、西→東にアルファベット(小文字)とし、グリッド北西隅になる交点を地区名とした。なお、ここで

設定した小地区区限南北線は、国土座標軸南北線よりも3度ほど西へ偏っている。

#### c 出土遺物の回収

出土遺物は、出土年月日と層位・遺構の区別を行い、小地区単位で取り上げている。それぞれの遺物には専用のラベルを現地で入れたうえで、洗浄などの作業を行う当センターへ搬送した。

#### d 遺構図面

遺構検出段階で、1/40の略測図を作成している。これは「遺構カード」として用いるものであり、遺構毎の出土遺物や埋土の状況を記録している。遺構カードはグリッド単位で作成している。

1/40の略測図をもとに、さらに1/100の遺構配置図を作成している。これは、調査区全体の遺構配置を早い時期に認識する必要があると考えるためである。

発掘調査終了後に、正確な全体図作成を作成した。調査区の平面図は、調査区の一部を1/50で、大部分を1/20で手書き実測した。1/50実測とした箇所は、調査区北部の「小山の越」部分（後述）である。

また、個々の遺構で、遺物出土状況などが重要と判断したものについては、1/10の個別実測図を作成した。土層図は、調査区北壁・西壁部分を対象に、1/20で作成した。

#### e 遺構写真

遺構関連の写真は、重要なものを6×9版（ブローニー）で撮影し、細かな記録には35mm版を撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に作成している。

## 4 整理作業とその方法

### a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

発掘調査を実施した平成16年度中に、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業等を行った。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつ専用のラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

当調査にかかる出土遺物の総重量は241.8kgである。出土遺物は、整理の結果、報告書掲載分および参考資料としての手元保管分（A遺物）として11箱、報告書未掲載分（B遺物）19箱となった（平成17年10月段階）。後者については、当センターが占有する収蔵庫で保管し、前者は当センター内の収蔵スペースで保管している。

### b 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、平成17年度に報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、6×7版（ブローニー）で撮影した。撮影した遺物は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

実測図の作成は平成16年度に、遺物写真撮影と図版作成、および遺物の台帳整理と収蔵については平成17年度に実施した。

### c 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

（伊藤）

## II 志摩と答志島をめぐる歴史的諸環境

### 1 地質と地形的環境

答志島は伊勢湾に浮かぶ最大の島で、面積約5.7haである。行政的には三重県鳥羽市にあたり、答志島には答志町と桃取町がある。答志島の周辺には菅島・神島をはじめとした大小様々な島嶼が散在し、もともと風光明媚な地帯である。近年の観光開発や土砂採集によりその景観は次第に損なわれているが、今なお豊かな自然が残されている。

地質的に見ると、答志島は日本列島を横断する中央構造線の外帯にあたる。当地は、その南に形成された長壽変成帯御荷鈴層のうちの宮川層で構成されており、中心となる岩石は結晶片岩で、千枚岩を中心とした組成が認められる<sup>(1)</sup>。おぼたけ遺跡付近にも千枚岩の露頭が各所に認められ、現地表土の大半はこの煤乱土で構成されている。

島の地形は、この宮川層に対する開析谷と、臨海地に形成された海生砂（砂礫浜）によって構成されている。海岸線の大部分は志摩半島で見られる沈降海岸地形を示しており、平地は極めて少ない。

### 2 志摩地域をめぐる歴史的環境

答志島の所在する旧志摩国は、島嶼部を中心とした独特の文化を形成していた地域である。それは比較的古い時期から観察できる傾向といえる。ここでは、志摩地域および答志島を理解するうえで必要となることを記していく<sup>(2)</sup>。

#### a 旧石器・縄文時代の状況

旧石器時代では、ヒロサキ遺跡や次郎六郎遺跡群（旧大王町）などから、ナイフ形石器や有冚尖頭器の出土が報告されている。縄文時代では、費遺跡（鳥羽市）で中期～後期にかけての土器がまわって出土している。また、次郎六郎遺跡群からは石棒の出土が報告されている。答志島からは縄文時代後期頃の土偶が出土しており、それはおぼたけ遺跡から出土したものとされている。さらに、答志島の北東にある大築海島には大築島貝塚があり、晩期の土器や



第1図 答志島遠景(左手、中央奥は神島)

土偶が出土している。

縄文時代の志摩は、東日本の要素と西日本の要素とが接触する地域として重要であるが、その研究はまだまだ始まったばかりである。

#### b 弥生時代の状況

弥生時代は農耕文化が開始された時代として一般に理解されている。志摩地域は島嶼部であり、農耕に適した地ではないが、散在しながらも多くの遺跡が確認されている。

前期の遺跡としては、おぼたけ遺跡と阿津里貝塚がある。阿津里貝塚の出土土器には、前期中葉頃のものも認められる。いずれも明確な集落跡は確認されていないものの、前期の遺跡が存在することは重要である。

中期では、阿津里貝塚で継続して土器類が確認されている。また、今回報告するおぼたけ遺跡第5次調査でも、比較的まとまった量の土器が出土している。当地における弥生中期の特徴は、三河地域で主に確認される土器類が多く確認されることである。三河系の土器は、おぼたけ遺跡のほか、先志摩半島の出土資料である、御座小学校所蔵土器（旧志摩郡志摩町）や三津遺跡（度会郡二見町）などの事例が確認されている。この時期に、伊勢湾を通じた頻繁な交流があったことが想定される。

鳥羽市東部の麻生浦湾に面した白浜遺跡（鳥羽市）



第2図 おばたけ遺跡と周辺の遺跡(1:10,000 国土地理院『答志・浦村・二見・島村・松阪港・伊勢』より)



第3図 答志島本誓寺出土の子持勾玉

では、弥生時代中期中葉頃から古墳時代前期後葉にかけて継続的に集落が営まれた。この遺跡からは骨製品を中心に海の生産用具が多く確認され、小銅鐻や銅鏡も出土していることが特筆される。

弥生時代後期中葉の尾張山中式併行期に至ると、白浜遺跡や貫遺跡などの拠点の遺跡は継続しているものの、全体的には確認できる遺跡が激減するようである。何らかの大きな変革がこの時期に存在したものと推測される。

なお、答志小学校には出土不明ながら石庭丁が所蔵されている。冒頭で述べたとおり農耕にはあまり適さない環境ではあるが、何らかの農業生産行為が行われていた可能性はある。

### c 古墳時代の状況

志摩地域に見られる古墳は、当地を特徴付けるものである。当地の海岸線には前方後円墳をはじめとした古墳群が数多く確認されている。墳墓が海を意識する点は、当地の特質として評価できる。墳形は明確ではないが、おじょか古墳は板石積みで構築された初現期の横穴式石室墳で、その形態的特徴から北部九州地域との交流が指摘されている。当地の海岸部に形成された古墳は、横穴式石室墳、すなわち後期古墳が中心で、それ以前の古墳や木棺直葬墳の確認例がほとんど無いことも注意を要する。

答志島でも丘陵部にいくつかの古墳が見られる。岩屋山古墳は眺望の良い丘陵上に造成されており、そこに立つと伊勢湾や志摩半島を見渡すことができ

る。おばたけ遺跡もこの古墳から全体を見渡すことができる。岩屋山古墳の被葬者とおばたけ遺跡とは密接に関係しているであろう。また、おばたけ遺跡の北約200mに位置する蟹穴古墳からは、国の重要文化財に指定されている須恵器長頸壺のほか、金銅装金具なども出土している。

集落遺跡も海岸線沿いに多い。弥生時代後期の尾張山中式併行期に一端減少をみせた集落遺跡は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の欠山式併行期に至って急増する。貫遺跡からは多孔鏃を含む銅鏃が27点以上出土しており、この時期の極めて重要な遺跡であることを物語っている。切間A遺跡や阿津里貝塚（旧志摩町）では前期段階の資料が充実しており、切間A遺跡では近畿布留式の高杯も伴っている。おばたけ遺跡でも堅穴住居が確認されており、出土した土器類は永らく当該地域の基準資料として用いられた良好なものである。大塚海貝塚からも、前期中葉頃を中心とした土器類の出土が報告されている。これらの集落は狭隘な平地部に形成されているものが多く、海を生活基盤とした人々の足跡を示すものと考えられる。なお、近畿地方から瀬戸内沿岸の各地では、古墳時代の製塩土器が多数確認される傾向にあるが、志摩地域ではそれに該当するものが極めて少なく、生活や生業の方法が大きく異なっていたものと考えられる。

神島の八代神社には数々の優品が宝物として保管されており、その起源は古墳時代に遡る。九州の玄界灘に浮かぶ沖の島と同様、海上の安全祈願を含めた各種の「マツリ」に伴う遺物と考えられる。また、おばたけ遺跡の北東約0.8kmにあたる答志町本誓寺の裏山からは子持勾玉が出土している（第3図）。神島の規模には及ばないかも知れないが、答志島にも神島と類似した祭祀遺跡の存在する可能性がある。

### d 古代の状況

古代の高地域は、律令国家との密接な関係を有する地域である。大伴家持は、「御食国志摩の海人ならし真熊野の小船に乗りて沖辺漕ぐ見ゆ」（『万葉集』）と謳った。志摩国は若狭国と並んで天皇に貢納される贄や調などを調進していた<sup>13)</sup>。当該時期は、古墳時代と並んで志摩地域を最も特徴付ける時期といえる。

志摩国は元々は志摩郡の一部のみであったが、『続

日本紀』養老3(719)年4月28日条には、「分志摩国塔志郡五郷、始置佐芸郡」とある。「佐芸郡」は後の英虞郡と考えられている。このことから、まず「志摩郡」が「答志郡」となり、その後改めて佐芸郡が分郡された、と考えられる。

11世紀頃に成立した『和名類聚抄』には、志摩国として答志郡・英虞郡の2郡が記載されており、答志郡には「答志 和具 伊可 伊権 駅家 神戸」の6郷が見える。ただし、「駅家 神戸」の2郷については、異本では記載の無いものもある。いずれにしても答志郡は4郷ないしは6郷であり、『大宝令』による下郡(当時の郡は大郡[20~16里]、上郡[15~12里]、中郡[11~8里]、下郡[7~4里]、小郡[3~2里]の5等級に区分されていた)にあたる。

各郷の比定地は、「答志」は現在の答志町中心部、「和具」は答志町和具漁港付近、「伊可」は石鏡で鳥羽市石鏡町付近、「伊権」は伊権で伊権宮(志摩市磯部町)付近一帯と考えられている。また、「駅家」は鳥羽市松尾町・岩倉町一帯に、「神戸」は鳥羽市国崎町付近一帯とされている。

さて、『平城京木簡』には、志摩国に該当するものが数点見られる<sup>4)</sup>。そこから、答志郡に相当する事例のうち主立ったものを掲げる。

- ①「志摩国志摩郡手節里戸主大伴部口人 口藻根二斗 口口五年四月廿日」
- ②「志摩国志摩郡伊権郷口理里 戸主大伴部小昨調海藻六斤 養老二年四月三日」
- ③「志摩国志摩郡和具郷御調海藻六斤四月十日」
- ④「志摩国答志郡和具郷難設里戸主大伴部称麻呂口同羊御調海藻六斤 養老七年五月十七日」
- ⑤「口志郡和具郷伊祇須」
- ⑥「志摩国答志郡和具郷戸主口同部御調堅魚十一斤 天平八年六月」
- ⑦「答志郷奈埜米三口」

答志郡から送られる物資は海産物で、それらの多くが「調」として送られたことがわかる。『延喜式』に記載されているように、志摩国は天皇へ御贄を貢納していたが、租税としても海産物が中心となっていた。当時の税制は口分田の班給による租、つまり

は米が中心であったが、志摩国の口分田は伊勢・尾張両国で班受されるという特例が設けられていた(『続日本紀』神亀2(725)年7月条)ことから、志摩国から貢納される海産物は、天皇および朝廷にとって極めて重い意味を有していたと考えられる。

文献史料から以上のような状況は、考古資料である遺跡・遺物にも色濃く反映している。まず、当時の志摩国府が設置されたのは志摩市国府(旧阿見町国府)と考えられる。旧郡では英虞郡に相当する。この地は志摩では珍しい海岸平野が形成されている地で、国府は沿岸洲上に立地していたと考えられている。北部の丘陵上には志摩国分寺跡がある。英虞郡内では、平安時代前期頃の遺跡として切間B遺跡(旧志摩町)が知られている。

英虞郡内には国府が所在しているものの、発掘調査事例が少ないこともあり、その動向はあまり明確ではない。むしろ、答志郡内の方で多くの遺跡が確認されている。

答志郡内における当該時期の遺跡として最も重要なのが贅遺跡(鳥羽市)である。贅遺跡は鳥羽湾に面した小規模な砂礫浜に形成された遺跡で、石製・金銅製の釣帯が24点以上出土している。立地から見て、海産物収集に関わる律令官人層の拠点的な遺跡であると考えられる。また、答志島にある奈佐遺跡(答志島桃取町)からは、和同開珎銀銭が出土している。さらに、神島ではこの時期の祭祀遺物が最も充実して認められる。

さて、当該期のおぼたけ遺跡は、先に見た古代の郡郷では、答志郡和具郷に相当すると見て、まず間違いない。おぼたけ遺跡周辺部では、先に述べた蟹穴古墳が目目される。ここから出土した須恵器大形長頸壺(国指定重要文化財)は、8世紀代に相当するものであり、おぼたけ遺跡に関係した人物が葬られていると考えられる。

このように、古代の答志郡は、国府所在地である英虞郡内以上に重要な遺跡が多い地と認識できる。

## e 中世の状況

中世の志摩国では、古代に引き続き海産物を中心とした荘園・御厨などが確認できる。国崎神戸は海産物を中心とした神宮領であり、神宮から極めて重視された地である。また、麻生浦御厨(鳥羽市浦村



町)は齋宮寮領であり、不明なことが多い中世の齋宮寮を知る上で重要な情報を提示している<sup>15)</sup>。

中世の志摩を象徴するのは、海運業である。鎌倉時代末に活動した阿久志藤内左衛門入道道妙は、阿久志(鳥羽市安楽島)を本拠に、広範囲な海運業に携わっていた。道妙の弟定頼は駿河国江尻(静岡県静岡市)に住み、関東方面との海運に携わる道妙の中継基地ともなっていた。道妙のもう一人の弟弁盛は二見江寺の僧で、阿久志に歳を持ち、志摩・東紀伊にかけて手広く高利貸しを行っていた。道妙の死後、関東交易船4艘とその利益千余貫が相続争論となっているが、道妙の財産がこれだけであろう筈は無く、莫大な財産を築いていたと考えられる<sup>16)</sup>。阿久志道妙のような商人は、志摩国に多く存在していたと考えられる。答志島も海運業が盛んな地であったと考えられ、文亀2(1502)年には「答志船福徳新造」という船の存在が知れる<sup>17)</sup>。

中世の志摩国守護所は、泊(鳥羽市鳥羽)に置かれていた。泊は中世を通じて良好な港町として存在していたと考えられる。鎌倉時代頃の状況は不明確であるが、室町時代に至ると、北畠氏や伊勢守護が当地に深く関わるようになる。中世後期の志摩国は、神宮權益をめぐる、伊勢守護や北畠氏・愛洲氏の権益がせめぎ合う場となっている。

16世紀後葉頃の水軍を率いた武将として名高い九鬼嘉隆の祖先は、泊をはじめとした神宮領の代官として成長していった。なお、嘉隆の跡を継いだ嫡子守隆は、近世鳥羽藩の藩祖となる。

答志島も15世紀以前から九鬼氏の支配下にあったと考えられる。中世後期の答志島は、文明5(1473)年以降、「今答志浦」に海上警固(海の関所のようなもの)が設置されている。答志島は海関の場所であり、海上交通の要衝であったことが知れる。答志島の海上警固に関しては、北畠氏や一色氏(15世紀後葉頃の伊勢守護)と警固撤廃を要求する神宮との間で論争が繰り広げられている。

史料から確認される豊かな志摩国の中世史に対し、考古学的な中世資料は少ない。志摩国の城館は、海運との関係もあって丘陵頂部や海に面した丘陵上に立地するものが多い。しかしその構造は、簡素で明確な遺構を伴わないものが多い。答志島にも城山城



第4図 答志島和具の現況  
(若屋山古墳付近から南東方向を望む)

跡や桃取城跡がある。

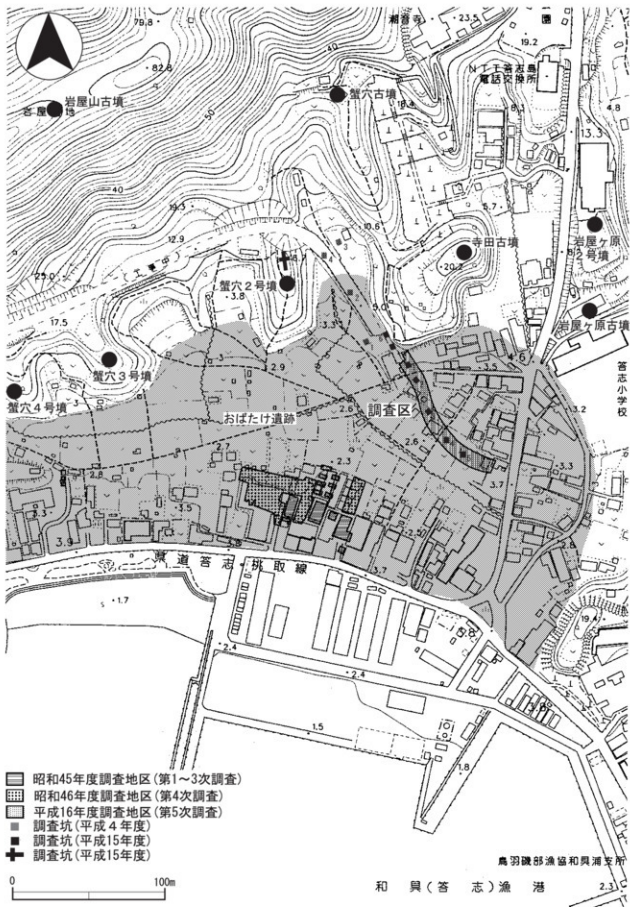
志摩地域の中世遺跡は、あまり調査例が無い。志摩市国府地区内では殿畑遺跡・天神遺跡・東海道遺跡・西殿遺跡などが調査され、中世後半を中心とした集落が展開していたものと考えられる。西殿遺跡からは、中世と考えられる土壇墓から、伸展葬の骨が多数見つかっている。また、英虞湾に面する次郎六郎東遺跡からは、鎌倉時代頃と考えられる遠見小屋らしき遺構が確認されている。旧磯部町に所在する侍岡中世墓からは、15~16世紀代の火葬墓が見つかっている。

中世の志摩で使用された土器類は、南伊勢系のもので中心であるが、侍岡中世墓・西殿遺跡・東海道遺跡からは尾張産と考えられる内耳鍋が出土している。伊勢湾を通じた地域間交流は、中世の段階でも確認できる<sup>18)</sup>。

#### f おばたけ遺跡の状況

今回報告する発掘調査以前に、おばたけ遺跡では第1~4次調査が実施されている。調査地は、今回の第5次調査区から南西に約50mの地点である(第5図)。

第1~4次調査区からは、大きく分けて弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期・飛鳥奈良時代の4時期の遺構・遺物が確認されている。なかでも、第4次調査SK1から出土した古墳時代前期中葉頃の土器は、志摩における標識資料として永らく活用

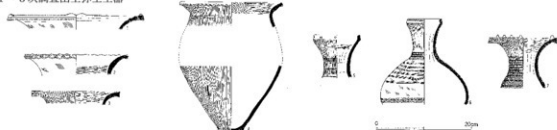


第5図 調査区位置図(1:2,500)

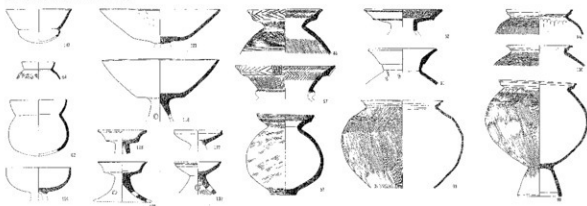


第6図 明治年間の地籍図と調査区の関係 (1:1,200)

第1～3次調査出土弥生土器



第4次調査SK1出土土器



第7図 おばたけ遺跡第1～4次調査出土の主な土器(1:8)

されていたものである(第7図)。この他には、飛鳥時代と考えられる竪穴住居が3棟ほど確認されている(第4次)。

後述するように、今回の第5次調査区では7世紀後半～8世紀代にかけての遺構・遺物が中心となっており、第1～4次調査区の状況とはやや異なる。時期によって遺跡の中心となる地点が微妙に異なっていることが考えられる。

(伊藤)

<註>

- (1) 答志島周辺の地質的な特徴については、磯部克三『三重の歴史』(1991年、コロナ社)、鈴鹿恒茂「志摩半島における古墳の築造に使用された素材岩石と志摩半島の地質との関係」(関西大学文学部考古学研究室編『紀伊半島の文化史的研究』考古学編、1992年)、鳥羽市教育委員会『賢遺跡』(1975年)を参照した。
- (2) 志摩地域の歴史的環境に関する記述については、とくに断らない限り以下の文献を参照した。
  - ・立教大学博物館学講座編『三重県志島の総合調査』(『ムゼイオン』12、1966年)
  - ・関西大学文学部考古学研究室編『紀伊半島の文化史的研究』考古学編(1992年)
  - ・三重県埋蔵文化財センター『伊勢志摩をめぐる考古学』(第13回三重県埋蔵文化財財団図録、1993年)

- ・竹内英明「志摩地域」(『日本の古代遺跡』52 三重 保育社、1996年)
- ・『鳥羽市史』上巻 (1991年)
- ・鳥羽市教育委員会『おばたけ遺跡発掘調査概要-第1次・第2次・第3次-』(1970年)
- ・鳥羽市教育委員会『おばたけ遺跡発掘調査報告-第4次-』(1972年)
- ・本浦道雄調査委員会『白浜遺跡発掘調査報告』(1990年)
- ・大野町教育委員会『佐々木武門考古資料図録』(1994年)
- ・三重県生活文化部文化課三重県史編さん室『鳥羽市答志町竪穴古墳発掘調査報告』(1999年)
- (3) 狩野久「御食国と橘氏」(『古代の日本 5 近畿』角川書店、1970年)
- (4) 平城京出土の木簡については、奈良文化財研究所木簡データベース(<http://mokuren.nabunken.jp>)から引用した。
- (5) 橋本紀昭「斎宮家御志摩国麻生浦御厨について」(『Miehistory』vol.4 三重歴史文化研究会、1992年)
- (6) 以上のことは、『光明寺文書』(『日本埋蔵文化財調査報告』(中世)および橋本紀昭『伊勢・志摩の交通と交易』(『海と列島文化』第8巻、小学館、1992年)を参照のこと。
- (7) 「守明長官引付」、『守明長官引付』(『三重県史』史料編中世1上)
- (8) 中世志摩国の発掘調査資料は、以下の文献を参照した。
  - ・三重県教育委員会『殿部遺跡発掘調査報告』(1980年)
  - ・同『天神道遺跡発掘調査報告』(1984年)
  - ・同『東海道遺跡発掘調査報告』(1989年)
  - ・三重県埋蔵文化財センター『西殿遺跡発掘調査報告』(1992年)
  - ・同『次郎六郎東道遺跡発掘調査報告』(1996年)
  - ・同『東海道遺跡(第2次)発掘調査報告』(1997年)
  - ・織部町教育委員会『同中世発掘調査報告』(1982年)

## IV 調査の成果～層位と遺構～

### 1 調査区の地形と基本層位

#### a 調査区の基本層位

調査区は、北西方向から南東方向にかけて延びる線状である。調査区北西隅では丘陵尾根部にあたり、調査区南東部では低地部となる。調査前の土地利用状況は、概ね高地であり、その段階での標高は、北西丘陵部付近で約3.8m、南東の平地部では約2.6mである。

調査区全体を通し、黄褐色系細砂層がベースとなる。黄褐色系細砂は、丘陵部に近い調査区北西隅で標高約2.8m、丘陵から最も離れる調査区南東隅では標高約2.0mで確認できる。この層は海生砂と考えるとよい。

黄褐色系細砂の上には褐色系細砂層が大きく分けて2層堆積している。概ね下部層は古墳時代以前の堆積層、上部層は古代以前の堆積層である。この2層それぞれの上面は、ある段階の生活面に相当すると考えられる。

調査区北西部を中心に、褐色系細砂層の上には暗褐色系土が堆積している。これはある段階の耕作土と考えられる層であり、基本的には表土層と大きな違いは無い。

遺構は、2層の褐色系細砂層上面および黄褐色系細砂層上面からの切り込みが想定される。したがって、厳密に言えば3面の遺構面が存在すると把握できる。ただし、褐色系細砂層上面での遺構検出が出来なかったため、遺構の多くは黄褐色系細砂層上面で行った。出土遺物で「遺物包含層」としているものは、多くが褐色系細砂層出土遺物であり、本来は

遺構に伴っていたものと考えられる。

#### b 北西丘陵部付近の層位的特徴

調査区の北西部では、調査区外にある丘陵尾根の他に、c 4～5グリッド付近に見られる岩盤（地元では「小山の越」と呼ばれている）がある。この2箇所では、答志島を構成する主要岩石である千枚岩（結晶片岩）が観察できる。調査区北西隅の丘陵部寄りでは、この結晶片岩の崩落土がなだらかに堆積しており、古代以降のベース土となっている。この崩落土は褐～黄褐色系細砂層上に堆積している。つまり、島に砂浜が形成された後、丘陵からの崩落土が形成されたことと見られる。

なお、調査区北西隅は現在の丘陵尾根に極めて近いので、この丘陵から続く岩盤の傾斜状況を確認する目的でかなり深い調査溝を設定したが、調査溝内で岩盤の確認はできなかった。このことから、砂浜が形成される以前の丘陵部は、海食崖状の急峻な斜面であったものと想定できる。「小山の越」も、かつては海に浮かぶ小島状の景観を呈していたものと推測できる。

#### c 調査区南東部の層位的特徴

調査区南東部は低地部にあたる。ここで確認できる黄褐色系細砂層は、先述の丘陵部寄りで確認されたものと一連であるが、礫の含有がやや多い傾向が見られた。また、丘陵部寄りの調査区で確認された暗褐色系土は確認されていない。暗褐色系土は、丘陵からの崩落土に起因する層と考えられる。

### 2 検出した遺構

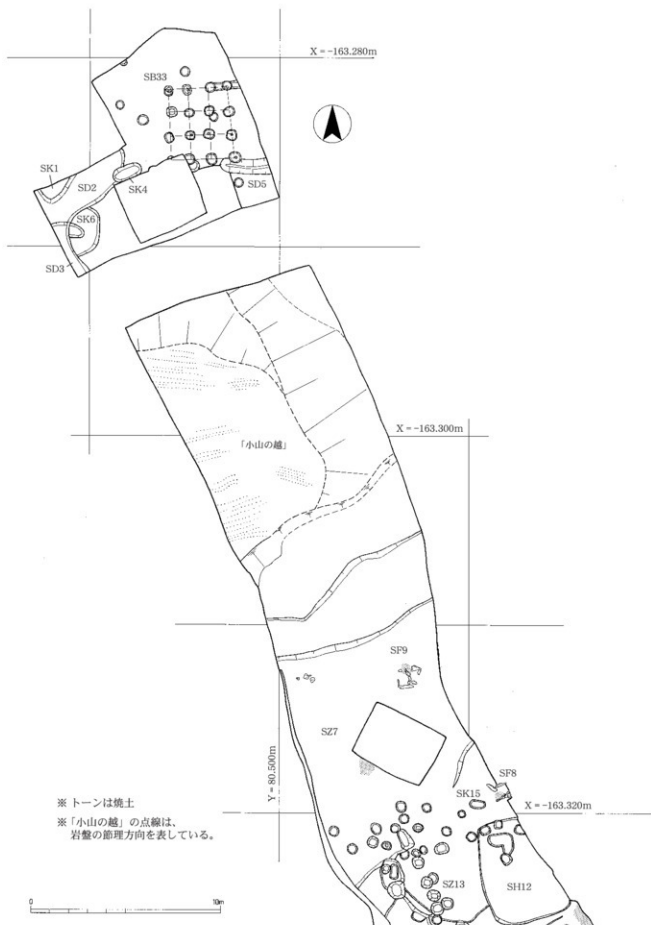
調査区内からは、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。しかし、遺構として確認できたのは弥生時代中期、古墳時代前期、飛鳥・奈良時代のものに限られる。

ここでは、主立った遺構について述べる。個々の

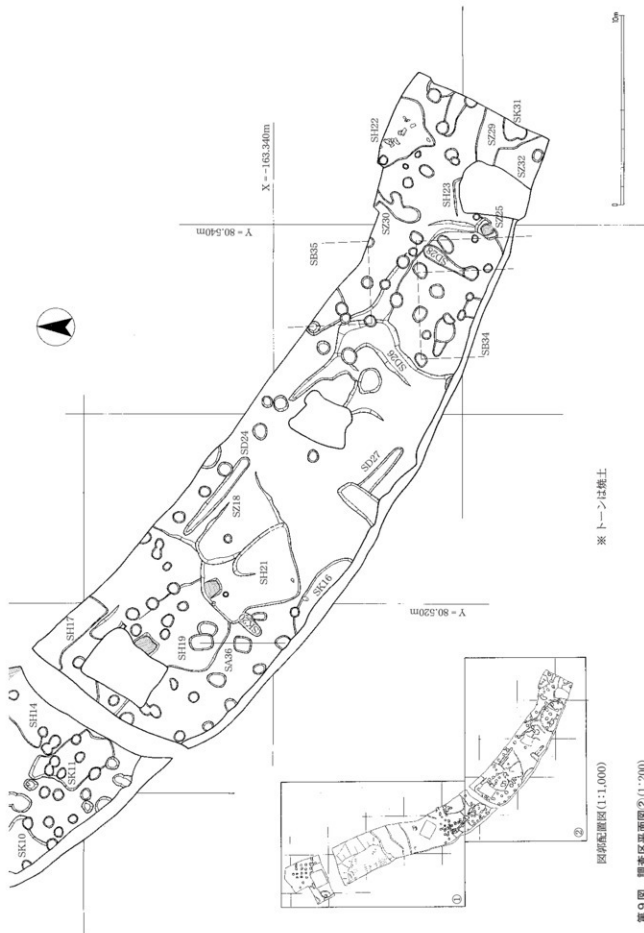
遺構については、後掲の遺構一覧表（第1・2表）も参照されたい。

#### a 縄文時代の状況

縄文時代の遺構は明確にできなかった。ただし、a 2グリッド付近で検出したS D 2・S K 6の埋土



第8図 調査区平面図①(1:200)



※トーンは焼土

図部配置図(1:1,000)

第9図 調査区平面図②(1:200)



調査区東～北壁土層

- |                          |                         |                            |                      |
|--------------------------|-------------------------|----------------------------|----------------------|
| 1. コンクリート・埋込坑            | 8. 5YR4/6 赤褐色重粘土(正陵前落土) | 15. 7.5YR4/3 褐色砂土・粗砂       | 22. 7.5YR3/3 暗褐色砂質粘土 |
| 2. 10YR4/6~3/3 褐色砂壤土(表土) | 9. 7.5YR4/6 褐色細砂        | 16. 10YR4/4 褐色砂壤土          | 23. 7.5YR4/3 褐色砂土    |
| 3. 10YR4/4 褐色砂質粘土        | 10. 10YR5/6 黄褐色細砂(基盤層)  | 17. 10YR2/6 黄褐色重粘土(粘土含む)   | 24. 7.5YR4/3 褐色砂土    |
| 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質粘土・粗砂 | 11. 7.5YR4/4 褐色砂質粘土     | 18. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂壤土・礫～粗砂  | 25. 7.5YR4/4 褐色砂質粘土  |
| 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質粘土    | 12. 7.5YR4/6 褐色砂土       | 19. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂壤土(粘土含む) | 26. 5YR5/6 明赤褐色粗砂    |
| 6. 7.5YR3/4 暗褐色砂質粘土      | 13. 7.5YR4/4 褐色砂土       | 20. 7.5YR4/3 褐色砂壤土         |                      |
| 7. 7.5YR4/3 褐色細砂         | 14. 7.5YR4/3 褐色微        | 21. 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂       |                      |

調査区西端土層

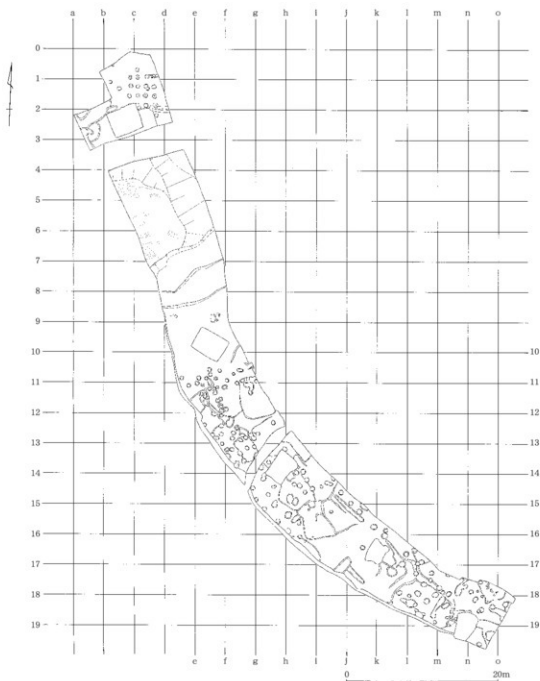
- |                             |                       |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1. 7.5YR4/2 灰褐色重質粘土(表土)     | 6. 5YR3/2 暗赤褐色砂土      |
| 2. 5YR6/6 橙色重質粘土            | 7. 10YR4/4 褐色砂土       |
| 3. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂土          | 8. 7.5YR5/3 にぶい褐色砂土   |
| 4. 5YR3/3 暗赤褐色砂土            | 9. 10YR5/6 明褐色粗砂(基盤層) |
| 5. 5YR2/3 極暗赤褐色砂土・炭・焼土・貝まじり |                       |



3~6: SZ29埋土 7: SZ29埋土

第10図 調査区土層図(1:100)





第11図 調査区内小地区割り図(1:500)

内下層からは、縄文時代後期の土器5個体分の破片が比較的良好的な状態でまとも出土している(第16図1~5)。遺構としては確認できなかったものの、この付近に当該期の住居や土坑などが存在していた可能性が高い。

#### b 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構として認識できたのは、土坑と溝のみである。ただし、第17図7・9・11・12・14・19~21に図示した土器類はf9・10グリッドからまとも出土しており、いわゆる粉れ込みの状

態ではなかったことから、この出土地点付近に堅穴住居か何かが存在していた可能性は高い。したがって、本来は確認できた遺構以外にも多くの遺構が存在していたものと考えられ、当該時期の集落地として当遺跡は把握されるべきものであることを明記する。

**土坑SK16** 調査区南東部のh16グリッド付近で検出した遺構である。遺構の北肩部分を確認したのみで、南部は調査区外へ続く。土坑としたが、溝や堅穴住居の可能性もある。検出範囲での長さは約5m

で、幅は1.5m以上と考えられる。検出面からの深さは10cm程度である。

この溝の東延長上にSD27があり、この遺構が溝だとすれば、両者は一連の遺構である可能性もある。

埋土内からは、弥生時代中期後葉の甕が出土している。

**溝SD26・27** 調査区南東部のj～k17グリッド付近で検出した遺構である。いずれも幅1.0～1.2m、検出面からの深さ10～15cm程度の浅いものである。SD26は北西方向に向かってL字状に屈曲する。SD27はSD26の北溝とほぼ平行するため、この溝で方形周溝になる可能性がある。埋土中からは、弥生時代中期中葉～後葉頃の土器片が少量出土している。

なお、SD26北溝の南にも同じ方向の溝が続き、南に屈曲するため、この部分も方形周溝である可能性があるが、出土遺物が無いため、断定できない。

#### c 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構には、落ち込みと土坑がある。

**土坑SK1・SK6** 調査区北端部のa2グリッド付近で検出した遺構である。2遺構間に奈良時代の頃の溝SD2があり、両者は一連の遺構であると考えられる。埋土は黒褐色系土である。埋土内からは古墳時代前期前半頃の土器類が少量出土した。

なお、SK6の埋土内からは、縄文土器(1～5)がまとまって出土しているため、この付近に縄文時代の遺構が存在していた可能性が高い。

**土坑SZ13** 調査区中央部のf11グリッド付近で検出した遺構である。東側は飛鳥時代の竪穴住居SH12に破壊されている。北側は明確な遺構ラインが確認できなかった。やや不整な方形を呈しており、長いところで4m以上ある。検出面からの深さは約20cmである。竪穴住居の可能性もあるが、遺構内からがや壁周溝は検出できなかった。

埋土内から古墳時代前期前半頃の土器類が少量出土している。

**落ち込みSZ18** 調査区南部のi15グリッド付近で検出した遺構である。遺構の北部には溝状の落ち込みが伴う。南部は奈良時代の竪穴住居SH21で破壊されている。埋土は黒褐色系土で、古墳時代前期前半頃の土器片が比較的多く出土している。遺構の形態から竪穴住居の可能性も考えられるが、がなど断

定できる要素に乏しい。

**溝SD5** 調査区北部のc2グリッド付近で検出した遺構である。幅約80cm、検出面からの深さ約60cmで、断面はV字形を呈する。埋土内からは古墳時代前期前半頃の土器片が少量出土した。

#### d 飛鳥・奈良時代の遺構

飛鳥・奈良時代の遺構は、当調査区で最も多く確認された。遺構には、竪穴住居・カマド・掘立柱建物・溝などがある。また調査区中央付近には谷状落ち込みSZ9があり、多くの遺物が出土した。

**竪穴住居SH12** 調査区中央部のg11グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられ、東部は調査区外である。遺構は、南北約5.6mで、東西は4.2m以上と思われる。埋土内には少量の炭を含んでいた。カマドは確認されず、東辺に取り付いているものと考えられる。

埋土内からは、飛鳥時代中葉頃の土器が出土している。

**竪穴住居SH14** 調査区中央付近のg12グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられるが、遺構の平面形は今ひとつ明確でない。調査区壁際に一部焼けた黄褐色系の粘土が見られ、これがカマドと考えられる。床面や主柱穴の状況も明確ではない。

**竪穴住居SH17** 調査区中央部のh13グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられ、遺構の南西隅部を検出した。遺構の大半が調査区外である。調査区土層図に見られた遺構の断面からは、遺構の深さは本来60cm程度はあったものと考えられる。位置的には竪穴住居SH14と重複するが、重複部分が調査できなかった部分にあたるため、前後関係は不明である。

**竪穴住居SH19** 調査区南部部のh14グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられるが平面形は歪である。遺構の北辺部に焼土塊が見られ、カマドと考えられる。カマドは、土を盛ることで構成されていたと考えられる。主柱穴は明確にできなかった。SH21と重複しており、それよりも古い遺構と考えられる。

**竪穴住居SH21** 調査区南部のh・i15グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えら

れるが、やや歪である。南北約5m、東西約3.8mの長方形である。SH19と重複しており、それよりも新しい遺構と考えられる。

遺構の北辺部に焼土塊が見られ、カマドと考えられる。カマドの横には、完形の平瓶(114)が置かれていた。カマドは、土を盛ることで構成されていたと考えられる。主柱穴は明確にできなかった。

遺構埋土中央部分には、炭と貝殻がぎっしり詰まっていた。そこで見られた貝殻には、アカニシ・アオシタ・カキ・アワビ・サザエ・カラスガイ・ジンガサ・アサリなどがある。また、それに伴って鉄製刀子(335)が出土している。

**竪穴住居SH22** 調査区南東部のn17グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられる。北辺は調査区外で、東西辺は約3.2mである。埋土内上層からは、結晶片岩の大石とともに、比較的良好な土器類が出土した。円面視(319)は、一応包含層出土として扱っているが、この遺構に伴う遺物である可能性が高い。

**竪穴住居SH23** 調査区南東部のm18グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられるが、大部分が後世の攪乱で破壊されている。SH25と重複関係にあるはずだが、明確にできなかった。

**竪穴住居SH25**(第13図) 調査区南東部のm18グリッド付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居と考えられるが、遺構の壁面は確認できず、北辺部に取り付くと考えられるカマドとその周辺の土器類のみが確認できたに止まる。

カマドは土を盛ってつくっており、焚口付近にのみ小さな平石を用いている。カマドの底は、あまり強い焼き締まりが確認できなかった。カマド周辺からは土器がまともに出土している。

**カマドSF8**(第12図) 調査区中央部のf10グリッド付近で検出した石組のカマドである。輪郭が明確にできなかったものの、本来は方形の竪穴住居に伴うもので、遺構東辺に取り付いていたものと考えられる。

遺構は、2枚の大きな平石を袖の芯として用い、その上に平石を被せて焚口を作り出していたものと考えられる。袖の芯となる平石は、ベース層に深く掘り込まれている。焼土は、焚口から向かって右側

がとくに強く焼けている。

埋土内からは、奈良時代後半頃の土器がまともに出土した。

**カマドSF9**(第12図) 調査区中央部のe8グリッドで検出した遺構である。輪郭が明確にできなかったものの、SH8と同様、本来は方形の竪穴住居に伴うもので、遺構北辺に取り付いていたものと考えられる。

遺構は、2枚の大きな平石を袖の芯として用い、その上に平石を被せて焚口を作り出していたものと考えられる。袖の芯となる平石は、ベース層に深く掘り込まれている。焚口から向かって右側の奥がとくに強く焼けている。焼土周辺には、須恵器の把手付片口鉢(167)が散らばっており、甕として用いられたものと考えられる。

**掘立柱建物SB33**(第14図) 調査区北部のc1グリッド付近で検出した遺構である。東西3間(約3.1m)、南北3間(約3.6m)縦柱建物である。主軸はN3°Wである。柱間は比較的狭く、東西で1.0~1.2m、南北で1.2mである。東西の柱間は、中央部分がやや広くなっている。柱穴は丸みを帯びているものの、方形を意識して掘削されていると考えられる。

この建物は丘陵斜面部に位置するものの、後背部には何らの施設も伴っていない。遺構造成面も、とくに平坦地を造成したような痕跡は見られなかった。

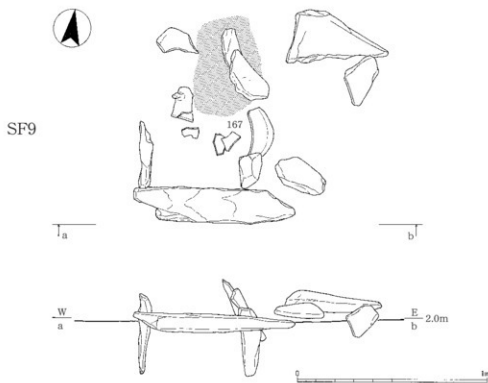
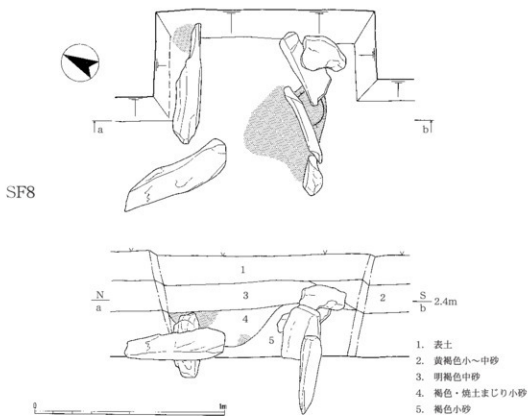
柱穴内からは、須恵器甕(179)が破片状態でまともに出土している。また、遺構検出前であるが、この付近からは須恵器大甕片の出土が多かった(図版14-355)。建物に関連している可能性も考えられる。

柱穴内から出土した土器は7世紀後葉頃のものが、奈良時代初頭頃の遺構と考えられる。

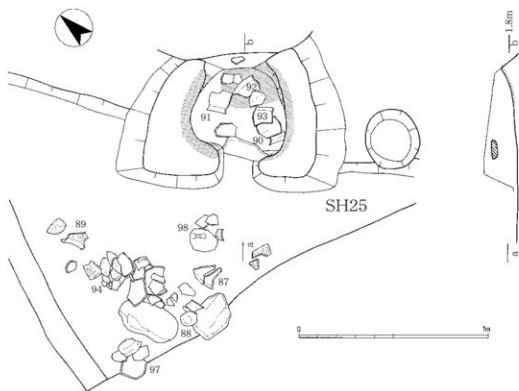
**掘立柱建物SB34**(第15図) 調査区南東部のm18グリッド付近で検出した遺構である。側柱建物と考えられ、東西2間(4.8m)で、南北は2間(3.0m)以上と考えられる。東面には庇があると考えられ、庇は東西1間(1.6m)である。主軸はN3°Wである。

出土遺物は少なく、明確な時期は決めたいが、奈良時代頃の遺構と考えられる。

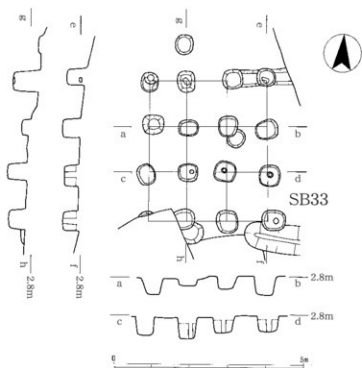
**掘立柱建物SB35**(第15図) 調査区南東部の116グリッド付近で検出した遺構である。側柱建物と考えられ、東西2間(4.0m)以上、南北2間(3.0m)



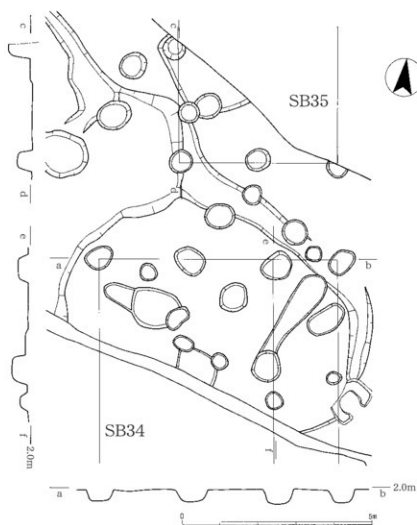
第12図 カマドSF8・9 平面・立面図(1:20)



第13図 竪穴住居SH25 カマド周辺平面・断面図(1:20)



第14図 掘立柱建物SB33 平面・断面図(1:100)



第15図 掘立柱建物SB34・35 平面・断面図(1:100)

以上である。主軸は $N3^{\circ}W$ である。

出土遺物は少なく、明確な時期は決めがたいが、奈良時代頃の遺構と考えられる。

**柱列SA36** 調査区南部のh14グリッド付近で検出した遺構である。3基のピットのみであるが、形状と規模が類似しているため、柱列として扱えると判断した。南北方向に並ぶ。柱断面は長軸 $0.8\sim 1.0m$ の略方形である。主軸は $N3^{\circ}W$ である。

この遺構も出土遺物は少なく、明確な時期は決めがたいが、奈良時代頃の遺構と考えられる。

**溝SD2・3** 調査区北西部のa2グリッド付近で検出した遺構である。SD2とSD3はT字形に交わっている。明確な開削ラインを示さないため、雨水や流水等による開削地形である可能性もある。

遺構埋土の上層部からは、土師器長胴甕(168)が出土しているため、飛鳥時代頃の遺構と考えた。

**土器群SZ7** 調査区中央部からは、明確な遺構ラインを示さない状態で大量の遺物が出土している。これらは、SZ7として遺物の取り上げを行った。この部分は、岩盤「小山の越」の南部にあたる場所である。土器の廃棄がなされた場所とも考えられるが、カマドSF9やそれとは別の焼土面もこの位置で確認されていることから、堅穴住居・土坑などの遺構が濃密に重複していたために遺構ラインが認識できなかった可能性もある。

**落ち込みSZ29** 調査区南東部のn19グリッド付近で検出した遺構である。落ち込みSZ32と重複しており、それよりも新しい。埋土は、堅穴住居SH21で見られたものと同様に、炭と貝殻がぎっしり詰まったものである。ここで確認できた貝殻には、カキ・アワビ・サザエなどがある。貝

殻に伴って須恵器杯(147)が出土しているため、この埋土形成時期は奈良時代初頭頃と考えられる。

**落ち込みSZ32** 調査区南東部のn19グリッド付近で検出した遺構である。落ち込みSZ29と重複しており、それよりも古い遺構である。堅穴住居SH25とも重複関係があるはずであるが、明確にはできなかった。埋土内からは、比較的多くの土器がまぎって出土している。

(伊藤)

第1表 おばたけ遺跡(第5次)遺構一覧

遺構番号	性格	時期	グリッド	特徴・形状・計測数値など
S K 1	土坑?	古墳前期	a 2	柳ヶ坪形土器片あり。
S D 2	溝	飛鳥?	a・b 1~2	下層から縄文土器出土。
S D 3	溝	飛鳥?	a 2・3	下層から縄文土器出土。
S K 4	土坑	飛鳥・奈良	b 1・2	
S D 5	溝	古墳前期	c・d 1~2	断面V字形
S K 6	土坑?	古墳前期~	a 2・3	土坑か? S K 1とつながる可能性あり。縄文土器含む。
S Z 7	落ち込み	古墳後期~ 奈良前期	d~f 7~11	谷状落ち込み。複数の遺構を含む可能性大きい。
S F 8	カマド	奈良後期	f 10	石割いのカマド。竪穴住居に伴う? 妻宮偏年 I~4~II-1
S F 9	カマド	飛鳥	e 8・9	石割いのカマド。竪穴住居に伴う?
S K 10	土 坑	飛鳥・奈良	e 10・11	弥生土器含む。
S K 11	土坑	不明	f 13	
S H 12	竪穴住居	飛鳥	f・g 11・12	方形。
S Z 13	落ち込み	飛鳥	e・f 11	竪穴住居の可能性あり。
S H 14	竪穴住居	飛鳥・奈良	g 12	方形。北壁にカマドあり。
S K 15	土坑	飛鳥・奈良	f 10	
S K 16	土坑	弥生中期	h・i 16	弥生土器片良好。
S H 17	竪穴住居	飛鳥・奈良	h 13	方形。
S Z 18	落ち込み	古墳前期	i・j 14・15	土器片多い。北陸系?含む。埴壇溝状のものあり。竪穴住居か?
S H 19	竪穴住居	飛鳥	g・h 14	歪な方形。北壁にカマド。
S K 20	土坑	不明	h 15	溝状。
S H 21	竪穴住居	飛鳥	h 14・15	歪な方形。北壁にカマド。S H 19より新。埋土内から、多量の貝殻(アカニシ・アオシタ・カキ・アワビ・サザエなど)と鉄製小刀が出土。
S H 22	竪穴住居	飛鳥	n 18	方形。埋土内に大礎含む。西面壁はこの遺構に伴うと考えられる。
S H 23	竪穴住居	飛鳥	m 18	方形。北東角のみ検出。
S D 24	溝	古墳前期	j 15	S D 26に続く?
S H 25	竪穴住居	飛鳥	m 19	カマド。土器群良好。調査時は「S Z 25」と呼称。
S D 26	溝	弥生中期?	k・l 17	弥生土器含む。
S D 27	溝	弥生中期?	j 17	断面U字形
S D 28	溝	飛鳥・奈良	l・m 18	
S Z 29	落ち込み	飛鳥	n 18・19	土器群良好。貝殻(アカニシ・アオシタ・カキ・アワビ・サザエなど)多量。
S Z 30	溝状落ち込み	奈良前期?	m 17	ビツが連結して溝状を呈するものか?
S K 31	土坑	飛鳥	n 19	S Z 29の下。S Z 29と一連か?
S Z 32	落ち込み	飛鳥	n 19	S Z 29より古。土器群。

第2表 おばたけ遺跡(第5次)掘立柱建物・柱列一覧

遺構番号	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模(東西間・m×南北間・m)	主軸	方位 (N基準)	備 考
S B 33	b 1	p 1・2・3	p 1……須恵郡土器片多数	奈良初	3(3.1)×3(3.6)	南北	N 3°W	竪柱。瓦葺斜面に建つ。
	c 1	p 1~11	p 4・5……飛鳥					
S B 34	117	p 4・5	p 4……土師器片	奈良前半?	2(4.8)×1(3.0)以上 柱 1(1.6)×1(3.0)以上	南北	N 3°W	
	m 18	p 1						
S B 35	116	p 1		奈良前半?	2?(4.0)×2?(3.0)以上	南北	N 3°W	
	117	p 1	p 1……飛鳥					
S A 36	h 14	p 1		奈良前半?	2(4.4)以上	南北	N 3°W	

## IV 調査の成果～出土遺物～

おぼたけ遺跡第5次調査区から出土した遺物は土器類が中心で、少量の石製品・鉄製品が含まれている。時間的には縄文時代後期から室町時代にまでのものがあり、その中心は7世紀後半から8世紀にかけてのものである。

以下では、出土遺物の特長を主に遺構単位で記述する。遺物個々の詳細については、遺物観察表(第3～11表)を参照されたい。

### 1 縄文土器

沈線文による区画を持つものが出土している。概ね縄文時代後期前葉の中津1式新段階<sup>1)</sup>に相当するものである。

**波状口縁深鉢(1)** 1は波状口縁をなす深鉢である。1a～1uの21片に分かれているが、出土地点が近接していることと、素地粘土や調整手法の状況、さらには剥離の進行状況などから見て、全て同一個体と考えられるものである。

1a～1gは、口縁部付近の破片。1bでは右側に波頂部の良好な形態が遺存する。口縁帯は2本の沈線で横方向に区画され、波頂部から垂下するものである。1aは波頂部を欠損するが、向かって左側、1dは右側の部分にあたる。1a・cは波頂部を欠損するが、いずれも向かって左側の破片にあたる。1b・cからは、波頂部の左下に口縁部区画帯を挟んで鈎の手状の区画帯が存在することがわかる。1b・dでは、波頂部の内面に円棒状工具を横位に押しした3ヶ所の刺突が見られる。

1b左側と1eは、口縁部の波裾部にあたる。口縁端部付近の沈線が端部側に入り込んで終息している。1fと1gは、この波裾部付近に相当する破片と考えられ、下方に垂下する沈線区画が見られる。

1h～1lは、頸部付近の破片。1hには、下方に伸びる2本の沈線が見える。1iには1本の沈線があり、これは口縁部付近のものとは比べてかなり浅い。1j・1lも同様に浅く、これは弧状を呈している。1kには2本の沈線が見られ、同じく浅い。

1m～1tは体部付近の破片。1m・o～qの状況から、体部文様は横方向に施された2本の沈線による区画帯が基本形であることがわかる。1mは、頸部から伸びるやや弧状を呈する沈線が1本見られる。1nは体部区画帯を構成する上部沈線の一部と、そこから上方に伸びる沈線と考えられる。

1mの左端には下部沈線から伸びる区画帯の一部が見える。下部沈線から形成される区画は、1o・qから、スベード形をしたものであることがわかる。1r～tはそのスベード形の破片。破片の数から、スベード形の区画は5ヶ所以上である。1oでは、体部区画帯の上部沈線が、スベード形の区画線右上部と同じ弧を描いて上方に向かうことがわかる。

1uは底部片。底面には籠目状の圧痕が見られる。**水平口縁深鉢(2)** 2は水平口縁の深鉢である。2a～2cの3片に分かれているが、これらは前述の波状口縁深鉢と同じ理由で同一個体と判断できる。

2aは口縁部を含む体部片。横方向に展開する区画帯がある。この区画帯は、2aの区画帯は2cと同様のもと考えられ、メガネ状の区画が横方向に伸びるものと考えられる。2bは口縁部から少し下がった位置の破片と考えられるもので、鋭角に切り込む沈線が見られる。

**深鉢片(3～5)** いずれも深鉢の体部中央付近にあたると思われる破片である。3は紡錘状区画の下端部と考えられる。区画外縁の沈線は横へ展開して紡錘状区画が2つ並んだ状態になるものと思われる。4・5も同種の紡錘状区画であろう。

**波状口縁浅鉢(6)** 波状口縁を呈する浅鉢片である。沈線で区画された内部を、ハケメ状の条痕で充填している。区画帯は体部で「J」字形を形成するものと考えられる。波頂部には、円棒状工具を縦方向に用いた刺突が1ヶ所ある。

### 2 弥生土器

弥生土器は、f9グリッド付近を中心に、調査区南東部から出土している。概ね弥生時代中期後半を



中心とした時期のものと考えられる<sup>(2)</sup>。

出土土器は、外面に櫛描文を施文するものが中心となる。ここでは、伊勢湾西岸部（つまり三重県側）でごく普通に確認され、近畿地方の直接的な影響下にある櫛描文を「A系櫛描文」、伊勢湾西岸部ではあまり見られないもので、三河湾近隣の地域でよく確認される櫛描文を「B系櫛描文」、これらとは別に、口縁部に凹線文を施すものを「凹線文系」として記述していく。

**A系櫛描文壺**（7～13） 7～13は、A系の櫛描文を施す広口壺である。口縁部は外側に大きく開き、端部を下方に拡張するものである。拡張口縁部の外面には波状文が施される。口縁端部の内面は、7は波状文、8は単列の櫛歯状刺突文、9は3列以上の櫛歯状刺突文、10は櫛歯状刺突文と瘤状突起（5個1単位か）を組み合わせている。11は、頸部に5単位以上の櫛描横線文を施す。12は、基本的には櫛描横線文であるが、最上段部は施文工具が細かなピッチで停止しているため、簾状文風になっている。

13は体部下半で、櫛描横線文を6単位と波状文を1単位施している。底部は突出しない平底である。

**A系櫛描文受口（袋状口縁）壺**（14～16） 14・15は、頸部の狭い、いわゆる細頸壺である。14は袋状口縁となるもので、簾状文と横線文が組み合わされている。16は頸部がやや太い受口口縁のもので、口縁部外面には波状文が施される。形態的には後述の19と類似する。

**凹線文系壺**（17～19） 口縁部が袋状・受口状を呈し、口縁部外面に凹線文が施されるものである。17は細頸壺で、凹線文と櫛歯状刺突文とが組み合わされている。18は細頸壺、19は太頸壺にあたる。17は尾張地域の影響が考えられ、18・19は伊勢湾西岸部の様相を呈するものと把握できる。

**B系櫛描文広口壺**（20・21） 20・21はB系の櫛描文が施されるものである。

20は短く開く口縁部で、口縁端部はやや拡張されるものである。拡張口縁部には「ハ」の字形を連続させた鋸歯状のヘラ描施文を行い、その間にやはりヘラ描で「ミ」字状の施文を行っている。頸部には、最上段から櫛描波状文・ヘラ描格子目文・櫛描横線文・ヘラ描格子目文の順に施文されている。素

地の状況は、櫛描文系壺や凹線文系壺とは異なり、砂礫の多い粗いものであるため、三河地域以東からの搬入品と考えられる。

21は頸部から直線的に開く口縁部を持ち、口縁端部は下方に拡張されるものである。拡張口縁部の外面は、ハケメを矢羽根状に施した後、櫛歯状工具の押圧による弱い刺突文が施される。矢羽根状のハケメは、調整というよりは施文の意味を有しているように見受けられる。拡張口縁部を除く口縁部から体部にかけては粗いハケメが施されており、体部下半にのみヘラミガキが施されている。体部は、下部約1/3の位置で強い屈曲を持っている。形態的には伊勢湾西岸部の土器ではなく、三河地域以東からの搬入品と考えられるが、明確な類例に乏しい。

**壺体部の施文**（22～42） 22～42には、壺の体部片に見られる施文の拓本を掲載した。22～30はB系櫛描文、31～42はA系櫛描文である。

22は櫛描横線文が、原体間を開けずに密接して施されるもの。22aと22bは同一個体と考えられる。原体幅1.5cmの間に6本の櫛歯が入り、22aは4単位分、22bは5単位分が残る。23～25は櫛描横線文の下方に刺突文がめぐるもので、23は櫛歯状工具に刺突、24・25は棒状工具による刺突である。26は、櫛歯間が開いているが原体幅1.7cmの間に6本の櫛歯が入るもので、複合櫛描文に相当する。27も複合櫛描文で、1.8cmの原体幅間に4束のまとまりがある。

28は、27に類似した櫛描文が円弧状に回り、その上には別の櫛歯状原体が簾状文風（あるいは押し引き刺突風）の動きで同じく円弧状に施されている。29は、沈線区画間に櫛歯状工具による施文のあるもの。刺突文の範疇と考えられるが、その雰囲気はハケメに近い。

30は前述の20に類似したもので、上から順に波状文・横線文・格子目文が見られる。

31は、おそらく3本で1単位となる櫛描文と考えられるが、この破片では少し分りにくい。32は、半截竹管状の工具を2本束ねて施文する、複合櫛描文である。33も複合櫛描文で、これは幅の違う半截竹管状の工具を4本ほど束ねたもの。

34～37は、異なる2つの狭い櫛歯状工具を2つ束ねて施文した複合櫛描文。複合後の原体幅は、34が

1.7cm、35が1.9cm、36が1.9cm、37が1.6cmである。

38は複合櫛描文と扇状文・格子目文を組み合わせたもの。a・bの2片があり、同一個体である。複合後の原体幅は1.5cmである。横線文・扇状文・格子目文は、それぞれ別の原体による施文である。

39・40は、半截竹管状の工具を束ねた複合櫛描文による格子目文が施されているもの。39は半截竹管状工具を3本、40はそれを2本束ねている。41・42は原体幅4mmの間に3本の櫛歯が入る工具を単独で用いた格子目文である。42の下部には、格子目文とは別の複合櫛描文が施されている。

**無頭壺** (43~45) 短い口縁部が取り付くものも含めて、無頭壺とした。いずれも頸部に焼成前穿孔が見られ、2個1対の形4個穿たれていたものと考えられる。43は小形のもの。44・45は短い口縁部の付くものである。

**甕** (46~53) 46・47は、口縁部に刺突文を持つもの。46の頸部外面には横方向のハケメが施文風に施されている。48・49は受口状口縁を呈するもの。49の口縁部外面には櫛歯状工具による刺突文が施される。50・51は文様を施さない、「く」の字形口縁部となるもの。51は、体部外面全体にハケメを施した後、下半にのみミガキを加えている。

52は平底の底部、53は台付甕の脚台部である。

### 3 古墳時代前期の土器

弥生時代後期末か古墳時代初頭か微妙なものも含めて、ここで一括する。この時期の土器は、調査区内全体から出土しているが、あまり多くはない。

**壺** (54~63) 54~56は広口壺で、いわゆる「パレススタイル壺」に相当する。54は口縁端部を拡張し、口縁部外面には大形の竹管文と棒状浮文(4本一組)を施す。頸部は薄い赤帯を貼り付け、その下部外縁に単線の波状文を施している。波状文の下には二枚貝腹縁部による刺突文が連弧状に施されている。

55・56は口縁部外面に赤彩の見られるもの。赤彩は、いずれもベンガラと思われる。55は口縁部外面に擬凹線文を施し、口縁部内面には櫛歯状工具による綾杉文の刺突文と小形の竹管文を施している。56は口縁部内面に櫛歯状工具による斜射針状の刺突文

が施されている。

57~59は、口縁部の内外面に櫛歯状工具の刺突による綾杉文を施したものである。この3点はほぼ同じ手法によって成形されているが、59は口縁部が薄く、外側の面が広がっているため、二重口縁壺状となり、いわゆる「柳ヶ坪形壺」の形態に類似する。57~59は、土器相としては同時期のものであるが、57→58→59の順に型式変化をするようにも見える。

60・61はやや内彎して開く壺。60の体部外面上半には4単位の櫛歯横線文と櫛歯状工具の刺突による綾杉文が施されている。61は無文である。62はやや外反して開く壺。63は壺の底部である。

**器台** (64) 64は器台と考えられるもの。外面には、ベンガラと思われる赤彩が塗られている。受部の中段と思われる部分に、方形の透かしが5方向に開けられている。形態から見て、北陸方面からの搬入品か、あるいはそれを当地近隣で模倣したものと考えられる<sup>(2)</sup>。

**高杯・脚台** (65・66) 65は高杯の脚柱部。鳥貫C1期<sup>(1)</sup>に相当するもので、いわゆる欠山期のもの。66は壺の脚台部と考えられるものである。

**甕** (67~71) いずれもS字状口縁台付甕に相当する。67・71は口縁部外面に櫛歯状工具による押し引き刺突があり、A類<sup>(3)</sup>に相当する。68~70も、口縁部形態から見てA類併行と考えられる。(伊藤)

### 4 古墳時代後期の土器

古墳時代後期の遺物を、ここで一括して紹介する。この時期の遺物は少なく、SZ7・9などに伴うものもあるが、その大半は包含層から出土している。

#### a 土師器

**鉢** (72~76) いずれも小形の鉢である。72は短く外反する口縁部をもち、体部外面にはケズリが施されている。73の口縁部は内弯しており、6世紀前半頃の典型的な鉢。74~76は台付小形鉢である。

**高杯** (77~79) 77は口縁部がやや外反して開く。78・79は長脚の高杯で、裾部付近で大きく外反する。

#### b 須恵器

**把手付碗** (80) ほぼ垂直にたち上がる口縁部をもち、体部には把手が取り付いていた痕跡が認められ

る。胎土などから東海地方の製品と考えられ、5世紀後半頃のものであろう。

**高杯** (81・82) いずれも無蓋高杯であり、口縁部は外反して開いている。81は波状文、82はヘラによる刻みが杯部外面にみられる。5世紀後半頃のものであろう。

**器台** (83・84) いずれも器台の脚部と考えられる。83は3方透かしがある。84は波状文と列点文が施され、それぞれ2条の沈線で区切られている。

## 5 飛鳥・奈良時代の土器

出土遺物の大半が7世紀中葉～8世紀前半にかけてのものである。これらは、比較的まとまりをもって遺構から出土しているため、ここでは、遺構別に記述する。

遺構から出土した土器の組成は第12表にまとめた。これは、遺構およびグリッド単位で口縁部計測法(残存度1/12を1とする)により求めたものである。須恵器杯G身と杯A、杯G蓋と杯B蓋などは区別が困難なためまとめている。

計測は、口縁部を中心としたが、脚および握みのあるものについてはそれも対象とした。これらのデータから個々の器種の最大値を採用して比率を求めている。

なお、土師器・須恵器の杯H・杯Aといった器種の名称は、田奈良国立文化財研究所による分類<sup>(6)</sup>を参考している。ただし、須恵器杯のなかには区別が難しいものがある。たとえば、先述した杯Aと杯G身などであり、この場合、無台杯などとまとめて呼ぶことにする。

**竅穴住居SH25出土土器** (85～98) 須恵器杯・高杯・横瓶・提瓶、土師器甕・小形鉢などがあり、土師器甕類が最も多く全体の約60%を占める。なお、須恵器提瓶は口縁部計測法の基準に達しなかったため含まれていない。

須恵器の大多数は愛知県狼投山西南麓窯跡群(以下、狼投窯跡群と略す。)をはじめとする東海地域の製品と考えられる。

85～87、96～98は須恵器である。85は、杯H蓋である。86は壺であり、近畿地方において一般的にみ

られる形態である。87は、高杯であり、2段3方透かしをもつ。96・97は横瓶。98は大形の提瓶である。外面全体に自然釉がかかる。これらの須恵器は7世紀中葉頃の時期と考えられる。

88～90、91～95は土師器である。88は小形の鉢である。短く外反する口縁部をもち、体部は球形に近い。底部に木炭痕がみられる。89～95は甕である。外面に縦および斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施されているものが多い。このうち、91は鍋の形態に近く、把手が付く。また、92・93は口縁部が大きく、やや丸みのある体部をもつ。

**落ち込みSZ32出土土器** (99～110) 須恵器杯・高杯・壺・甕、土師器小形鉢・甕・甌などがあり、土師器甕が最も多く全体の約59%を占める。須恵器の大多数は狼投窯跡群をはじめとする東海地域の製品と考えられる。

99・100は須恵器杯Hである。101は須恵器短頸壺。102・103は須恵器高杯。102は小形であり、短脚である。103は長脚の2段3方透かしをもつ。104は須恵器甕。頸部に波状文が施されている。

105は土師器小形鉢。106～110は土師器甕である。外面に縦および斜めハケメ、内面に横方向のハケメが施されているものが多い。このうち、109・110は、口径が30cmを超え大きいため鍋の形態に近い把手付の鍋の可能性がある。

これらの出土遺物は須恵器などから7世紀中葉頃のものと考えられる。

**竅穴住居SH21出土土器** (114～117) 須恵器杯・平瓶・鉢、土師器甕・高杯・杯などがある。須恵器の大多数は東海地域の製品と考えられる。

114は須恵器平瓶である。ほぼ正形であり、体部にはタタキ・ロクロケズリが施されている。また、体部内面には、風船技法の痕跡が認められる<sup>(7)</sup>。115は須恵器杯Hである。116は須恵器鉢で、胎土など岐阜県各務原市美濃須衛窯跡群<sup>(8)</sup>の製品に近似する。117は土師器甕である。

時期は、7世紀後葉～8世紀初頭頃と考えられる。

**竅穴住居SH22出土土器** (118～131) 須恵器杯・高杯・壺・甕、土師器杯・甕などの多くの遺物が出土した。土師器甕が最も多く全体の約46%を占め、須恵器では杯類が約21%と多い。また、須恵器の大多数は

東海地域の製品と考えられる。

118・119は土師器杯G。120は土師器杯Cである。底外面にヘラケズリが施されている。

121は須恵器杯H蓋。122・123は須恵器無台杯(杯G身もしくは杯A)で、123の外底面に「三」字状のヘラ記号が施されている。124・125は須恵器杯B身である。125の底部には「×」字状のヘラ記号が認められる。126は須恵器盤。

127～131は土師器甕である。外面に縦および斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施されているものが多いが、130の内面にはケズリが施されている。

須恵器は、古い様相をもつものも含まれるが、7世紀後葉～8世紀初頃のものが中心である。土師器杯Cなどもこの時期である。なお、前記したように円面甕(319)は、包含層出土遺物として扱っているが、この遺構に伴う可能性が高い。

**竪穴住居SH23出土土器(111～113)** 出土遺物は少ないが、須恵器杯・壺、土師器甕などがある。

111は須恵器杯Hで、7世紀中葉もしくは7世紀後葉頃の猿投窯跡群の製品と類似する。112・113は土師器甕である。外面に縦および斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施されており、口縁端部は上方につまみあげられている。

**落ち込みS Z 13出土土器(132)** 須恵器高杯(132)の1点がある。3方向の透かしをもち、7世紀代の製品であろう。

**竪穴住居SH12出土土器(133～137)** 須恵器杯・高杯・壺、土師器甕・高杯などがある。全体に高杯が多く、土師器甕は約26%とやや少ない。須恵器の大多数は猿投窯跡群の製品と推測される。

133は須恵器杯H身である。134は有蓋高杯か、杯底部にはカキメが施されている。135は無蓋高杯である。136・137は高杯である。透かしをもたない小形のものである。

時期は7世紀中葉頃と考えられる。

**竪穴住居SH19出土土器(138・139)** 出土遺物は極めて少ないが、須恵器杯・土師器甕などがある。

138は須恵器杯。近畿地方で一般的にみられる形態である。139は土師器甕である。口縁端部は上外方につまみあげられている。これらは7世紀後葉～8世紀初頭頃のものであろう。

**落ち込みS Z 29出土土器(140～161)** 須恵器杯・土師器杯・甕、土鍾などの多くの遺物がまとまって出土している。須恵器・土師器の占める割合はほぼ等しい。土師器は、甕が最も多く全体の約41%を占める。また、須恵器は杯類で占められ、その大多数は猿投窯跡群の系統にあると考えられる。

140は土鍾。141は土師器杯Gである。142は土師器椀であり、底外面には横および縦方向のハケメが認められる。

143は須恵器杯H身である。144～146は、須恵器無台杯であり、145・146は体部から口縁部にかけて、直線的に外方に開く。147・148は須恵器杯B身であり、短い高台が外方にふんばっている。

149～160は土師器甕である。外面に縦および斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施されているものが多い。このうち、157～160は口径30cm以上で、把手付鍋の可能性もある。156は長胴甕である。161は土師器甕である。

これらの遺物は、7世紀後葉～8世紀初頭頃と考えられるものが多いが、143のように7世紀中葉頃の様相をもつものも少量含まれている。

**カマドSF9出土土器(162～167)** 須恵器杯・椀・壺・鉢、土師器杯などがある。須恵器杯類が最も多く全体の約45%を占めている。また、須恵器の大多数は猿投窯跡群の系統と考えられる。

162は土師器杯Cである。内面に一段の放射状暗文が施されている。

163は須恵器壺蓋。164は須恵器杯G蓋である。165は須恵器杯Hであり、受け部径11.0cmと極めて小形である。猿投窯跡群の岩崎17号窯跡<sup>⑩</sup>に併行する時期の製品に近似するが、胎土はこの生産地のものと比べ異なる。166は須恵器椀とした。体部全体にクロケズリが施されている。167は須恵器把手付片口鉢であり、体部外面にタタキが施されている。

なお、162・165・166・167は石組みのカマド内、163・164はカマド北側から出土した。

これらの遺物は、7世紀後葉～8世紀初頭頃のものであると考えられる。

**溝SD2出土土器(168)** 須恵器杯・土師器甕などがある。図示した168は土師器長胴甕である。外面に縦および斜め方向のハケメ、内面にケズリが施され

ている。

**カマドSF8出土土器** (169～177) 須恵器杯・壺、土師器皿・高杯・甕・甔などがある。土師器が全体の約60%を占めるが、このうち甕は約17%と少ない。

169は須恵器杯G蓋である。形態・胎土など7世紀後葉頃の美濃須衛窯跡群の製品に近似している。170は須恵器杯B蓋であり、8世紀後葉頃の特徴をもつ。171は須恵器杯B身で高台は外端で接地している。

172・173は土師器皿Aで、172は外面全体にケズリが施されている（c手法<sup>100</sup>）。173は斎宮跡などで出土する製品に類似しており、斎宮の土器編年<sup>111</sup>のⅠ期第4段階～Ⅱ期第1段階にあたる。174は土師器高杯。脚部に縦方向の面取り風のケズリが施されている。175は土師器甕。176・177は土師器甔である。体部外面下半部および底部付近にケズリが施されている。なお、172・173・174・176・177は石組みのカマド内から出土している。

これらは8世紀後葉頃の遺物が中心である。

**掘立柱建物SB33出土土器** (178・179) 出土物は極めて少ないが、須恵器杯・甔がある。178は須恵器杯H、179は須恵器甔である。体部に一条の沈線が施されている。いずれも7世紀後葉～8世紀初頭頃の猿投窯跡群の製品と推測される。

**ビット出土土器** (180・181) いずれも土師器甕である。

**落ち込みSZ7出土土器** (182～262) 須恵器杯・皿・高杯・壺・横瓶・平瓶・鉢・甕、土師器杯・皿・小形鉢・甕・甔などの多くの遺物が出土している。須恵器と土師器の占める割合はほぼ等しく、なかでも土師器甕が約42%と多い。須恵器は杯が多く、全体の約30%を占める。

182～208は土師器である。182は杯G、183は杯Cである。184は高杯で、内外面に赤彩が認められる。185は鉢で、口縁端部が若干外反する。186～208は甕である。口縁部は外反し、外面に縦および斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施されているものが多い。ただし、188・202は垂直気味にたちあがる口縁部をもつ。また、186・208は、口縁部が大きく鍋の形態に近く、208は把手が取り付けられている。

209～262は須恵器である。須恵器の大多数は猿投窯跡群の系統にある。209～214は杯H蓋。ただし、209・

210は、杯Hとするには疑問があり、210は高杯の可能性もある。215～221は杯H身である。216は比較的高いたちあがりをもつため、6世紀代のものであろう。215・221は、近畿地方において一般的な形態である。222～228はかえり付の杯蓋(杯G・杯B)である。223・226は美濃須衛窯跡群の製品に近似している。229～235は杯B蓋。230には「\*」、234には「x」状のヘラ記号が認められる。また、234は胎土などが美濃須衛窯跡群の製品に近似しており、235は近畿地方において一般的な形態である。236～243は無台杯(杯G・杯A)である。242は胎土・形態など近畿地方の製品に近い様相であり、底部には「x」状のヘラ記号が施されている。244～247は杯B身である。244の底部には「井」字状のヘラ記号があり、内底面は研磨されている。246・247の外底部にはヘラ記号が施されている。

248・249は鉢とした。250～252は高杯。253・254は甕であり、254の体部には注口が付く。255は長頸甕。近畿地方において一般的な形態であり、底部には高台が取り付け付いた痕跡が認められる。256は鉢Aである。体部下半分にクロケズリが施されている。257は提瓶もしくはフラスコ形土器、258は把手付鍋である。形態・胎土などの特色から猿投窯跡群とは異なる生産地のものであろう。259は壺である。短い口縁部をもち、肩部付近には2段にわたり凸線がめぐり、260は平瓶、261・262は横瓶である。

須恵器は、6世紀中葉～8世紀前葉頃にかけてのものが認められる。土師器は7世紀代のもものが中心である。

**遺構外出土土器** (263～333) 263～281は土師器である。263～265は土鉢。266は杯Cであり、外面にヘラケズリ、内面に螺旋と放射状の暗文が施されている。また外底面に「x」字状のヘラ記号が認められる。267は杯G、268は杯Aである。斎宮跡から出土するものに類似しており、斎宮土器編年のⅠ期第4段階～Ⅱ期第2段階に併行する時期のものと考えられる。269～272は皿Aである。270の内面には暗文が認められるが、不明瞭である。271の外面にはケズリの後ミガキが施されている。273～280は甕で、外面に縦および斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施されているものが多い。279・280は口径30cmと大きく、把手付き鍋の可能性もある。281は甔。

282～333は須恵器である。須恵器の大多数は猿投窯跡群の系統にある。282は高杯蓋。283～288は杯H蓋である。ただし、285は高杯の可能性がある。287・288は近畿地方において一般的な形態である。289～292は杯H身である。このうち、290は近畿地方の特色をもつ。

293は壺蓋。美濃須衛窯跡群の製品に近似する。294～302は杯蓋(杯G・杯B)である。このうち、294～298は内面にかえりをもつ。297は胎土などが美濃須衛窯跡群の製品に近似する。295の内面には、「※」字状と推測されるヘラ記号が施されている。また、299・301の内面は研磨されている。303～305は無台杯(杯G・A)である。306～314は杯B身。307・313は形態・胎土など猿投窯跡群の製品とは異なる。314の底外面には「井」字状のヘラ記号がある。315～318は高杯。319は円面視である。14箇所透かしが確認でき、復元すると、概ね28箇所開けられていたと考えられる。320は底部片であるが、捏鉢と思われる。321は壺の底部と考えられ、底部に糸切り痕がある。322は小形の短頸壺。323は瓶類であろう。324は壺で、底部に糸切り痕が認められる。325は甕である。高台をもち、底部に静止糸切りの痕跡が認められる。326・327は壺、328は鉢。329～331は横瓶である。332・333は甕で、332の内面には、「×」字状のヘラ記号が認められる。

(浅生)

## 6 石製品・鉄製品

石製品・鉄製品は、出土状況から奈良時代以前のものであることは確かであるが、それ以上の厳密な時期比定ができるものは少ない。

紡錘車 334は、鉄芯が挿入された状態で出土した紡錘車である。調査時の不注意で、鉄芯の大部分を遺失してしまった。円盤部は結晶片岩を研磨して仕上げたもの。上面には三重の圏線と弧線による鋸歯文を12区画描かれる。側面は直線による鋸歯文を16区画描き、下段の圏線帯内に斜文を施している。心棒は鉄で、断面は円形を呈している。

刀子 335は全長約11.2cmの刀子である。刃部よりも柄の部分が異様に長く見えるが、これは使用による

刃部の摩耗による相対的なものであろう。竅穴住居SH21の貝層中から出土したもので、貝をこじ開けるのに使われたものと考えられる。

叩石 336～343は叩石。339以外は、自然の円礫を利用したもので、短側面に敲打痕が見られる。336の敲打部分には水銀朱と考えられる付着物がある。339は縄文時代の石棒を転用したものである。

砥石 344～350は砥石。いずれも手持ちで使用するものと考えられ、349・350は仕上げ砥に相当するものであろう。344～346は軽石製のもの。345の研磨痕は全体に及び、砥石自体が丸くなっている。

## 7 中世の土器

少量であるが、中世の土器も出土している。351は陶器椀(山茶椀)で、知多半島産と考えられる12世紀後半のもの。352・353は南伊勢系の土師器皿類で、中世IVb期頃(16世紀前半)のものである。354は常滑産鉢類で、15世紀後半のもの。(伊藤)

### <註>

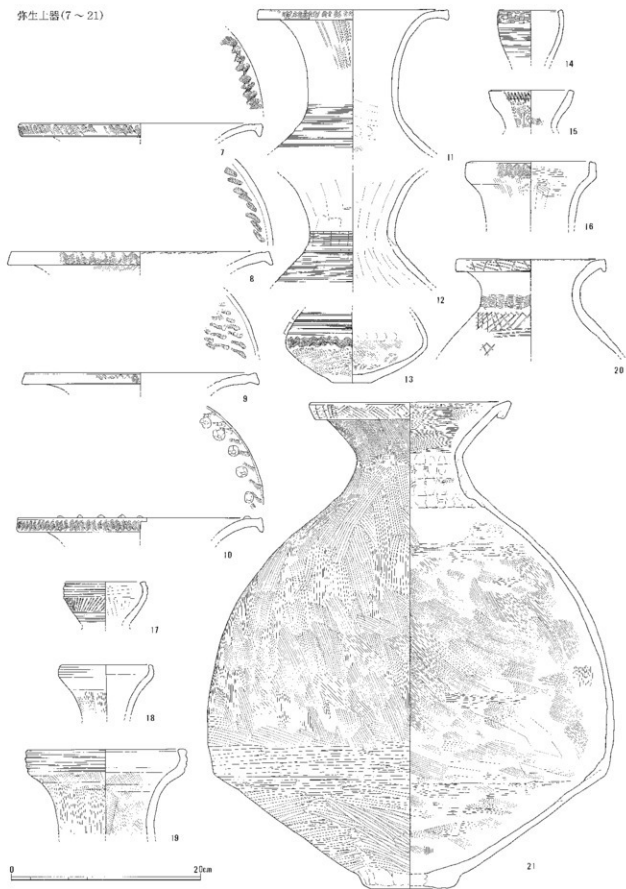
- (1) 玉田芳美「中津・福田Ⅱ式土器様式」、『縄文土器大観』4、小学館、1989年
- (2) 弥生土器の編年と系統、施文方法等に関しては、以下の文献を参照した。  
・石黒立人編『阿弥陀寺遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990年  
・加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』(木耳社 2002年)  
・森田克行「複合標識」、『弥生文化の研究』10 種山園 1989年
- (3) 原田幹「中部地方の土器」、『考古資料大観』第2巻、小学館、2002年
- (4) 川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」、『編註』III 三重県埋蔵文化財センター 2001年
- (5) 赤塚次郎編『細田遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990年、および川崎氏前掲註(4)文献。
- (6) 奈良国立文化財研究所『平城宮宮庭調査報告書』Ⅷ(1976年)
- (7) 北野博司「須恵器の風船技法」、『つぼとかのつくり方』北陸古代土器研究会 2001年
- (8) 各務原市教育委員会『美濃須衛窯跡群資料調査報告書』(1984年)、各務原市埋蔵文化財調査センター『須衛天向谷古墳群・天向谷窯跡群発掘調査報告書』(1988年)。
- (9) 城ヶ谷和広「猿投窯跡17号窯出土須恵器の再検討」、『愛知県史研究』第7号 2003年
- (10) 前掲註(6)文献。
- (11) 富宮歴史博物館『富宮窯跡群調査報告書』I (2001年)

縄文土器(1～6)



第16図 出土建物実測図(1) 縄文土器(1:3)

弥生土器(7~21)

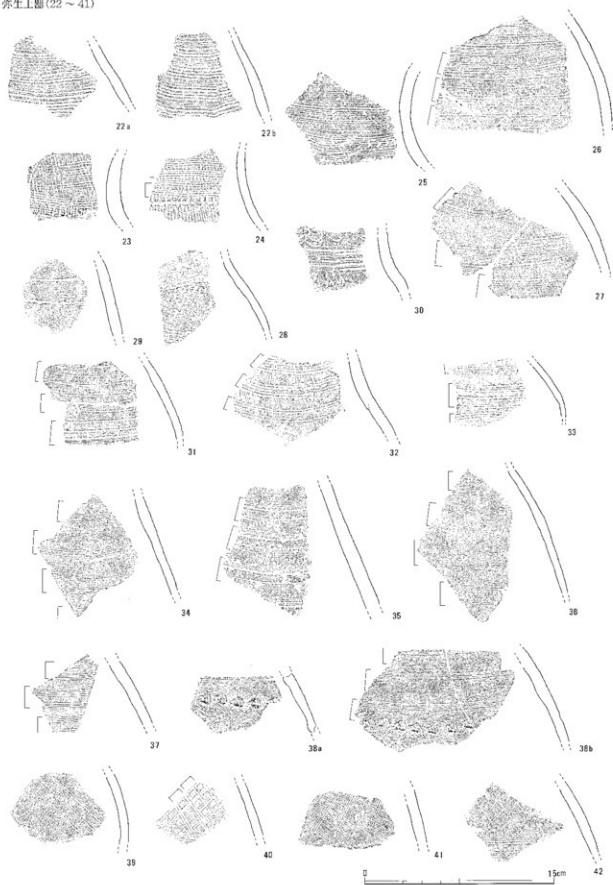


第17図 出土遺物実測図(2) 弥生土器(1:4)

〔…複合櫛描文の原体幅

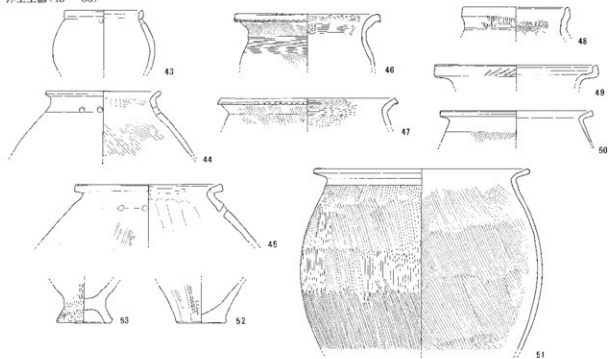


弥生土器(22～41)

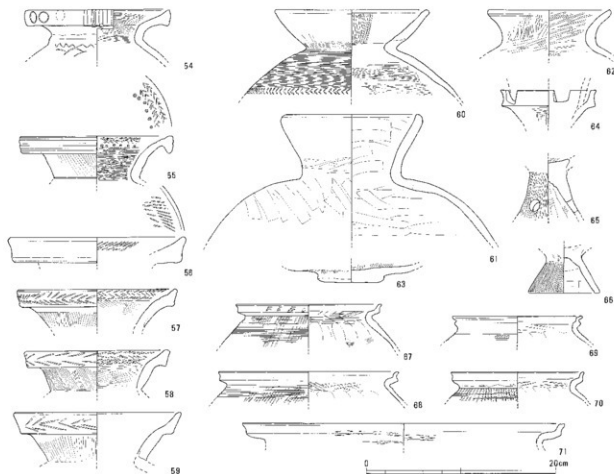


第18図 出土建物実測図(3) 弥生土器(1:3) [---複合櫛描文の原体幅]

弥生土器(43 ~ 53)

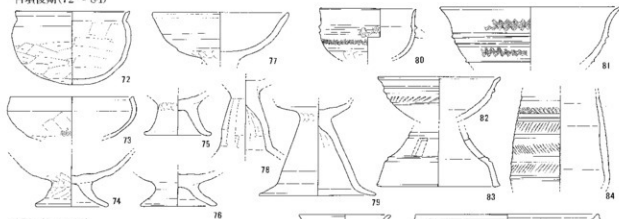


古墳前期(54 ~ 71)

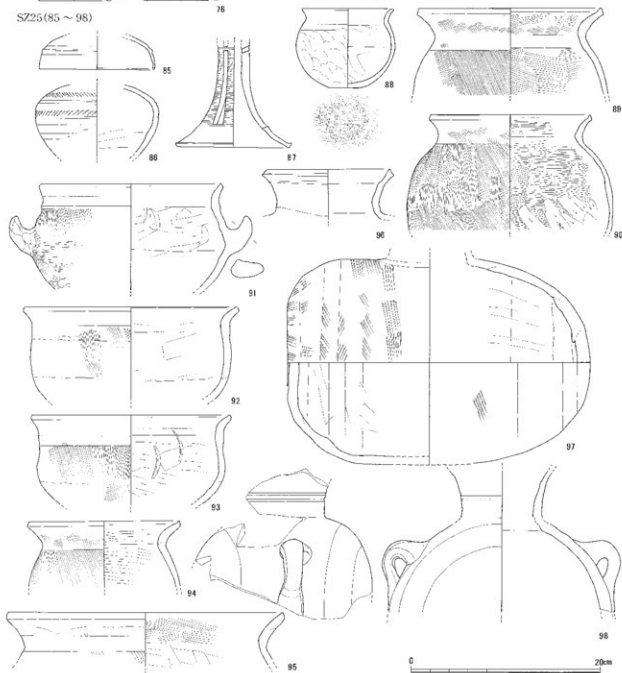


第19図 出土建物実測図(4) 弥生・古墳前期(1:4)

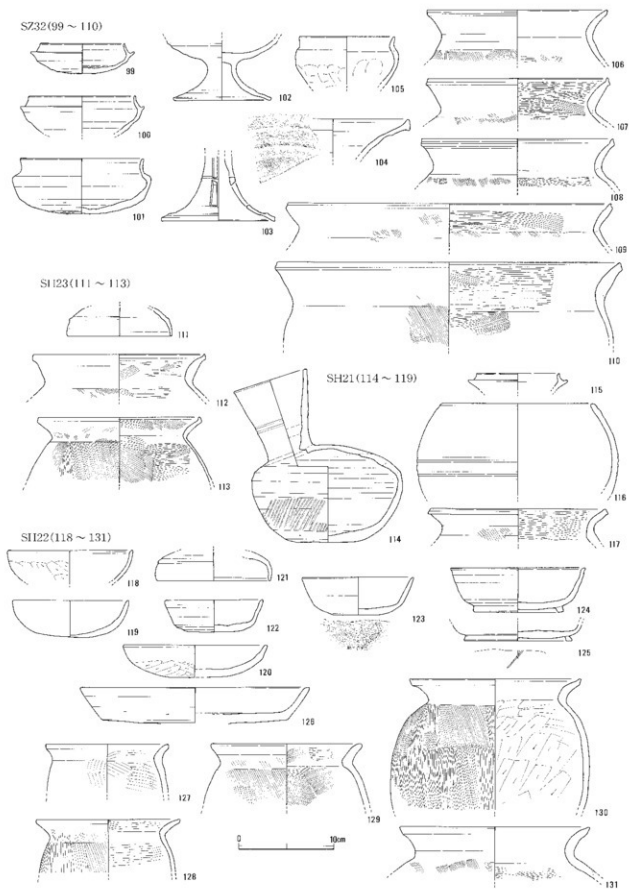
古墳後期(72 ~ 84)



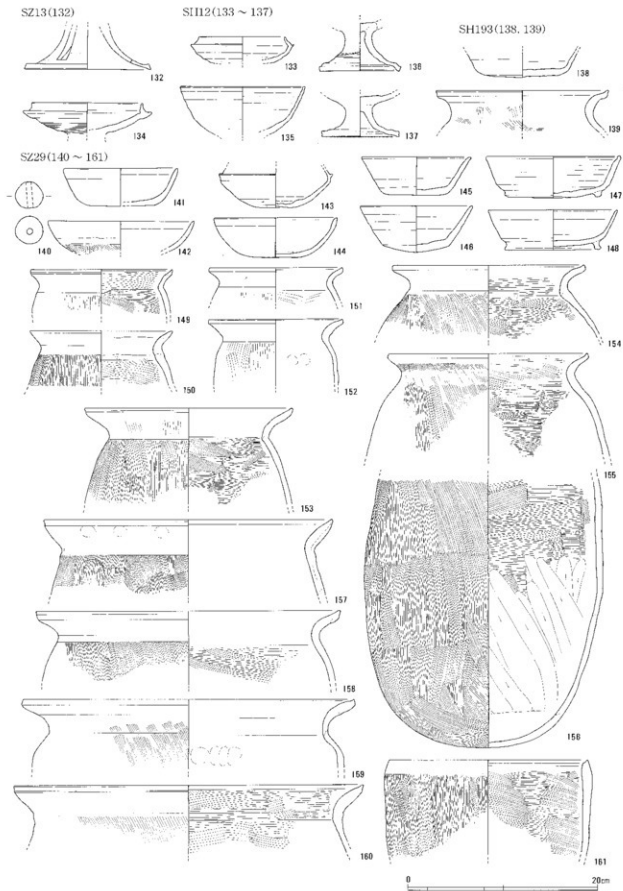
SZ25(85 ~ 98)



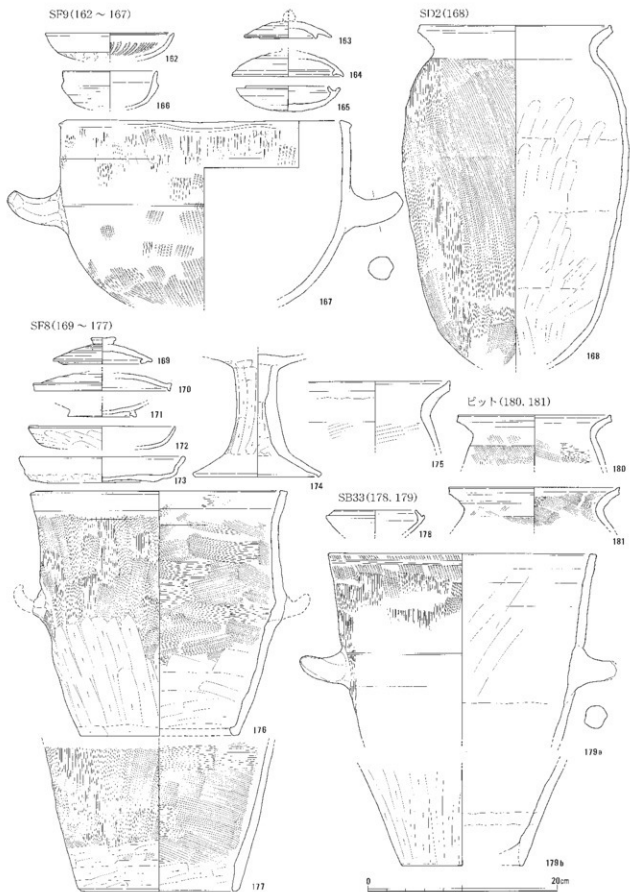
第20図 出土建物実測図(5) 古墳後期(1:4)



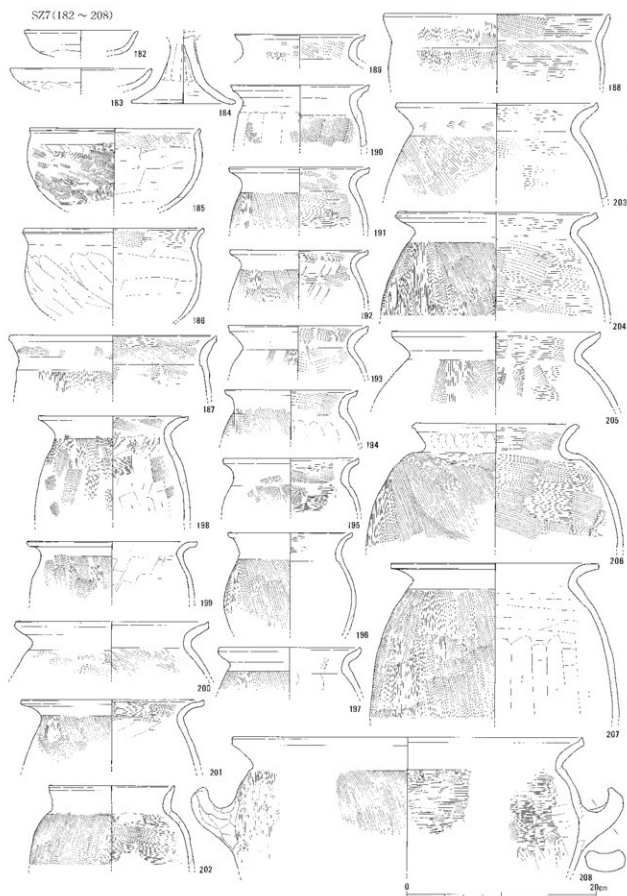
第21図 出土建物実測図(6) 古代(1:4)



第22図 出土建物実測図(7) 古代(1:4)

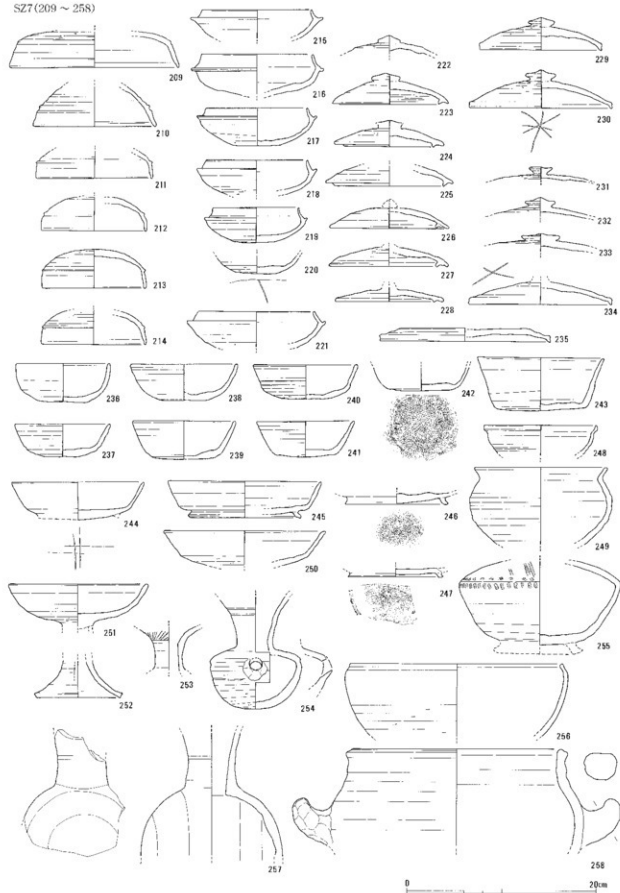


第23図 出土建物実測図(8) 古代(1:4)



第24图 出土建物実測图(9) 古代(1:4)

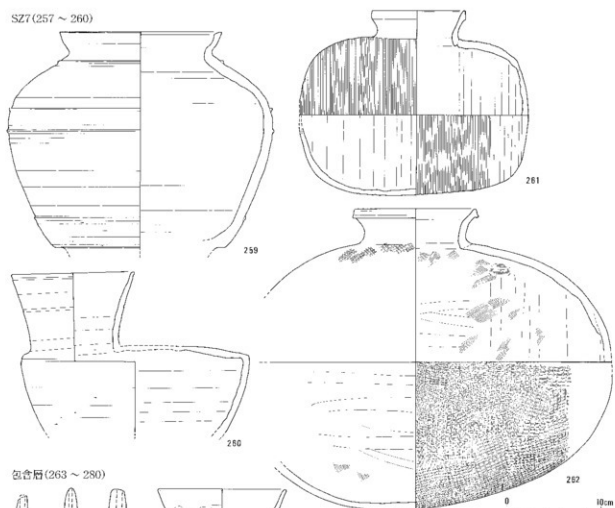
SZ7(209 ~ 258)



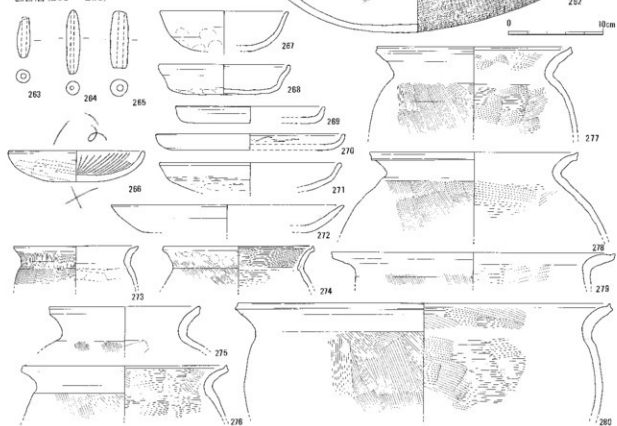
第25图 出土建物実測図(10) 古代(1:4)



SZ7 (257 ~ 260)

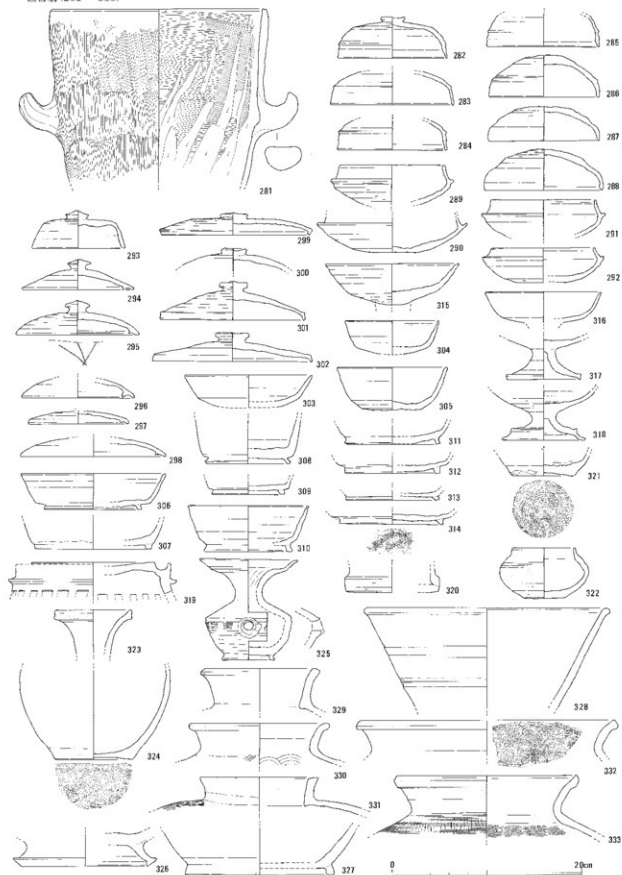


包含層 (263 ~ 280)



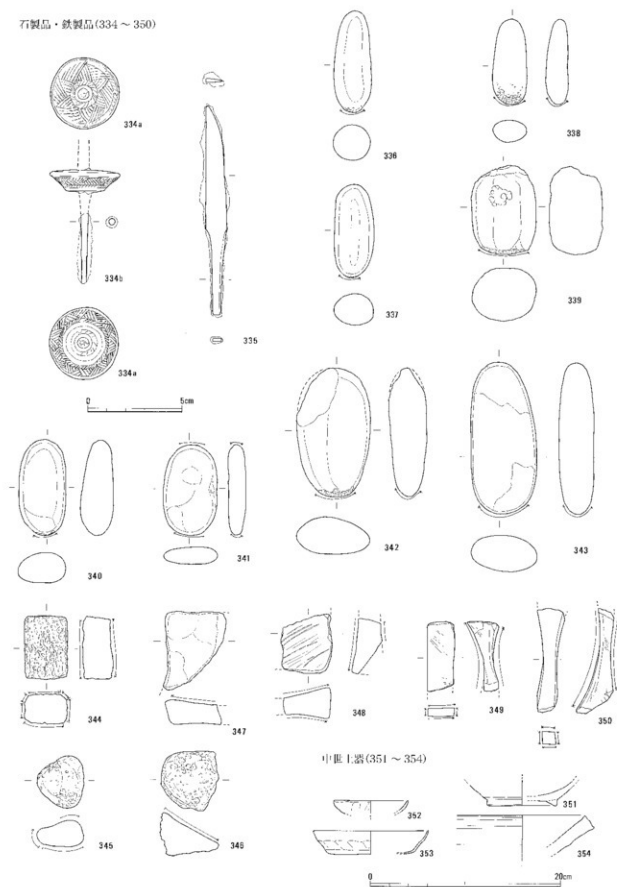
第26図 出土建物実測図(11) 古代(1:4)

包含層(281~333)



第27图 出土建物実測図(12) 古代(1:4)

石製品・鉄製品(334～350)



第28図 出土建物実測図(13) 石製品・鉄製品・中世土器(334-335は1:2,他は1:4)

第3表 おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(1)

番号	実定番号	種別	形状など	グロット	遺跡層等	总量 (個)	調査・出土の場所	期土	色調	形状	備記事項
14	502	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層) 内:アア	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	口縁部破片
15	503	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層、)宇土(内:藤原土器下層、)宇土(内:藤原土器下層)の調査	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	口縁部破片・底面破片
16	503	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD3	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)宇土(内:藤原土器下層)	中・中	黄褐色	1個破片	口縁部破片
14	503	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層、)内:アア、1号中、調査区に調査	Ⅲ	黄褐色	1個破片	口縁部破片
14	505	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	口縁部破片
17	502	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	502	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	黄褐色	1個破片	外底に印状者
15	508	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	口縁部破片
11	508	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	黄褐色	1個破片	底面片
11	507	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	—	外:宇土(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	511	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	—	外:宇土(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
11	505	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	—	外:宇土(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
16	510	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	501	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	501	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	505	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	505	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	504	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	509	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	黄褐色	1個破片	底面片
11	503	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2上層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
14	502	縄文土器	磨石土器 遺跡	a2	SD2	(図)14.2	外:アア(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	底 3/12	
24	504	縄文土器	遺跡	a2	SD3中層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	Ⅲ	黄・明褐色	1個破片	底面破片
25	501	縄文土器	遺跡	a2	SD3中層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	Ⅲ	黄・明褐色	1個破片	底面片
26	504	縄文土器	遺跡	a2	SD3中層	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	Ⅲ	黄・明褐色	1個破片	底面片
3	503	縄文土器	遺跡	b1	SD2	—	外:藤原土器(内:藤原土器下層)	Ⅲ	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
4	504	縄文土器	遺跡	b1	SD2	—	外:藤原土器(内:藤原土器下層)	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	底面片
3	502	縄文土器	遺跡	a2	SK6	—	外:江崎区(内:藤原土器下層)	中・中	黄褐色	1個破片	底面片
7	505	縄文土器	高脚	a9	SZ7 褐色 砂	(例) 1	外:高脚土(内:アア)→遺跡→調査区に調査	中・中	灰白・黄褐色	1個破片	
7	401	弥生土器	甕	19	SZ7 褐色 砂	(1)125.8	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文 内:アア→伊藤文	中・中	黄・灰白・黄褐色	1個 2/12	
8	601	弥生土器	甕	19	SZ7 褐色 砂	(1)127.2	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文 内:アア→伊藤文	中・中	黄	1個 1/12	
9	602	弥生土器	甕	19	SZ7 褐色 砂	(1)125.9	外:アア→ヨコナゲ→伊藤文 内:ヨコナゲ→伊藤文	中・中	黄	1個 1/12	
10	602	弥生土器	甕	410 + 19	SZ7 褐色 砂	(1)125.6	外:ヨコナゲ→伊藤文 内:ヨコナゲ→伊藤文	中・中	黄	1個 2/12	
11	704	弥生土器	甕	a + 19	SZ7 褐色 砂	(1)126.3	外:上野キ→ヨコナゲ→伊藤文(内:伊藤文) 内:アア→伊藤文	中・中	灰白・黄褐色	1個 2/12	
12	701	弥生土器	甕	19	SZ7 褐色 砂	(例) 9.8	外:高脚土→伊藤文	中・中	灰白・黄褐色	底面 3/12	外底に黄褐色点
13	605	弥生土器	甕	a9	SZ22	(例) 4.9	外:アア、上野キ→伊藤文(内:伊藤文) 内:ハクメー→伊藤文	Ⅲ	灰白・黄褐色	底面 3/12	底面の黄褐色は、3単位一部分の黄褐色点
14	702	弥生土器	甕	19	包含層	(1) 7.8	外:高脚土(内:伊藤文)	中・中	灰白・黄褐色	1個 3/12	
15	803	弥生土器	甕	110	SZ7 + SF 8砂	(1)1 8.9	外:ハクメー→伊藤文 内:アア→伊藤文	Ⅲ	灰白・黄褐色	1個 2/12	
16	805	弥生土器	甕	49	SZ7 褐色 砂	(1)133.7	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文 内:ハクメー→アア	Ⅲ	灰白・黄褐色	1個 1/12	
17	705	弥生土器	甕	47	包含層 砂	(1) 8.8	外:高脚土(内:伊藤文) 内:アア→伊藤文	Ⅲ	灰白・黄褐色	1個 1/12	
18	706	弥生土器	甕	—	SZ7	(1) 8.8	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文 内:アア→伊藤文	Ⅲ	黄褐色・灰白・黄褐色	1個 2/12	
19	701	弥生土器	甕	19	SZ7 褐色 砂	(1)127.8	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文	Ⅲ	灰白・黄褐色	1個 1/12	
20	601	弥生土器	甕	19	SZ7 褐色 砂	(1)125.8	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文 内:アア→伊藤文	Ⅲ	黄褐色・灰白・黄褐色	1個 5/12	
21	701	弥生土器	甕	110	SZ7 + SF 8砂	(1)127.8 (1)112.5	外:ハクメー→ヨコナゲ→伊藤文 内:アア→伊藤文	中・中	灰白・黄褐色 内 黄	1個 5/12 底面 3/12	1個破片ハクメーを伴って出土した

第4表 おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	種別	器種など	アビッド	透視/厚さ等	直径(mm)	形状・技法の概要	出土	色調	備付状況	備記事項
224	7306	灰土土器	甕	φ7	包含層 底層中層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄緑)	破片	
225	7305	灰土土器	甕	φ7	包含層 底層中層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄緑)	破片	
23	7494	灰土土器	甕	φ19	S2下黄褐色	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
24	7303	灰土土器	甕	φ19	包含層 底	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
25	7496	灰土土器	甕	φ11	S2下黄褐色	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄緑(灰土)黄	破片	
26	7301	灰土土器	甕		試掘区3	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄	破片	横断径約は4.8/3.7cm
27	7301	灰土土器	甕	φ8	包含層 底層中層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	横断径約は1.8cm
28	8494	灰土土器	甕		—	—	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
28	7302	灰土土器	甕	φ9	S2下黄褐色	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
30	7303	灰土土器	甕	φ19	S2下	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄褐色	破片	
33	7304	灰土土器	甕	φ9	包含層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	横断径約は、日本で1番目
32	7302	灰土土器	甕	φ19	包含層 底層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄緑(灰土)黄	破片	
33	7303	灰土土器	甕	φ19	包含層 底層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
34	7304	灰土土器	甕	φ19	包含層 底層中層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	灰土、一部赤土
35	7302	灰土土器	甕	φ8	包含層 底層中層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	2枚目の灰土陶器文
36	7301	灰土土器	甕	φ9	包含層 底	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄褐色	破片	
37	7303	灰土土器	甕	φ16	包含層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
384	7402	灰土土器	甕	φ8	S2下黄褐色	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	灰土、一部赤土
385	7401	灰土土器	甕	φ19	S2下黄褐色	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	灰土、一部赤土
39	7306	灰土土器	甕		出土	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
40	7407	灰土土器	甕	φ12	包含層	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
42	7302	灰土土器	甕	φ7	S2下	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
42	7303	灰土土器	甕	φ9	S2下黄褐色	(8)	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
43	7304	灰土土器	短筒甕	φ19	包含層	(1) 8.3	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	目録に穿孔1箇所有り
44	6802	灰土土器	短筒甕	φ9	S2下黄褐色	(1) 12.2	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄	破片	目録に穿孔2箇所有り(1) 6cm
45	6804	灰土土器	短筒甕	φ12	包含層	(1) 13.6	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	目録に穿孔2箇所有り(1) 6cm
46	6704	灰土土器	甕	φ8	S2下黄褐色	(1) 14.8	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄褐色(灰土)黄	破片	
47	7304	灰土土器	甕		試掘区2	(1) 19.2	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄褐色	破片	
48	6803	灰土土器	甕	φ19	S2下黄褐色	(1) 14.4	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
49	7305	灰土土器	甕	φ14	S2下	(1) 17.8	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
50	6803	灰土土器	甕	φ11	S2下黄褐色	(1) 16.9	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
51	7305	灰土土器	甕	φ16	S2下	(1) 22.8	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
52	7306	灰土土器	甕	φ9	包含層	(1) 3.3	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄褐色	破片	
53	6703	灰土土器	白付甕	φ8・φ4 φ付直	横断径約	(1) 3.8	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
54	6801	土師器	甕	φ9	包含層	(1) 12.2	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄褐色	破片	
55	6802	土師器	甕	φ19	包含層	(1) 16.1	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄(灰土)黄	破片	目録内外面と上面の灰土より下にペンギン型を 透す
56	6804	土師器	甕	φ8	包含層	(1) 13.6	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄(灰土)黄	破片	目録内外面とペンギン型を透す
57	6306	土師器	甕	φ15	φ1・φ1	(1) 16.9	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	横す形跡
58	6301	土師器	甕	φ11	S2下	(1) 15.4	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄	破片	
59	6401	土師器	甕	底層	包含層	(1) 12.6	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	黄	破片	横す形跡
60	6302	土師器	甕		試掘区1	(1) 16.3	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	目録内外面に横す形跡
61	6902	土師器	甕	φ17	φ1・φ1	(1) 14.7	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	
62	7302	土師器	甕	φ9	S2下黄褐色	(1) 12.8	灰土陶器(灰土)内 フナダ	中層	灰土(黄)	破片	

第5表 おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	品名	形状など	アビット	遺跡・層位等	重量(g)	撮影・技法の概要	素材	色調	検出状況	補記事項
63	6402	土師器	壺	4-2	S D 5	(測) 6.3	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黒・白 赤い・黄緑 内:白	底面定石	
64	6403	土師器	器台	114-15	S Z 16	(計) 10.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑 赤い・白	1000-2112	外面にペン・タテを有する。5.5cmに短冊状の透入痕あり。
65	7201	土師器	高杯	7-9	S Z 7 褐色色砂	(測) 3.9	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	褐色	1001-1212	5.5方透かし丸。
66	7303	土師器	台付壺	4-12	包含層	(測) 7.5	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑 赤い・白	1000-1112	
67	6305	土師器	台付壺		1000底1	(計) 15.3	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-1112	S Z 土層 外面に短冊状
68	6302	土師器	台付壺	7-9	包含層	(計) 10.9	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112	S Z 土層
69	6301	土師器	台付壺	7-9	S Z 7・S P 9 砂底	(計) 12.7	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・白	1000-2112	S Z 土層
70	6304	土師器	台付壺	4-9	S Z 7・S P 9 底 褐色色砂	(計) 13.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112	S Z 土層
71	6304	土師器	台付壺	4-8	S Z 7 褐色色砂	(計) 13.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黄緑	1000-1112	S Z 土層
72	3004	土師器	中杯鉢	7-9	S Z 7 褐色色砂	(計) 11.4-12.4 (測) 7.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄緑	1000-1012	
73	407	土師器	小杯鉢	4-14	p 1 1 4	(計) 12.1	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	褐色	1000-2112	
74	0008	土師器	台付小杯鉢		底:1000底付 底:1000底付	(測) 7.7	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄緑	1000-9112	
75	0007	土師器	台付小杯鉢		底:1000底付 底:1000底付	(測) 7.9	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄緑	1000-3112	
76	3002	土師器	台付小杯鉢	4-16	包含層	(測) 8.1	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黄緑	1000-7112	
77	3001	土師器	高杯	1-8 砂底	包含層 透かし底	(計) 14.4	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-6112	
78	3002	土師器	高杯	b-114-13	包含層	(測) 12.3	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1001-6112	
79	3001	土師器	高杯	b-114-13	包含層	(測) 12.3	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112	
80	3002	灰器器	瓶	4-9	S Z 7 褐色色砂	(計) 10.2	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄緑	1000-2112	底面の透かしあり
81	3004	灰器器	無蓋高杯	7-13	包含層	(計) 10.1	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黄緑	1000-1112	
82	4013	灰器器	高杯	4-9	S Z 7 褐色色砂	(計) 11.9	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黄白・黄	1000-2112	
83	4004	灰器器	器台	4-9	S Z 7 褐色色砂	(測) 12.0	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄白	1000-1112	3.5方透かし。
84	3002	灰器器	器台	c-1	包含層	(測) 8.2	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄	1001-1112	
85	702	灰器器	杯蓋	4-19	S H 25	(計) 12.2	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄	1000-1112	
86	902	灰器器	蓋	4-19	S H 25	(測) 12.1	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄白・黄	1000-2112	外面に透かしあり
87	1002	灰器器	高杯	4-19	S H 25 P 3	(測) 12.3	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄 内:黄白	1000-定石	2.5方透かし透かしあり
88	901	土師器	小杯鉢	4-19	S H 25 P 4	(計) 9.7 (測) 8.3	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	赤い・黄緑 赤い・白	1000-5112	外面に透かしあり
89	804	土師器	壺	4-19	S H 25 P 5	(計) 10.6	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-3112	
90	902	土師器	壺	4-19	S H 25 マツダp 1	(計) 12.2 (測) 12.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112 1000-3112	
91	902	土師器	壺	4-19	S H 25 マツダp 4	(計) 11.4	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112	
92	802	土師器	壺	4-19	S H 25 マツダp 2	(計) 12.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-3112	
93	901	土師器	壺	4-19	S H 25 マツダp 1	(計) 12.1	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112	外面に透かしあり
94	901	土師器	壺	4-19	S H 25 p 6	(計) 10.2	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	赤い・黄緑	1000-4112	
95	901	土師器	壺	4-19	S H 25	(計) 10.4	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	赤い・黄緑	1000-2112	
96	701	灰器器	横瓶	4-19	S H 25 4 器台	(計) 12.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄	1000-3112	
97	3001	灰器器	横瓶	4-19	S H 25 p 9	(測) 12.0	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄白・黄	1000-3112	自然脱皮現象不明瞭
98	4013	灰器器	横瓶	4-19	S H 25 p 2	(測) 8.4	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄白	1000-3112	自然脱皮現象不明瞭
99	2004	灰器器	杯蓋	4-19	S Z 32	(計) 9.9 (測) 11.9	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄白	1000-2112	
100	2003	灰器器	杯蓋	4-19	S Z 32	(計) 11.3 (測) 13.2	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄 内:赤い・黄緑	1000-2112	
101	1011	灰器器	短瓶蓋	4-19	S Z 32	(計) 12.9 (測) 5.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表 側面(黄白)	黄白	1000-1112	
102	1005	灰器器	高杯	4-19	S Z 32	(測) 10.4 (測) 5.9	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黄白	1000-定石 1000-1112	
103	2302	灰器器	高杯	4-19	S Z 32	(測) 12.8	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄	1000-4112	2.5方透かし透かしあり
104	2303	灰器器	壺	4-19	S Z 32	(計) -	黒ノリ土器ハコケ 内:白	表	黄	1000-1112	
105	2004	土師器	中杯	4-19	S Z 32	(計) 10.2	黒ノリ土器ハコケ 内:白	中・中層	黄 内:赤い・黄緑	1000-2112	脱皮している



第7表 おばたけ遺跡(第5次)出土土物観察表(5)

番号	実測番号	品名	器種・用途	アビット	遺跡・層位等	重量(g)	形状・技法の概要	胎土	色調	焼成度	備記事項
148	1004	土師器	甕	α19	SZ20	(11)11.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:赤褐色	1000 2/12	
150	1003	土師器	甕	α18	SZ20	(11)11.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:黒褐色	1000 3/12	
151	1001	土師器	甕	α19	SZ20 11層	(11)14.2	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 3/12	全体に厚化粧しい
152	1300	土師器	甕	α19	SZ20 11層	(11)14.2	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:赤褐色	1000 2/12	
153	1702	土師器	甕	α18-19	SZ20	(11)22.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:赤褐色	1000 2/12	
154	1001	土師器	甕	α18	SZ20	(11)20.4	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 3/12	
155	1002	土師器	甕	α18	SZ20	(11)21.2	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 2/12	
156	1001	土師器	高脚甕	α18	SZ20	(18)25.1	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:赤褐色	800 2/0-6	内面に厚化粧
157	1401	土師器	惣子付甕?	α19	SZ20	(11)30.4	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	浅黄褐色	1000 1/12	厚化粧しい
158	1001	土師器	惣子付甕?	α19	SZ20 11層	(11)32.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 2/12	
159	1701	土師器	惣子付甕	α19	SZ20 11層	(11)32.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ→ヨコナテ	中中灰	黄白	1000 2/12	
160	1402	土師器	惣子付甕?	α19	SZ20	(11)30.8	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 3/12	
161	1002	土師器	甕	α18	SZ20	(11)22.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 2/12	内面に厚化粧
162	4902	土師器	杯C	α9	SF9 内	(11)13.6	丸ノコメ→ヨコナテ 内:黒褐色	黄	黄	1000 2/12	
163	4901	土師器	杯蓋	α8	SF9 浅褐色胎	(11) 9.2 (表裏)9.1	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	灰褐色 内:赤褐色	1000 2/12	
164	4903	土師器	杯石蓋	α8	SF9 浅褐色胎	(11)11.8 (表裏)9.8	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	黄褐色	1000 3/12	
165	4901	土師器	杯	α9	SF9 内	(11)11.8 (表裏)9.8 (裏)7.8	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	灰	1000 8/12	自然釉あり・高脚甕の縁。調整不図
166	4904	土師器	杯	α9	SF9 内	(11)10.1	丸ノコメ→ヨコナテ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	灰褐色	1000 4/12	
167	4901	土師器	惣子付杯	α8	SF9 F1→F2	(11)11.0	丸ノコメ→ヨコナテ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	黄白	1001 1/12	
168	2801	土師器	高脚甕	α2	SD2	(11)20.5	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:黄褐色	1000 2/12	内面に厚化粧
169	2405	土師器	神蓋	F10	SF8 黄褐色胎	(11)10.5 F10→F12 内:ヨコナテ	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	黄褐色	1000 2/12	高脚甕縁から?
170	2404	土師器	神蓋	F10	SF8 黄褐色胎	(11)14.6	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	灰	1000 1/12	
171	2403	土師器	神杯	F10	SF8 内	(10) 7.2	丸ノコメ→ヨコナテ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	灰褐色	1000 2/12	
172	2801	土師器	甕A	F10	SF8 内	(11)15.6	丸ノコメ→ヨコナテ→浅緑 内:ハタメ→ヨコナテ	黄	灰褐色	1000 2/12	
173	2302	土師器	甕A	F10	SF8 内	(11)17.6 (裏) 2.7	丸ノコメ→ヨコナテ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ	黄	黄	1000 2/12	表面部分から破入か?
174	2303	土師器	甕B	F10	SF8 内	(11)13.6	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	赤褐色	800 5/12	
175	2402	土師器	甕	F10	SF8 黄褐色胎	(11)12.6	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1001 1/2	内面に厚化粧
176	2301	土師器	甕	F10	SF8 内	(11)22.8 (裏)10.6 (裏)2.6	丸ノコメ→ヨコナテ→ヨコナテ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ→ヨコナテ	中中灰	黄褐色	1000 4/12	内面に厚化粧
177	2301	土師器	甕	F10	SF8 内	(11)27.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 3/12	縦線に厚化粧(ヤマト織敷器に厚化粧か?)
178	404	土師器	神身	α1	p1 1.5 (S)8.0	(11) 8.8 (裏)10.4	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	黄	灰黄褐色 赤褐色	1000 4/12	
179a	301	土師器	甕	α1	p1 1.1 (S)8.0	(11)14.2	丸ノコメ→ヨコナテ→浅緑 内:ナメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:黄褐色	1000 3/12	
179b	301	土師器	甕	α1	p1 1.1 (S)8.0	(11)12.6	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:黄褐色	800 2/12	
180	405	土師器	甕	α16	p1 1.2	(11)16.1	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:黄褐色	1000 2/12	
181	406	土師器	甕	α18	p1 1.2	(11)16.1	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色	1000 2/12	
182	4201	土師器	杯C	α9	SZ7黄褐色胎	(11)12.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ	黄	黄褐色	1000 2/12	
183	2105	土師器	杯C	α9	SZ7黄褐色胎	(11)12.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ヨコナテ	中中灰	黄褐色	1000 1/12	
184	1006	土師器	甕B	α9	SZ7黄褐色胎	(11)11.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ	黄	黄褐色	800 1/12	内外面に赤彩(ハタメ)?
185	4011	土師器	甕	α9	SZ7黄褐色胎	(11)10.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	黄	黄褐色	1000 6/12	
186	2801	土師器	甕	α10	SZ7	(11)10.1	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ナメ→ヨコナテ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:赤褐色	1000 9/12	内面に厚化粧
187	4902	土師器	甕	α9	SZ7黄褐色胎	(11)12.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	黄	黄	1000 3/12	
188	4901	土師器	甕	α9	SZ7黄褐色胎	(11)24.0	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	黄褐色	1000 4/12	
189	2301	土師器	甕	α10	SZ7黄褐色胎	(11)12.6	丸ノコメ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	黄	灰褐色	1000 8/12	
190	1004	土師器	甕	α9	SZ7黄褐色胎	(11)14.7	丸ノコメ→ヨコナテ→ヨコナテ 内:ハタメ→ヨコナテ	中中灰	灰褐色 内:灰褐色	1000 2/12	



第8表 おばたけ遺跡(第5次)出土土物観察表(6)

番号	実測番号	品名	器種・文様	グロット	遺跡・層位等	重量(g)	形状・技法の概要	胎土	色調	焼成度	備記事項
191	3005	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)134.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	灰白→黄	1000 4/12	
192	3002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)134.6	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	丸・灰白→黄 内・灰白→黄	1000 4/12	内面に褐色斑あり
193	3003	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)134.8	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	丸・黄褐色 内・灰白→黄	1000 3/12	
194	4001	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)134.0	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄褐色→黄褐色	1000 5/12	
195	3002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)134.3	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	丸・灰白→黄 内・黄褐色	1000 3/12	内面に褐色斑あり・黄褐色斑あり
196	3003	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)135.2 (1)134.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	丸・灰白→黄 内・灰白→黄	1000 3/12 1000 5/12	
197	3002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7	(1)135.1	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄	1000 3/12	口縁部・赤変
198	3001	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)135.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	灰白→黄→黄	1000 6/12	外面に褐色斑
199	3001	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)135.8	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄褐色→灰白→黄	1000 3/12	
200	3001	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)136.5	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄褐色	1000 7/12	
201	3002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)138.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	灰白→黄	1000 4/12	
202	4002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7	(1)133.3	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄褐色	1000 6/12	
203	3001	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)121.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄褐色	1000 3/12	
204	4002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色小砂	(1)121.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	灰白→黄褐色	1000 4/12	
205	4001	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色小砂	(1)122.0	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄褐色→黄	1000 2/12	
206	2002	土師器	壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)117.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	丸・黄 内・灰白→黄	1000 3/12	
207	3001	土師器	高脚壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)122.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	丸・灰白→黄 内・黄	1000 2/12	外底・黄変
208	1201	土師器	短頸付壺	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)127.2	丸ノコトメ→直口サテ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ→直口サテ→直口サテ	中々硬	黄褐色	1000 4/12	
209	4205	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)118.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白→灰	1000 1/12	
210	4005	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)113.1	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白	1000 3/12	底面に褐色斑あり
211	4710	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	灰	1000 2/12	
212	4006	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.2	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白	1000 1/12	
213	4004	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)111.9 (1)111.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白	1000 7/12	
214	4303	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)111.1	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄	1000 4/12	
215	4206	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)111.6 (1)110.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	灰白→黄褐色	1000・黄 1000 5/2	
216	4104	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)111.8 (1)110.8	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄褐色→黄	1000 2/12 1000 3/12	
217	3002	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7	(1)110.8 (1)110.8	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄褐色→黄	1000 3/12 1000 4/12	
218	3001	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)110.9 (1)110.7	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄	1000 1/12 1000 2/12	
219	3005	灰土器	杯	Ⅱ	SZ 7	—	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄	1000 1/12	
220	3002	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7	—	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄	1000 1/12	
221	3002	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.3 (1)114.6	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	灰	1000 1/12 1000 2/12	
222	1204	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7	(1)112.2 (1)111.9	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄白	1000 2/12	
223	101	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7	(1)112.2 (1)111.5	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄白	1000	外底黄褐色小片
224	4206	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 SF 5 黄褐色砂	(1)112.6 (1)112.7	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白	1000 3/12	
225	4206	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.5	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄白	1000 3/12	
226	4204	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.6 (1)112.1	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白	1000 3/12	
227	4206	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.6	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄白	1000 2/12	
228	4205	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)111.5	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄白	1000 2/12	
229	4401	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)111.9 (1)111.4	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	黄白	1000 2/12	底面欠
230	1303	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.2 (1)111.8	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	黄	灰白→黄→灰	1000 1/12	
231	4204	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 SF 5 黄褐色砂	(1)112.1 (1)112.2	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	丸・黄 内・黄	1000 1/12 1000 2/12	
232	4202	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.1 (1)112.2	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白→灰	1000 1/12 1000 2/12	
233	4203	灰土器	杯蓋	Ⅱ	SZ 7 褐色砂	(1)112.1 (1)111.8	丸ノコトメ→直口サテ 内ノコトメ→直口サテ	中々硬	黄白	1000 1/12 1000 2/12	

第9表 おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(7)

番号	発掘番号	種別	器種・文様	グレイト	遺跡・層等	重量(g)	形状・技法の概要	胎土	色調	備付状況	備記事項
234	4707	瓦器類	杯蓋	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.2	丸口・口縁部→口縁部まで→ハナリコナナク 内:口縁部まで	黄	灰白	1000 2/12	内蓋にへり起
235	4701	瓦器類	杯蓋	※8	SZ7 褐色砂	(14)13.1	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰白	1000 2/12	
236	3202	瓦器類	杯	※8・※9	SZ7 褐色砂	(14)13.0.9 (8) 4.1	丸口・口縁部→ハナリコナナク→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰	1000 7/12	口縁部、底面大
237	4603	瓦器類	杯	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.2 (8)13.4	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	中々硬	灰白	1000 5/12	
238	4003	瓦器類	杯	※8	SZ7 褐色砂	(14)13.4	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	中々硬	灰白	1000 3/12	
239	4301	瓦器類	杯	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.0.9 (8) 4.8	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	中々硬	灰白	1000 4/12 底面 5/12	
240	4302	瓦器類	杯	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.1 (8) 3.6	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	中々硬	灰白	1000 4/12	
241	4304	瓦器類	杯	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.3 (8) 3.8	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	灰白→黄	1000 2/12 底面 3/12	
242	4004	瓦器類	杯	※8	SZ7 褐色砂	—	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	中々硬	灰白	底面付	底面にへり起
243	302	瓦器類	杯	試掘区3	SZ7	(14)13.3 (8) 3.7	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	硬質	黄褐色	1000 6/12	
244	3203	瓦器類	杯蓋	※8	SZ7 褐色砂	(14)13.4	丸口・口縁部→口縁部まで→ハナリコナナク 内:口縁部まで	黄	黄灰・黄	1000 6/12	底面にへり起
245	303	瓦器類	杯蓋	試掘区3	SZ7	(14)13.2 (8)13.2 (8) 3.7	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	硬質	黄	1000 3/12	
246	8004	瓦器類	杯蓋	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.0	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	黄	灰	自然欠	内蓋、底面、口縁にへり起
247	4002	瓦器類	杯蓋	※8	SZ7 褐色砂	(8)13.0	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	黄	灰白・灰	底面 3/12	底面にへり起
248	4402	瓦器類	鉢?	※9	SZ7 褐色砂	(14)12.0	丸口・口縁部 内:口縁部まで	中々硬	黄	1000 1/12	
249	4602	瓦器類	鉢	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.4	丸口・口縁部 内:口縁部まで	黄	灰白・灰	1000 2/12	
250	4603	瓦器類	鉢	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.1	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	灰白	1000 2/12	
251	4401	瓦器類	鉢	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.4	丸口・口縁部→口縁部まで→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	灰白・灰	1000 6/12	底面を笠する
252	3306	瓦器類	鉢	—	SZ7	(8) 9.2	丸口・口縁部 内:口縁部まで	黄	黄褐色	底面 3/12	底面少し厚みは普通でない
253	4805	瓦器類	皿	※9	SZ7 褐色砂	(8) 9.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰白・灰	底面 4/12	自然欠
254	4405	瓦器類	皿	※8	SZ7 褐色砂	(8) 9.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰白・灰	底面 5/12	自然欠
255	4302	瓦器類	皿	試掘区3 (SZ7 褐色砂)	(8)13.1	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰白・灰	底面 5/12		
256	4601	瓦器類	皿	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	黄	1000 1/12	
257	3201	瓦器類	碗	※9	SZ7 褐色砂	(8) 3.6	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	灰白	底面 6/12	自然欠
258	4301	瓦器類	短冊形碗	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.4	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	黄	黄	1000 4/12	
259	3901	瓦器類	皿	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	黄	1000 2/12 底面 3/12	
260	4402	瓦器類	平碗	※9	SZ7 褐色砂	(14)13.0 (8)13.0	丸口・口縁部→口縁部まで→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰白・灰	1000 5/12 底面 4/12	自然欠・底面大
261	3901	瓦器類	碗	※10	SZ7 褐色砂	(14)13.0.9 (8)13.6	丸口・口縁部→ハナリコナナク 内:口縁部まで	黄	灰	1000 2/12	
262	3701	瓦器類	碗	※8・※9・ ※11・※9	SZ7 褐色砂	(14)13.2 (8)13.7	丸口・口縁部→口縁部まで→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	灰白・黄褐色	1000 2/12	自然欠
263	3204	土師器	土師	※10	包含層	(14)13.2 (8) 2.5 (8) 2.6	丸口・口縁部 内:口縁部まで	黄	灰白→黄	5/10	底面
264	3307	土師器	土師	表層砂土	包含層	(14) 4.8 (8) 1.5	丸口・口縁部 内:口縁部まで	中々硬	灰白→黄	5/10	
265	3205	土師器	土師	※9	包含層	(14) 4.8 (8) 1.9	丸口・口縁部 内:口縁部まで	黄	黄	1000 2/12	底面 3/12
266	3204	土師器	杯C	※18	包含層 北	(14)13.4 (8)13.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	黄	1000 2/12	底面にへり起等?
267	5105	土師器	杯C	試掘区3	包含層	(14)13.6	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	灰白→黄	1000 2/12	
268	2902	土師器	杯A	※11	包含層 褐色	(14)13.9 (8) 3.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	黄	1000 7/12	底面自然からの人土?
269	3305	土師器	杯A	表層砂土	包含層	(14)13.9 (8) 1.8	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	黄	1000 1/12	
270	3701	土師器	杯A	※15・※14	包含層 褐色	(14)13.0.9 (8) 1.7	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	黄褐色	1000 1/12	
271	2905	土師器	杯A	※11	包含層	(14)13.9	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	黄	1000 1/12	内蓋自然
272	3601	土師器	杯A	※18	包含層	(14)13.6	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	黄褐色 内蓋	1000 2/12	内蓋、底面
273	3606	土師器	皿	※18	包含層 南	(14)13.2	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	黄褐色 内蓋・口縁部	1000 2/12	
274	3903	土師器	皿	※18	包含層	(14)13.0	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	灰白→黄	1000 3/12	内蓋・口縁部
275	3602	土師器	皿	※17	包含層	(14)13.0	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	黄	黄褐色	1000 3/12	
276	3601	土師器	皿	※8	包含層	(14)13.6	丸口・口縁部→口縁部まで 内:口縁部まで	中々硬	黄・灰白→黄	1000 2/12	

第10表 おばたけ遺跡(第5次)出土遺物観察表(8)

番号	発掘番号	種別	器種・名	グレイト	遺跡・層	重量(g)	形状・技法・特徴	期	色調	備付	特記事項
227	3002	土師器	甕	F9村近	包含層	(1)120.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	黄褐色	1000 4.12	
228	2301	土師器	甕	F13	包含層	(1)122.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	黄褐色・黒	1000 2.12	外蓋に施す
229	3003	土師器	甕	F12	包含層	(1)130.9	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	黄褐色	1000 2.12	
230	3401	土師器	甕		包含層	(1)128.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰色・黄褐色	1000 2.12	
231	3301	土師器	甕	412	包含層	(1)122.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰色	1000 3.12	
232	3804	灰土器	高脚蓋	n18	包含層	(1)191.4 (1)94.1 2.3 (1)1 4.1	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:灰白	1000 2.12 1000 1.12	外蓋に付随
233	3803	灰土器	杯蓋	n18	包含層	(1)123.9	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:灰白	1000 2.12	
234	3802	灰土器	杯蓋	410村近	包含層	(1)131.6	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:黄褐色	1000 2.12	
235	6006	灰土器	杯蓋?		包含層	(1)131.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:灰白	1000 2.12	
236	3302	灰土器	杯蓋	n19	包含層	(1)121.7 (1) 4.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰白	1000 3.12	
237	3301	灰土器	杯蓋	4 9	包含層	(1)131.7 (1) 2.6	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰	1000 3.12	
238	3303	灰土器	杯蓋	F11	包含層	(1)121.6 (1) 4.2	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白	1000 3.12	
239	2803	灰土器	杯身	410	包含層	(1)121.2 (1)12 8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰白	1000 2.12 1000 3.12	
240	3404	灰土器	杯身	F17	包含層	(1)121.9	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰白・灰	1000 3.12	
241	3304	灰土器	杯身	n18	包含層	(1)121.1 (1)22 1	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白	1000 2.12	外蓋に付随あり
242	3304	灰土器	杯身		包含層	(1)121.8 (1)12 8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白	1000 2.12 1000 3.12	
243	6202	灰土器	蓋	試掘区3	試掘区3	(1)11 9.9 (1)94.1 2.4 (1) 2.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰	10002.12	
244	6802	灰土器	杯蓋	東区10番地付 近 遺跡跡地	包含層	(1)131.8 (1)13 15	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:黄褐色	1000 2.12 1000 1.12	
245	3804	灰土器	杯蓋	F9村近	包含層	(1)123.8 (1) 3.6	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白	1000 1.12	内蓋にF9付号
246	3702	灰土器	杯蓋	F17	包含層	(1)122.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰白・灰	1000 3.12	
247	3704	灰土器	杯蓋	F 9	包含層	(1)120.6	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	黄褐色	1000 4.12	
248	3603	灰土器	蓋	F12	包含層	(1)123.4	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰色・黄褐色	1000 2.12	
249	3602	灰土器	杯蓋	F13	包含層	(1)120.9 (1)12 26 (1) 2.4	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白・灰	1000 6.12 1000 1.12	
250	3707	灰土器	杯蓋	F10	包含層	(1) 2.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰・灰白	1000 1.12	
251	6204	灰土器	杯蓋	試掘区3	試掘区3	(1)121.4 (1)94.1 2.4 (1) 4.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰	1000 1.12 1000 1.12	
252	6203	灰土器	杯蓋	試掘区3	試掘区3	(1)121.8 (1)94.1 2.4 (1) 4.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰	1000 3.12 1000 1.12	
253	3706	灰土器	杯	F10	包含層	(1)123.5	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	黄褐色・灰色・黄褐色	1000 2.12	
254	3607	灰土器	杯	n17	包含層	(1)120.9	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰色・黄褐色	1000 3.12	外蓋に付随あり
255	6302	灰土器	杯	試掘区3	試掘区3	(1)121.6 (1) 4.5	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白	1000 3.12	
256	3301	灰土器	杯身	-	包含層	(1)120.9 (1)10 4 (1) 3.2	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:灰白	1000 1.12 1000 3.12	
257	6803	灰土器	杯身	東区10番地付 近 遺跡跡地	包含層	(1)124.4	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:黄褐色	1000 3.12	
258	6804	灰土器	杯身	東区10番地付 近 遺跡跡地	包含層	(1)128.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白	1000 4.12	
259	3303	灰土器	杯身	n19村近	包含層	(1)121.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰・黄 内:灰白	1000 5.12	
260	3801	灰土器	杯身	3 2	包含層	(1)122.7 (1) 9.4 (1) 4.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄 内:灰白	1000 1.12 1000 3.12	
261	3706	灰土器	杯身	n 8	包含層	(1)120.1	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	黄褐色	1000 3.12	
262	3802	灰土器	杯身	n18	包含層	(1)120.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	黄褐色	1000 5.12	
263	6802	灰土器	杯身	東区10番地付 近 遺跡跡地	包含層	(1)11 9.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰	1000 4.12	
264	3702	灰土器	杯身	n 8	包含層	(1)121.2	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰白・黄褐色	1000 8.12	内蓋に付随あり
265	2303	灰土器	高脚	n15	包含層	(1)124.1	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰色・黄褐色	1000 2.12	外蓋に付随あり
266	6304	灰土器	高脚	試掘区3	試掘区3	(1)122.3	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	黄褐色	1000 4.12	外蓋に付随
267	3305	灰土器	高脚	F11	包含層	(1) 7.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰白	1000 3.12	
268	3302	灰土器	高脚	-	包含層	(1)120.2 (1) 7.2 (1) 3.2	丸ノコトコフ 内:コトコフ	中	灰	1000 1.12	
269	2704	灰土器	円形蓋	n17	包含層	(1)2517.8	丸ノコトコフ 内:コトコフ	新	灰・黄	10005 7.12	透かし彫り(14×14角)

第11表 おばたけ遺跡(第5次)出土土物観察表(9)

番号	実測番号	品名	器種・文様	アビット	遺跡・層位等	重量(g)	形状・技法の概要	胎土	色調	備付状況	特記事項
320	1006	灰泥器	鉢	α 9	包含層	(重)10.9	丸口、口縁部→外口まで 内口まで滑らか	中々硬	黄	破片 2/12	
321	1003	灰泥器	皿	α 9	包含層	(重) 6.6	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄白	破片1枚	
322	2006	灰泥器	短冊型	F10	包含層 褐色 砂	(口) 6.7 (重) 2.4 (厚) 2.5	丸口、口縁部→外口まで滑らか	中々硬	黄白	(重) 5/12 破片 6/12	
323	3008	灰泥器	短冊型	1447E	包含層	(口) 8.0	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄白→黄	(重) 5/12	外壁に自然亀裂あり
324	2703	灰泥器	皿	α 11	包含層 褐色	(重) 8.2	丸口、口縁部→外口まで滑らか	中々硬	黄白	破片 6/12	
325	4301	灰泥器	皿		表層	(口)10.4 (重) 5.6 (厚)20.6	丸口、口縁部→外口まで滑らか(縁部→外口まで滑らか) 、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄褐色→黄褐色 内口	(重) 5/12 破片 6/12	
326	1204	灰泥器	皿		表層砂土	(重)10.2	丸口、口縁部→外口まで滑らか	中々硬	丸口→黄 内口→黄褐色	破片 3/12	
327	1208	灰泥器	皿	α 17	包含層	(重)10.8	丸口、口縁部→外口まで滑らか	中々硬	黄白→黄	破片 2/12	
328	6201	灰泥器	皿		表層砂土	(口)20.8	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄→黄褐色	(重) 1/12	
329	2702	灰泥器	短冊型	β 14	包含層 黄土	(口)12.5	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄白→黄	(重)1枚	
330	1403	灰泥器	短冊型	α 10	包含層	(口)13.8	丸口、口縁部→外口まで滑らか 内口、口縁部まで滑らか	中々硬	黄	(重) 2/12	
331	1402	灰泥器	短冊型		表層砂土	(口)12.5	丸口、口縁部→外口まで滑らか	中々硬	丸口→黄褐色 内口	(重) 2/12	
332	1202	灰泥器	皿	F 8 村底	包含層 砂	(口)27.6	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄	(重) 1/12	内面にへり取りあり
333	1201	灰泥器	皿	F 8 村底	包含層 砂	(口)29.6	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄白	(重) 3/12	
134-4	8002	赤銅器 銅鏡(中形)		α 10	S 2 7 褐色 土層	(径) 3.7 (厚) 4.2	銅鏡片断、上下面に銅鍍層あり				表裏同一面残存
134-5	8002	赤銅器 銅鏡(小形)		α 10	S 2 7 褐色 土層	(径) 0.3	表面に銅鍍あり				
335	8001	赤銅器 刀子		β 15	S 11 11 11 黄	(長)11.5 (幅) 6.9 (厚) 0.2	銅鏡片断、表面に銅鍍層あり			破片	
336	7804	石製品 硝石		α 8	包含層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.1	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 9.0g、縦行面にヘリ取りあり
337	7805	石製品 硝石		α 18	S 2 20	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.2	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 9.0g
338	7803	石製品 硝石		α 11	包含層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.2	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 11.0g
339	7801	石製品 硝石		β 16	p 1 1 2	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.6	硝石製、縦行面から縦行 2 面あり			破片	長さ約 9.0g、縦行面にヘリ取りあり
340	7802	石製品 硝石		α 8	S 2 7 硝石 土層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.5	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 25.2g
341	7806	石製品 硝石		β 15	S 11 11 11 黄	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.6	硝石製			破片	長さ約 10.0g
342	7704	石製品 硝石		α 10	S 2 7 硝石 土層	(径) 9.0 (厚) 0.7 (重) 2.0	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 9.0g
343	7705	石製品 硝石		α 10	S 2 7	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.6	硝石製、縦行面から縦行 2 面あり			破片	長さ約 10.7g
344	7701	石製品 硝石		α 19	S 2 20 11 黄	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.7	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 6.5g
345	7702	石製品 硝石		F 9	S 2 7 硝石 土層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.6	硝石製			破片	長さ約 19.2g
346	7703	石製品 硝石		α 10	文庫 包含層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.5	硝石製			破片	長さ約 19.1g
347	7904	石製品 硝石		β 14	S 11 19 黄	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.8	硝石製、縦行面から縦行 1 面あり			破片	長さ約 19.0g
348	7903	石製品 硝石		β 17	包含層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.8	硝石製			破片	長さ約 11.2g
349	7902	石製品 硝石		S 2 7	包含層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.9	硝石製			破片	長さ約 9.0g
350	7901	石製品 硝石		α 10	S 2 7 硝石 土層	(径) 9.0 (厚) 0.5 (重) 1.9	硝石製			破片	長さ約 18.9g
351	3805	陶器 瓶		α 3	包含層	(口) 7.4	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄白	高さ 3/12	古銅製、破片
352	3802	3脚型 小皿		α 1	包含層	(口) 7.8	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	黄褐色	(重) 3/12	中形赤銅製、破片
353	3803	3脚型 皿		α 1	包含層	(口)12.1	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	丸口→黄 内口→黄褐色	(重) 2/12	中形赤銅製、破片
354	3804	陶器 短冊型		α 1	包含層	(口) 7.1	丸口、口縁部→外口まで滑らか	硬	丸口→黄 内口	(重)5枚	破片







## V 調査のまとめと検討

おばたけ遺跡第5次調査では、縄文時代後期から室町時代にかけての遺構・遺物を確認することができた。とくに、縄文時代・弥生時代・奈良時代の遺構・遺物が注目できる。

以下では、おばたけ遺跡第5次発掘調査の成果と課題を記し、まとめとしたい。

### 1 おばたけ遺跡の地形環境

おばたけ遺跡の標高は3m程度である。土地の基盤は海成砂で、海岸部に打ち寄せた砂が次第に堆積することで現在の地形を形成したと考えられる。

調査区北東部には結晶片岩を基調とする岩盤（通称「小山の越」）や丘陵尾根がある。調査区の基盤となる海成砂は、理論上はこれら岩盤の上に堆積しているものと考えられるが、調査区の土層観察では、岩盤近隣でも深くまで海成砂が観察でき、岩盤の上に海成砂の堆積している状況は確認できなかった。これは、海岸線がこれら岩盤付近にまで及んでいた時期に、かなり大きな海食作用が及んでいたためではないかと考えられる。

調査の状況を見ると、縄文時代後期の土器に摩擦の痕跡はほとんど認められない。したがって、当地への海成砂の堆積作用は、縄文時代後期にはほぼ終了していたものと考えられる。おばたけ遺跡から出土した遺物が示すとおり、遺物が出土する縄文時代後期を当地の地形が安定した時期と見ることができよう。（伊藤）

### 2 縄文時代のおばたけ遺跡

#### a おばたけ遺跡の縄文時代集落

今回の発掘調査では、縄文時代の遺構は明確にはできなかった。しかし、少ないながらも後期前葉に相当する時期の土器類が出土している。また、後に印石として用いられた石製品（339）は、石棒の先端部分を転用したものと考えられる。

おばたけ遺跡が存在する志志町大字大畑地内からは、

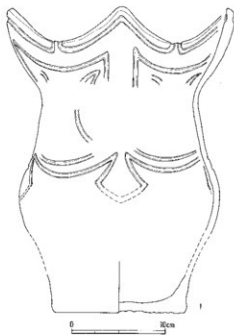
かつて縄文時代後期に相当すると考えられる土偶が出土している<sup>11)</sup>。この土偶の存在もあわせて考えれば、縄文時代後期のおばたけ遺跡には、小規模ながらも集落が形成されていたものと考えてよいであろう。今後は、当遺跡地内でも丘陵裾にあたる部分の状況を注意することで、当該期の明確な集落跡が確認される可能性は高いと考えられる。

#### b おばたけ遺跡出土の縄文土器

今回の発掘調査では、縄文時代後期前葉の中津I式新段階<sup>11)</sup>に相当する土器が出土している。なかでもとくに良好なのが、報告番号1の深鉢である。

この土器は口縁部から底部までの破片が残っているが、部分的に抜け落ちている場所がある。そこで、ここでは残された破片から、全体の形状を推測しておきたい。

まず、破片の数と全体の法量から、口縁部は4ヶ所の波頂部を持つ波状口縁を呈することが確認できる。口縁部はやや内彎しながらも、全体としては直線的に開くものである。頸部はやや締まり、体部は少し膨らむ形態であるため、全体の断面形がS字形を呈するものと考えられる。



第29図 縄文土器復元図(1:4)



体部の施文はための沈線で区画帯を形成する。体部と口縁部間の破片が少ないため、その間の文様構成は明確ではない。残された破片からは、口縁波頂部から垂直に下ろされる区画帯からJ字文様帯を形成するものと考えられる。体部最大頸部付近は、口縁波頂部と対応する位置にスベード形の文様帯を構成していると考えられる。

以上の状況を、確実に分かる範囲で示したのが第29図である。頸部に相当する部分には、第16図1f~1nのような模様が実際には存在するが、破片数が少ないため、整合性があって説得力のある復元ができなかった。それでも、体部上半にはJ字文、最下段にはスベード文という構成であることは認めてよいと思われる<sup>(7)</sup>。体部上半のJ字文は、破片を見る限り1波頂部間に左右両方の2方向に展開するものと考えられるが、それぞれが独立した文様帯なのかどうかは明確にならなかった。

さて、J字文は関西地方を中心とする中津式に多用される文様帯で、スベード文は関東地方を中心とする文様構成である。両者は併行する型式で、大きく言えば地域差が表出したものといえる。伊勢湾西岸部では主に中津式が分布することが既に指摘されている<sup>(8)</sup>が、おばたけ遺跡出土の当該資料は中津式と称名寺式の折衷的なものといえるのではないだろうか。

おばたけ遺跡の縄文時代の動向は、列島東西の状況を比較検討するうえでも、極めて重要な意味を持つものと考えられる。(伊藤)

### 3 弥生時代のおばたけ遺跡

弥生時代のおばたけ遺跡は、中期後半を中心としている。遺構には明確なものが無く、集落としての実態はよく分からなかった。

出土遺物は土器類のみであり、量は多くない。それでも、いくつかの興味深い状況が観察できる。

土器類は、近畿地方から伊勢湾西岸部に特徴的な櫛描文や凹線文を施すものが多くある。第IV章で「A系櫛描文」とした類がこの一群である。この意味では、当遺跡も伊勢湾西岸部地域の一角として評価できるような状況であるといえる。

この一方で、三河湾近隣地域で認められる櫛描文(B系櫛描文)を施したものが数点認められる。B系櫛描文を施す土器類は、伊勢湾東岸地域(愛知県東部)か、あるいは遠江地域(静岡県西部)で主体的に用いられるものと考えられる。おばたけ遺跡出土のB系櫛描文土器と類似する土器類は、瓜郷遺跡(愛知県豊橋市)の出土資料<sup>(9)</sup>が最も近いものとして考えることができる。

比較のため、瓜郷遺跡から志摩半島にかけての状況を見てみよう。知多半島の先端部付近にあたる田中島遺跡や、三河湾の入り口に浮かぶ篠島に位置する神明社員塚などでは、A系・B系双方の櫛描文土器が認められるが、量的にはB系櫛描文が優勢である<sup>(10)</sup>。それに対し、おばたけ遺跡の南方約8kmの志摩半島先端に位置する白浜遺跡<sup>(11)</sup>では少し様相が異なる。白浜遺跡では弥生時代中期後半頃の土器類が多く出土しており、A系櫛描文および凹線文系土器が良好に出土しているものの、B系櫛描文土器の量は少ない。

おばたけ遺跡出土のB系櫛描文土器は、白浜遺跡よりは若干目立つものの、様相としては知多半島よりも志摩半島の状況に近いものである。したがって、おばたけ遺跡の大枠での位置づけは、やはり伊勢湾西岸部地域の一角としてして見ることであり得るであろう。

以上の状況から、伊勢湾の島嶼部から志摩半島地域にかけての当該時期は、伊勢湾西岸部の様相を基調としつつ、伊勢湾東岸部にあたる三河地域や遠江地域の様相も幾分混じる地域として考えることができよう。つまり、伊勢湾東岸部から西岸部にかけて情報が発信された際に、まず到達するのがおばたけ遺跡付近であると考えられる。

ここで注目できるのは、伊勢湾西岸部には、三河地域との関係で把握できる遺物が点在している事実である(第30図)。今のところその傾向は、伊勢北部の菟上遺跡(四日市市)付近と、伊勢南部の櫛田川流域付近、およびおばたけ遺跡を含めた志摩地域に集中している。櫛田川流域付近の状況は金剛坂・古里遺跡(斎宮跡)で良好に確認でき、とくに中期中葉頃に三河系の土器が集中して見られる状況が確認されつつある<sup>(12)</sup>。伊勢北部と三河地域との連携におば



第30図 三河地域の影響を受けたと思われる伊勢志摩地域出土弥生土器(1:10)

たけ遺跡付近が関与していたかどうかまでは分からないが、少なくとも榑田川流域に件の状況が成立する背景として、おばたけ遺跡を通じた伊勢湾水運が存在する可能性は極めて高いであろう。

今後の課題としては、資料の増加を待ちつつ、土器類の厳密な併行関係や組成の状況を把握すること、そして、伊勢湾西岸部の様相と東岸部の様相がおばたけ遺跡付近でどの程度の混合を示すのかを把握する必要がある。

弥生時代のおばたけ遺跡は、大きな集落が形成されていたわけではないと思われる。しかし、その実態を解明することは、伊勢湾沿岸部の地域関係について、弥生時代という狭い枠に止まらない大きな意味を持つものと考えられる。(伊藤)

#### 4 古代前半期のおばたけ遺跡

##### a 発掘調査成果から見たおばたけ遺跡の性格

今回の発掘調査で最も充実していたのは、7世紀

中葉頃から8世紀前半頃にかけての、飛鳥・奈良時代のものである。遺構には竪穴住居・掘立柱建物などがあり、出土物も多彩である。ここでは、主に確認された遺構を中心として、当遺跡の性格を考えてみたい。

**竪穴住居群** 竪穴住居群は、調査区北部にある岩盤(小山の越)よりも南東部で確認されている。竪穴住居として報告したものは8基であるが、カマドとして報告したSF8・9や、落ち込みとしたSZ29・32も竪穴住居である可能性がある。また、大規模な落ち込みとして報告したSZ7についても、多くの竪穴住居が重複している状況を把握できずに一括してしまった可能性もある。これらのことを勘案すると、わずか数百㎡の調査区内に20基以上の竪穴住居が存在していた可能性があり、古代の当遺跡がいかに密度の濃い遺跡であるかが認識できよう。

竪穴住居は、基盤層が中細砂であるためか、遺存状況は極めて悪いものであった。これは、検出段階の条件が悪かったことと、調査担当者の遺構認定力

が乏しかったことも起因している。

いずれにしてもおぼたけ遺跡には、この時期の堅穴住居が数多く存在していると認識してよいと考えられる。

**掘立柱建物** 調査区内では、北部岩盤以外の場所でピット群が確認できた。このため、多くの掘立柱建物が建てられていたものと推測できる。ただし、一定の規則性を原則に建物としてまとめることができたものは数少ない。これは、調査段階での見落としも考えられるが、脆弱な地盤であるために、想像以上に歪な柱列となっている可能性も捨てきれない。

それを示唆するのが、調査区北端部で確認されたS B 33の状況である。S B 33は比較的良好に確認できた倉庫と考えられる建物であるが、東側柱列には歪みが見られる。良好な建物においてもこの状況であることから、これ以上に歪んだ建物が実際に存在していた可能性もある。

**倉庫S B 33の特徴** 建物群のうちとくに注目できるのは、倉庫と考えられるS B 33である。S B 33の最大の特徴は、平均1.2mという柱間の狭さである。また、地形的には丘陵裾部の斜面に建てられているのも特徴である。さらに、建物の南東には、当時は屹立していたと考えられる岩盤（小山の越）がある。

これらの要素は、当地の環境に大きく起因するものと考えられる。当遺跡の発掘調査は5・6月に行ったのであるが、南東方向からの海風がかなり激しいところであり、何らかの防風対策が必要となる。S B 33の柱間が1.2m程度であるのは、強い南東の風に耐えるための工夫ではないかと考えられる。山寄せに立地しているのは、防風とともに防水対策も兼ねているのであろう。さらに、当時は屹立していたと考えられる岩盤によって、S B 33に吹き当たる風はかなり弱められたのではないかとと思われる。

以上のように、S B 33には自然に対する各種の対策が盛り込まれていると考えられる。

**掘立柱建物群と遺跡の性格** 掘立柱建物および柱列は4棟確認されたに止まるが、いずれも真北から西偏約3°である。規格性があつたとまでは言えないが、建物主軸に関しては一定の共通理解が存在していたと考えてよいであろう。

先述のS B 33も同じ共通理解のもので建てられた

倉庫と考えられることは注目できる。つまり、各種の自然災害対策を考慮したと考えられるS B 33は、何らかの重要な物資をここに蓄えておく必要があつて建てられたと推測できるからである。S B 33周辺からは須恵器大甕片が多く出土していることも、それと関係しよう。

これと直接関係するかどうかは明確ではないが、堅穴住居S H 21から大量の貝殻とともに鉄製刀子が出土していることに注目したい。この刀子(335)は刃部側の関が不明瞭になるほど使い込まれている。大量に出土した貝殻は、カキ・サザエ・アワビなどを中心としている。徳測であるが、この刀子を使って貝殻をこじ開け、貝の干物を生産していたのではないかと考える。S B 33は、その干物を備蓄する倉庫であった可能性もあろう。

第二章で触れたように、当遺跡は平城京木簡に見える「志摩国答志郡和具郷」そのものに相当する遺跡と考えられる。多分に推測が混じるとはいえ、この地で当時の倉庫や海産物生産の痕跡を知ることができたのは、非常に大きな意味があるといえよう。これらや、後述する円面硯の存在を勘案し、古代前半期のおぼたけ遺跡は答志郡菟志摩国府に直接関係した海産物生産センターであつたと推測しておきたい。(伊藤)

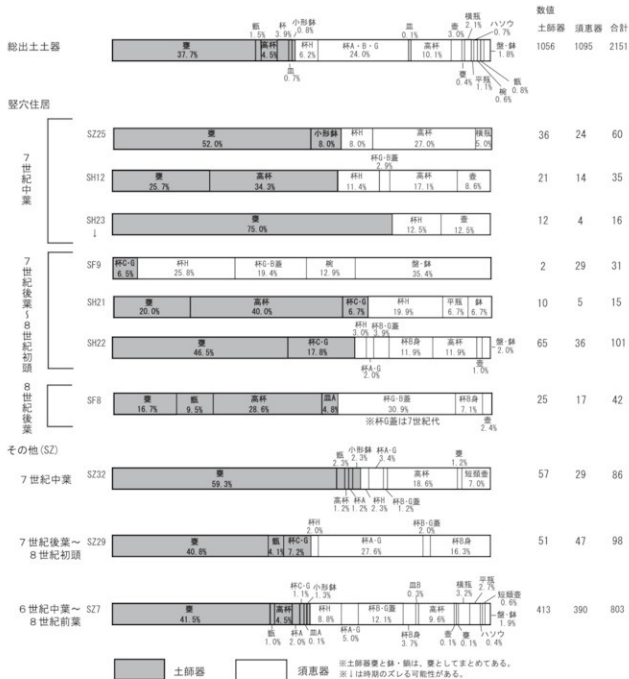
## b 7・8世紀の土器組成とその特色

今回の調査から出土した7・8世紀の土器組成は、第12表にまとめた。第31図は、この表を基に作成したものである。ただし、出土量が極めて少ないものや、多時期にわたる土器を多く含むものについては、信頼性に欠けるため除いてある。

総出土土器は、土師器と須恵器がほぼ同じ比率であり、その中でも土師器甕が約38%と最も多く、次に須恵器杯が多い。

しかしながら、個々の遺構に目を移すと、一見して明らかなのは、各時期を通じて、土師器の出土量が須恵器を大きく凌いでいることである。なかでも、土師器甕・甗などの煮沸具の占める比率が高い。ただし、S F 9など例外的なものもある。

**7世紀中葉頃の土器組成** 土師器が全体の60~70%近くあり、その土器組成は、ほぼ煮沸具で占められている。杯類はほとんど確認できず、S Z 32で極めて



第31圖 おばたけ遺跡出土の7・8世紀の土器組成

少量認められるにすぎない。

須恵器は、杯Hがこの時期の多くの遺構で確認できるが、杯Gなどの新器種はまだ少ない。また、SH25・12、SZ32などでは高杯の占める比率が高い。

なお、竪穴住居とその他の遺構では土器組成に大きな違いは認められない。

7世紀後葉～8世紀初頭の土器組成 前時期に引き続き、土師器の占める比率が高い傾向にある。SH

22・SZ29では、煮沸具がその大部分を占めている。また、前時期までほとんど確認できなかった土師器杯類が、量は少ないものの、この時期から多くの遺構で認められる。土師器杯には杯G・杯Cがあり、その他のものはほとんど認められない。

須恵器は、この時期に至っても杯Hが認められるが、次第にその量は減っている。これに替わるように、杯A・杯G・杯Bが増え、須恵器のなかでもそ

の占める比率が高くなる。なお、貝層が検出されたS Z 29は杯類で占められている。

以上、7世紀中葉～8世紀初頭頃にかけての土器組成をみてきた。いずれの時期も土師器の占める比率が高く、その大部分は煮沸具である。7世紀後葉頃に入ると、量は少ないものの、土師器では杯G・Cがみられるようになる。須恵器では杯Bなどの新器種が増え、その組成のなかでも占める比率が高い。このような7世紀後葉～8世紀初頭頃にかけての土器組成は、8世紀後葉頃のSF8でも概ね同じ傾向が確認できる。

**土師器の特色** 土師器甕には、長い体部をもつもの(長胴甕)、丸みのある体部にその最大径を若干上回る口縁部がつくもの、丸みのある体部に把手がつき、口縁部は大きく(30cm程)、全体として鉢もしくは鍋の形態に近いものと、大きく3つに分類することができる。また、甕の体部は、外面に縦方向を基調とするハケメ、内面の下半にヘラ削り、上半に横方向のハケメが施されるものが多い。口縁はゆるやかに外反し、口縁端部は上方に積み上げられているものが大部分を占めている。

このような甕の形態・調整などの特色は、伊勢南

部のかつて「有爾郷」と呼ばれた地域を中心に展開している大規模な土師器生産地の製品と極めて類似している。この生産地のなかでも最も規模の大きい北野遺跡<sup>19)</sup>の製品と比較しても、形態・調整・胎土などに矛盾を感じない。このことから、おばたけ遺跡出土土師器甕の大半は有爾郷付近の製品である可能性が高い。これは、8世紀後葉頃の土師器杯にも同じような傾向が確認できる。

この他では、伊勢中部の一志地域から出土する土師器杯などと胎土が似るものや、いわゆる「近江型」と呼ばれ、三重県では伊勢北部(現在の北勢地域)を中心に出土している土師器甕に口縁部形態が似るもの(第24図188)がある。

**須恵器の特色** 出土須恵器には、大きく二つの地域の特徴をもつ製品が認められる。ひとつは、東海地方の特色をもつ製品である。東海地方といっても、そのなかには数多くの大規模な窯跡群があるが、愛知県猿投山西南麓窯跡群の系統を引くと考えられる製品が大部分を占めている。もうひとつは、近畿地方において、一般的に見られる製品であり、大阪府南部窯跡群の系統にあると考えられるものである。

前者と後者では、圧倒的に前者が多く、後者は極

第13表 おばたけ遺跡における7世紀代の須恵器口縁回転

時期	遺構	器種	左・左	左・不	左・無	左・右	右・右	右・不	右・無	右・左	不・不	不・無	不・右	資料数	備考	
7世紀中葉	SH25	杯H						1						1		
		その他		1									1	3	5 高杯・壺・横瓶・提瓶	
	SZ32	杯H				1								2		
		その他		2			1							1	4 高杯・短頸壺	
	SH12	杯H						1						1		
		その他		1			1	1						1	4 高杯	
SH23	杯H												1	1		
	SZ13	高杯		1										1	高杯	
7世紀後半 ～ 8世紀初頭	SF9	杯H												1	1	
		杯G												1	1	
		その他		1				1							2 碗・壺蓋	
	SH21	杯H						1						1	1	
		その他												1	2 平瓶・鉢	
	SH22	杯A・G・B		1		1					1	1		1	4	
		その他		1											1	盤
	SH19	杯A・G						1							1	
		杯H										1			1	
	SZ29	杯A・B		1					2					2	5	
杯H														1		
SB33	杯H			1										1		
	杯H		5	2			1					2		11		
6世紀中葉 ～ 8世紀前半	SZ7	杯G・B蓋		3	1		1	2	2		1	1	2		14	
		杯A・G身		3	1					3					8	
		杯B身						1	2						4	
		杯H											1		4	
		その他		4				2	5			2	1		14	高杯・壺・碗・鉢・提瓶・鍋・横瓶・平瓶

凡例

※項目は「水抜き・ケズリ」の口縁の回転方向を示す。

「不」は不明、「無」はケズリ無しを表わす。

※：は時期のズレる可能性がある。

※資料は報告書に掲載したものをを用いている。

めて少ない。

第13表には、出土須恵器のロクロ回転方向をまとめた。須恵器のロクロ回転は、大阪府南部窯跡群では5世紀～7世紀にかけて大筋では左回転主体から右回転へと移行する。そして、6世紀後半頃から右回転が多くなり、この方向に固定されていく。しかし、おぼたけ遺跡の須恵器を見ると、7世紀代に至っても従来からの左回転が多く残っている。このような傾向は、現在のところ、7世紀代の猿投山西南麓窯跡群をはじめとする東海地域の特色である<sup>(10)</sup>。ちなみに、三重県の徳居窯跡群<sup>(11)</sup>・外城田窯跡群<sup>(12)</sup>の製品は、7世紀に入ると、ほぼ右回転に固定されており、形態も含め大阪府南部窯跡群の様相に近い。このように、おぼたけ遺跡出土須恵器は製作技術からも東海地方に似る様相が認められるのである。

さて、猿投山西南麓窯跡群の系統を引くと考えられる製品のなかには、形態・調整・胎土ともに同窯跡群をはじめとする尾張地域の製品と推測されるものが多く存在する。

たとえば、212・213の杯H蓋は、口径が約11cmと極めて小形であるものの、比較的しっかりした稜をもち、天井部にはヘラ削りが施されている。218・219の杯H身も小形であるものの、比較的高い立ち上がりをもつ。このような製品は猿投山西南麓窯跡群の東山15号窯跡や岩崎101号窯跡の製品に極めて似ている。また、杯B蓋230の傘形を呈する形態やその内面の「※」字状のヘラ記号などの特色は岩崎17号窯跡の製品に類似する<sup>(13)</sup>。このほかにも尾張地域の製品と推測されるものが多数存在している。

しかし、猿投山西南麓窯跡群の系統を引くと考えられるものの、現在確認されている同窯跡群の製品と比べ、形態や胎土に違和感をもつものも多く含まれている。

また、鉢(116)、杯蓋(169・223・226・234・297)、鍋(258)、壺蓋(293)などは、東海地域の製品と考えられるが、胎土が極めて緻密であり、色調も淡灰白色を呈し、尾張地域の製品とは異なる生産地のものと考えられる。現在のところ、こういった製品は、岐阜県各務原市美濃須衛窯跡群<sup>(14)</sup>の製品に極めて近い要素をもち、同窯跡群の製品の可能性がある<sup>(15)</sup>。ただし、223・258とよく似た形態のものが静岡県湖西

窯跡群に関連すると考えられる湖西市吉美中村遺跡出土須恵器<sup>(16)</sup>でも認められるため、今後これらの須恵器窯と比較検討する必要がある。

いっぽう、大阪府南部窯跡群の系統にあると考えられる製品も極少量であるが認められる。杯H(215・221・287・288)、無台杯(138・242)などがある。これらの製品は大阪府南部窯跡群の製品の形態に似るが、おそらく答志島の周辺地域で作られたと推測される。しかし、志摩地域では、現在のところ須恵器窯跡は確認されておらず、また近隣にある外城田窯跡群の製品と比較しても形態・調整・胎土などに多くの相違が認められる。

ただ、288の杯Hは、形態・胎土ともに湖西窯跡群の西笠子64号窯跡の製品に似ている<sup>(17)</sup>。湖西窯跡群は、独自の特色をもつ窯跡群であるが、西笠子64号窯跡は大阪府南部窯跡群に近い製品を作っている。現在のところ、志摩地域で湖西窯跡群の製品は確認されていないが、阿見町上村古墳出土須恵器には湖西窯跡群の製品と考えられるものが含まれているという<sup>(18)</sup>。

志摩地域は、湖西窯跡群に比較的に近いため、今後、同窯跡群の製品が確認される可能性が極めて高いと考えられる。

また、従来から志摩地域は、猿投山西南麓窯跡群の系統を引く製品が多く出土することで知られているが、現在公表されている志摩地域の資料を瞥見すると、6・7世紀代では大阪府南部窯跡群の系統にある製品も多く出土している。尾張地域の特色をもつ製品の分布も地域によって濃淡があるようである。答志島をはじめとする現在の島羽市あたりでは比較的尾張地域の製品が多くみられるのに対し、周辺では、その比率が少なくなる傾向にある。また、答志島の南部に位置する菅島から出土している須恵器は、猿投山西南麓窯跡群と大阪府南部窯跡群の系統にある製品が混在するが、6世紀中葉以降の製品には猿投山西南麓窯跡群の系統が認められず、答志島とは異なる様相が指摘されている<sup>(19)</sup>。

### c 出土円面硯に関する問題

今回の調査で、円面硯が1個体出土した。この硯は、包含層出土遺物として扱っているが、本来はSH22に伴っていた可能性が高い。SH22からは7世紀後

葉～8世紀初頭頃にかけての多くの須恵器が出土しており、円面硯もこの時期のものと考えられる。また、一部レンガ状に焼けた様子などをみると尾張地域の製品と推測される。

円面硯の脚部は欠損しているが、脚基部に14箇所の透かしが認められる。硯の残存率から推測すると28箇所の透かしがあったと考えられる。径は約17cmと大形品ではないが、多くの透かしが認められ古い要素をもつことが窺える。

また、この硯の硯面をみると、硯面外縁におよぶ広範な磨耗痕が認められる。しかし、陶硯の使用実態は、硯面の磨耗度と使用頻度が必ずしも一致しないことが指摘されている。北野博司氏による墨磨り実験<sup>230)</sup>では、使用頻度と墨の付着率に一定の相関が認められるとされる。

おばたけ遺跡出土の硯には、磨耗度に対し、墨の付着が認められない。また、硯面をさらに細かくみると、砥石などで磨いた際に残る線状痕が観察できる。これらのことから、おばたけ遺跡出土の円面硯は硯面が研磨された状態であったにも関わらず、墨磨り使用の頻度は低かった可能性が高い。

このほか、おばたけ遺跡には、須恵器杯蓋の内面が研磨されたものがあり、硯との関連が注目される。杯B蓋(299・301)、杯B身(244)がそうであり、内面のロクロ目が研磨されている。しかし、円面硯と同様に磨耗度に対し墨の付着は認められない。

古代において、硯としてよく使われたものは、須恵器杯蓋を転用したものが多く。しかし、今回の調査区からは墨の付着した転用硯および墨書土器などは確認できなかった。

おばたけ遺跡は、平城京跡出土木簡の「志摩国答志郡和具郷」との関わりで知られる遺跡であり、さらに和具郷の木簡の中には、この郷で作成・記載されたと考えられるものがあるため<sup>231)</sup>、その文書作業との関わりが注目された。円面硯が出土したことで、それとの関わりは推測されるが、硯の観察からは、その使用頻度が低かったことが窺える。また、墨の付着した転用硯は確認できなかった。

これらのことが、おばたけ遺跡全体の評価に直接つながるものとは考え難いが、今後の調査において文書作業の事態も含めて同遺跡を考えていく必要が

あろう。なお、最近では、円面硯などの定型硯は、儀礼空間を飾る象徴的な道具として使用されていた可能性もあることが指摘されている<sup>232)</sup>。

#### d 古代志摩国と海運

おばたけ遺跡では、基本的に土器はすべて搬入品によって構成されていると考えられる。土師器は伊勢の南部、須恵器は尾張地域が主な搬入元と推測される。答志島は、鳥嶼部であるため、これらの搬入・搬出には海運によることが大前提となろう。

猿投山西南麓窯跡群の系統にある須恵器は、伊勢湾西岸地域では、伊勢北部(桑名・四日市市周辺)と志摩地域に分布が集中している。伊勢北部は尾張地域と接しているためか四日市市和田ヶ平1号墳<sup>233)</sup>・青木古墳群<sup>234)</sup>出土例のように尾張地域の製品と類似するものが多く認められる傾向にある。これに対して、伊勢中部・南部での確認例は、伊勢北部・志摩地域と比べ極めて少ない。ただし、伊勢南部でも、志摩国との国境付近にある伊勢市南山古墳群<sup>235)</sup>・登河古墳群<sup>236)</sup>には尾張地域の製品と推測されるものが多く認められる。これらのことから主に伊勢湾西岸地域の陸路を伝って、尾張地域の製品が答志島に至ったと考えることは難しい。

答志島は、知多半島・渥美半島、そしてその間にある日間賀島などの三河湾三島に近接している。渥美半島の古墳では、湖西窯跡群の製品と推測されるものが多く傾向にあるが、知多半島や日間賀島では尾張地域の製品が目立っている。

答志島の蟹穴古墳出土須恵器大形長頸壺のように特注品と考えられ、生産地から直接もたらされたと推測される製品もあるが、概ね、おばたけ遺跡の須恵器は三河湾周辺地域とのつながりによってもたらされたと考えるのが妥当であると思われる。また、尾張・三河・答志島は、鳥籠蓋などの特殊な須恵器の分布圏にあり、先の須恵器の流通を考える上で注目できる。

このように、志摩地域における猿投山西南麓窯跡群の系統をもつ製品は、尾張地域に接する伊勢北部とは異なるルートで運ばれていることが窺えるのである。

土師器の主な生産地は、伊勢南部と考えられる。伊勢南部からの搬入ルートは大きく二つのルートが

想定される。ひとつは、伊勢南部から陸路で志摩国に入りそれから海路で答志島に至るルートと、もうひとつは、伊勢南部から海路で答志島に至るルートである。伊勢南部と答志島は極めて近いので、当然両者のルートが想定される。ただ、海上での活動が盛んである志摩地域の特色からは後者が主流であったと想像される。また、伊勢南部の宮川河口には、やや時期は古い、土師器の集積地と考えられる高ノ御前遺跡<sup>(27)</sup>があり、海上輸送との関わりが示唆される。

#### e 出土遺物からみた志摩国

おぼたけ遺跡は平城京跡出土木簡の「志摩国答志郡和具郷」との関わりで知られる遺跡である。

しかし、今回の調査区からは、平城京跡出土木簡に関わる時期より古い7世紀中葉から8世紀初頭にかけての遺構が数多く検出された。

志摩国は、持統朝の頃までには分離立国していたと考えられ、また、藤原京跡出土木簡から窺えるように、すでに7世紀末頃には、朝廷に調を貢納する制度に組み込まれていたことが判る。

今回の調査区では、この時期（7世紀後葉～8世紀初頭頃）に該当する遺構は、SH21・22、SF9、SB33、SZ29などがあり、なかでもSH21・SZ29は海産物を加工した遺構と考えられる。また、SH22からは片面硯が出土しており、識字層の存在が窺える。このことから、おぼたけ遺跡においても、すでに7世紀後葉から8世紀初頭にかけての時期に海産物の貢納がおこなわれていたと推断される。

また、調査区からは、8世紀前半頃の遺物が確認されているため、調査区付近に平城京跡出土木簡にある「志摩国答志郡和具郷」に関わる集落が存在するものと考えられる。

志摩地域は従来から愛知県猿投山西南麓窟跡群の系統にある須恵器が多く出土することで知られており、おぼたけ遺跡出土須恵器も同窟跡群の系統にある製品が多く確認できた。このほか、岐阜県各務原市美濃須衛窟跡群・静岡県湖西窟跡群の製品と推測されるものもあるが、その数は少ない。また、おぼたけ遺跡の背後の丘陵地にある蟹穴古墳(7世紀後半頃)の横穴式石室は、三河地方の影響が強く見られることが指摘されている<sup>(28)</sup>。これらのことから、答

志島をはじめとする志摩地域は伊勢湾沿岸地域と広くつながっていたことが窺え、現在のところ、特に尾張・三河との強いつながりが認められる。

ただし、志摩地域の地域性を考える上で注意しなければならないのは、尾張・三河とのつながりを強調するあまり、伊勢との関係を見逃しがちになることである。

前記したように、おぼたけ遺跡では、有爾郡近隣産と考えられる土師器が須恵器より多く用いられているため、伊勢との強い関わりを知ることができる。また、鳥羽市白浜遺跡もこれと同じような傾向にある。

このような伊勢・尾張・三河との関係は、律令国家成立前段階の志摩地域の出土遺物からも確認できる。たとえば、須恵器は5世紀代から猿投山西南麓窟跡群の系統にあるものが鳥羽市狐塚古墳などで認められるし、製塩土器は知多半島の製品に類似するものが鳥羽市白浜遺跡・豊遺跡などで出土している。また、横穴式石室の研究からも畿内地方をはじめ伊勢・三河とのつながりが指摘されている<sup>(29)</sup>。

志摩国は、農業生産の低い国であり、班田取授法による口分田を伊勢・尾張に依存している状態であった。こうした志摩国は、朝廷に海産物を貢納している点で畿内地方とのつながりがみえるが、そのいっぽうで律令国家成立前段階から続く交易、特に尾張・三河・伊勢の三地域との強いつながりによって成り立っていることが窺えるのである。

しかし、なぜ志摩地域はこのように多岐にわたる地域の特色から成り立っているのかは問題である。漁撈などの海上での生活を軸とした他地域との交流や、海を介した古代交通との関わりが大前提にあると考えられるが、このほかにも三河地域の醤油にみられる海部などの集団との関係なども考慮に入れて考えていく必要があろう。（浅生）

## 5 調査の総括と展望

以上、発掘調査で確認できた時期の中から、おぼたけ遺跡の特徴と思われる項目について検討してきた。小規模な調査であったにもかかわらず、その成果は豊富であったといえる。



おぼたけ遺跡は、答志島最大の遺跡であるばかりでなく、旧志摩国内でも屈指の規模と内容を誇る遺跡である。これまでも古墳時代前期の状況については注目されていたが、今回の発掘調査によって、縄文時代後期・弥生時代・古代といった時期にも重要な内容を有した遺跡であることが判明した。とくに古代の状況は、おぼたけ遺跡が志摩国府、あるいは答志郡衙と密接に関係していたことを強く示唆している。

さて、旧志摩国内には海岸寄りの平野部が少ない。そのため、人々の居住地は古来より継続して同じ場所に営まれているものと考えられる。おぼたけ遺跡についても、海岸寄りの部分は畑地であるものの、その主要部分は和具集落の下になっていると考えられる。このため、実際に開発が無いままで守られる遺跡は数少なく、ある意味では都市部以上に遺跡の破壊は進んでいるものと考えられる。

しかし、実際に発掘を行ってみると、今回のような狭い調査区でも重要な成果が得られるのである。今回の発掘調査で出土した資料は、鳥羽市教育委員会の御努力によって、早速市民向けの展示が企画され、多くの人々に成果を感じ取って頂くことができた。発掘調査成果を見て頂くことで、地域に住む人々が遺跡の重要性を認識し、適切な保護が図られる礎となるのであれば、それは今回の調査が得た最大の成果と言えることができよう。

おぼたけ遺跡の持つ学術的価値の高さは、専門家の間では周知のことである。それが市民レベルにまで浸透することで、よりよい遺跡の保護・活用へと進んでいく。今回の調査成果を基に、そういった方面への提言も発信していきたいと考える。(伊藤)

#### < 註 >

- (1) おぼたけ遺跡出土土偶については、森川幸雄「三重県の土偶」『研究紀要』第14号 三重県埋蔵文化財センター 2005年)を参照されたい。
- (2) 土器の文様構成様式にあたっては、奥義次氏、田村陽一、小濱学氏のご協力を得た。
- (3) 田村陽一「飯沼市岩内町蔵ノ下遺跡」『近畿自動車通(久居-勢和)埋蔵文化財発掘調査報告書』第2分冊1 三重県埋蔵文化財センター 1990年)
- (4) 豊橋市教育委員会『瓜原』(1963年)
- (5) 知多古文化研究会編『南加多町の考古資料』(1997年)
- (6) 本通遺跡群調査委員会『白面遺跡発掘調査報告書』(1990年)
- (7) 柴山圭子「弥生時代の斎宮」『斎宮歴史博物館研究紀要』14 2005年)

- (8) 第30図の作成にあたり、以下の文献を引用した。
  - ・三重県埋蔵文化財センター『菟土遺跡発掘調査報告書』(2005年)
  - ・三重県教育委員会『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』(1984年)
  - ・大西素行ほか『度会郡二見町出土の弥生土器』『三重考古』第3号 三重考古学研究会 1980年)
  - ・斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡平成15年度発掘調査概報』(2005年)
  - ・志摩市御座小学校所蔵土器については、田村陽一氏のご教示により掲載した。
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告書』(1995年)。上村安生・竹田憲治ほか『研究紀要』第7号(三重県埋蔵文化財センター、1998年)
- (10) 北野博司・畑中英二・浅生卓司・亀田和樹・菅原謙一「須志器の成形におけるロクロ回転」(『日本考古学協会第68号総会研究発表要旨』、2002年)
- (11) 浅生卓司「徳富堂群の須志器生産」『Michistory』Vol.14、三重歴史文化研究会、2003年)
- (12) 浅生卓司「伊勢南部の須志器生産-外城田宮群の検討-」『Michistory』Vol.16、三重歴史文化研究会、2005年)
- (13) 城ヶ谷和広「徳富堂群17号遺出土須志器の検討」『愛知史学研究』第7号、2003年)
- (14) 各務原市教育委員会『美濃須賀古窯跡群資料調査報告書』(1984年)、各務原市埋蔵文化財センター『須賀天狗谷古墳群・天狗谷窯跡群発掘調査報告書』(1998年)
- (15) おぼたけ遺跡の近隣において、美濃須賀窯跡群の製品は、8世紀前半頃から斎宮跡で出土している。また、鳥羽市費遺跡からも美濃須賀窯製品が出土しているという。鳥羽市『鳥羽市史』(1992年)
- (16) 関西市教育委員会『吉美中村遺跡』(1990年)
- (17) 西室子64号窯跡の製品は、静岡県湖西市の後藤肇一氏のご好意により実見させていただいた。関西市教育委員会『西室子64号窯跡発掘調査報告書』(1987年)
- (18) 中村浩「三重県志摩郡阿見町志島所在遺跡出土須志器について」(『MUSEUM』No.486、東京国立博物館、1991年)
- (19) 関西大学文学部考古学研究室『紀伊半島の文化史的研究-考古学編』(関西大学文学部考古学研究室、1992年)
- (20) 北野博司「陶器の使用実態を考える-多賀城地方跡出土陶器を中心に-」(『第2回東北文字資料研究会資料』、2004年)、北野博司「文房具」(『文字と古代日本2-文字による交流-』、吉川弘文館、2005年)
- (21) 樋口知志「高礼木から見た未開土書行政の実態」『古代の陶器をめぐる諸問題』(奈良文化財研究所、2003年)
- (22) 前掲註(20) 北野氏文献。
- (23) 四日市市教育委員会『四日市市の後期古墳』(1973年)
- (24) 四日市市教育委員会『青木川古墳群』(1992年)
- (25) 伊勢市教育委員会『南山古墳発掘調査報告書』(1982年)
- (26) 伊勢市教育委員会『辰河古墳群』(1993年)
- (27) 三重県埋蔵文化財センター『高ノ御前遺跡発掘調査報告書』(1997年)、同『高ノ御前遺跡(第2次)発掘調査報告書』(2004年)
- (28) 竹内英明「蟹ヶ谷古墳の位置づけ」『蟹ヶ谷古墳発掘調査報告書』、三重県、1999年)
- (29) 土生田純之「古代志摩の領域に関する試論」(『日本横穴式石室の系譜』、学生社、1991年)、米田文孝「志摩地域の横穴式石室」、『紀伊半島の文化史的研究-考古学編』(関西大学文学部考古学研究室、1992年)

写 真 图 版



図版 1

調査区全景  
(1)



調査風景(北東から)



調査区西部全景(北東から)



調査区中央部全景(南から)



調査区東部全景(東南から)

図版 3

個別遺構  
(1)



SB33(北東から)



東部ピット群(東南から)



SF 8 石組カマド(西から)



SF 9 石組カマド(東南から)

図版 5

個別  
遺構  
(3)



S H19・S H21(東南から)



S H23・S H25 遺物出土状況 カマド(南から)



S Z 29西面土層(北西から)

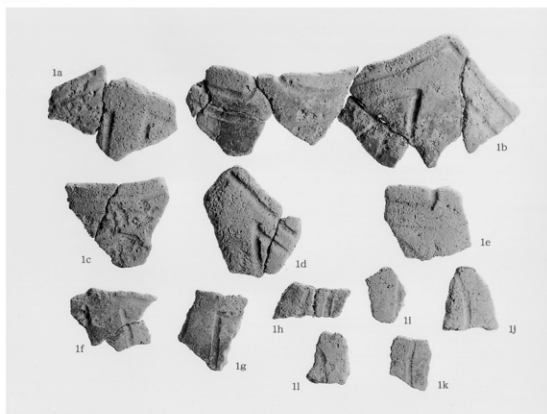


調査区東部北面土層(東南から)

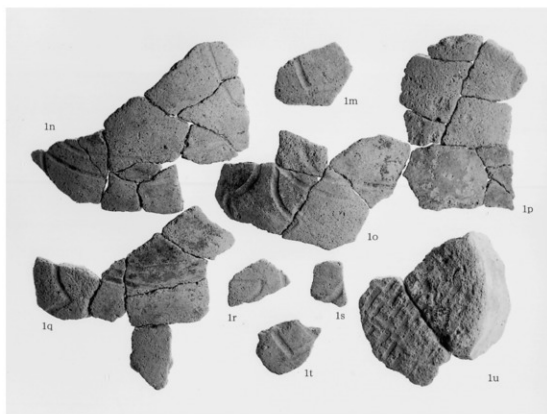


図版 7

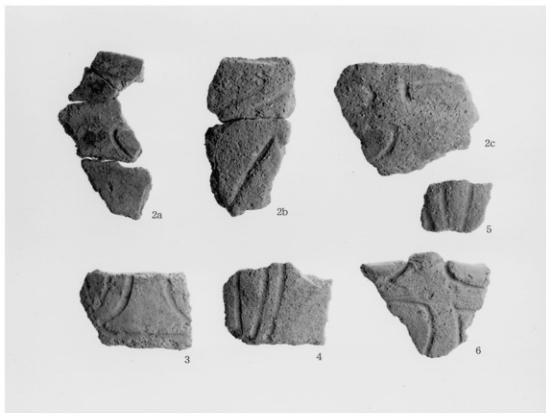
出土遺物 (1) 縄文土器



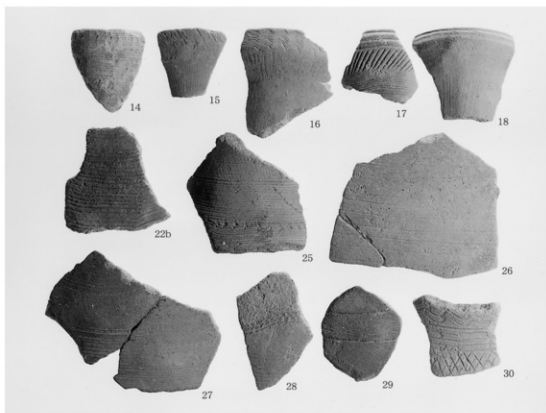
縄文土器



縄文土器



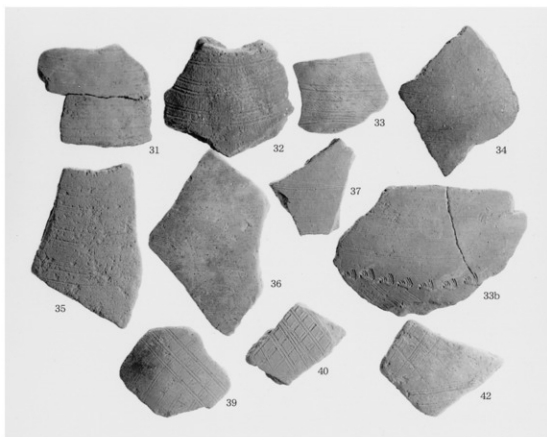
縄文土器



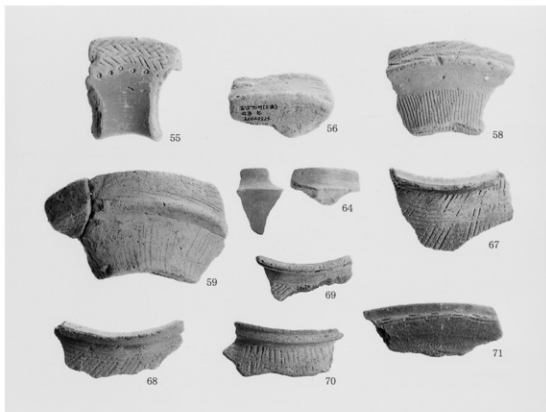
弥生土器

图版 9

出土遗物 (3)  
弥生土器



弥生土器



古墳前期の土師器



古墳後期の須恵器・SB33出土須恵器

図版11

出土遺物(5)  
古墳時代・飛鳥・奈良時代



54



58



72



74



78



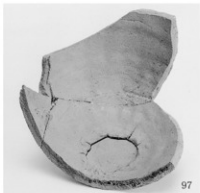
79



87



88



97



101



102



103



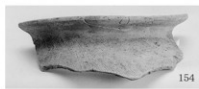
114



114

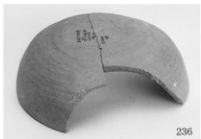
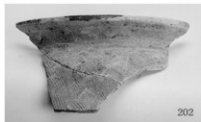
内面の状況

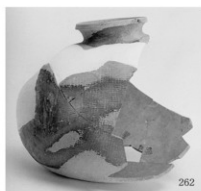
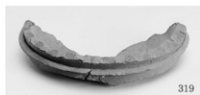
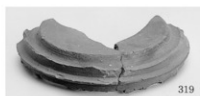
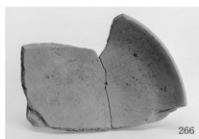
内面の状況(風船技法)



図版13

出土遺物(7) 飛鳥・奈良時代



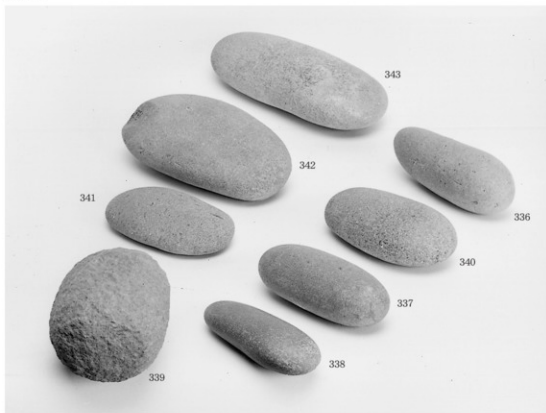


壺外面の状況(黄土ハケ塗)

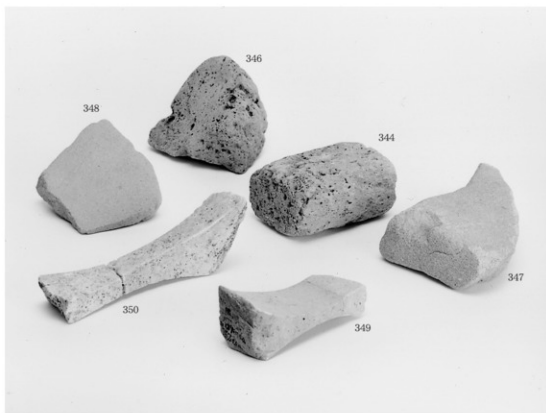


図版15

出土遺物(9)  
石製品



石製品



石製品



S H21・S Z29出土貝殼

# 報告書抄録

ふりがな	おばたけいせき(だい5じ)はつかつちようさほうこく							
書名	おばたけ遺跡(第5次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	266							
編著者名	伊藤裕偉 浅生卓司							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Ⅷ 0596(52)7031							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m <sup>2</sup>	
おばたけ遺跡 (大畑遺跡)	鳥羽市 答志町 字大畑・蟹穴	24211	30	34° 31' 28"	136° 53' 55"	20040512～ 20040630	810	平成16年度答志漁港関連道整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おばたけ遺跡	集落跡	縄文後期 弥生中期 古墳前期 古墳後期 飛鳥奈良 中世	溝 溝・落ち込み 掘立柱建物・堅穴住居	中津式土器・石棒 弥生土器 土師器(北陸系含む) 土師器・須恵器 土師器・須恵器 円面硯 土師器・陶器		瓜郷式ほか  貝類の調整所? 答志郡衙か志摩国府関連か。		
要約	<p>おばたけ遺跡は、縄文時代後期～中世にかけての複合遺跡で、発掘調査でもこの時期幅の遺構・遺物が確認された。縄文時代後期では、中津式に相当する土器類が良好に確認された。弥生時代中期後半では、近畿～伊勢湾西岸部に見られる櫛描文・凹線文系土器とともに、伊勢湾東岸部～遠江地域にかけての土器類が出土し、両地域の接点となる地域色が見られた。古墳時代前期の遺物量は少ないが、北陸系の器台が見られた。飛鳥～奈良時代は、今回の発掘調査で中心となる時期。倉と考えられる総柱掘立柱建物のほか、側柱建物や堅穴住居群が確認された。出土遺物は多量で、尾張猿投産を中心とした須恵器類(円面硯を含む)、伊勢有尔郷近隣の土師器類を中心とする。堅穴住居の理土には貝類が投棄されていた。これらの状況から、飛鳥～奈良時代の当遺跡は平城京木簡に見える「志摩国塔志郡和具郷」に相当し、答志郡衙ないしは志摩国府関連の重要地と考えられる。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告266

**おばたけ遺跡（第5次）発掘調査報告**

2006（平成18）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社